

第三号

道南女性史研究

— 明治生れのおんなたち —



目

次

はじめに	
一、駒ヶ岳に生まれて九十二年	中川フミさん……折登キミ……1
二、函館の夜市	中村ハナさん……小林八恵……9
三、女教師（その一）Ⅱ大正初期から昭和初期	秋尾ヒデさん……村元成子……17
四、女性写真師の草分けとして	小田島安佐さん……伊原祐子……29
五、老舗の女主人	石塚トメさん……佐藤恒子……42
六、養護施設「函館国の子寮」の創設者	柏倉シツエさん……立花千代……48
七、遍歴ののち野犬抑留所の管理人として	安岡キサさん……五十嵐綾子……60

特集

函館の髪結

(一) はじめに	近藤弘子	74
(二) 明治・大正期の女髪結について	近藤弘子	76
(三) 戦前の函館婦人髪結組合	酒井嘉子	80
(四) 明治・大正の代表的髪型	紺野洋子	88
(五) 大森遊廓の髪結として	平川ハルエさん	89
(六) 洋髪・パーマネントの先駆者	田口フクさん	102
(七) 浅蜷坂の髪結・福岡スエの弟子たち	佐藤タミさん	113
	若松タネさん	
	酒井嘉子	
参 考 函		131
あ と が き		132
会 員 ・ 会 友 住 所 録		133
発 行 所 在 地		133

表紙 高坂柳好

題字 村元成子

は　じ　め　に

道南女性史研究会が生まれて四年になる。全くの素人の集りにすぎなかつた会員であるが、研鑽をつみ、励ましあい、ようやく三号の完成をみた。今までに収録しきれなかつた明治生まれの、女の仕事を、ここでは十一人の人たちに語ってもらつた。

北海道の開拓期、駒ヶ岳の原野に根を下ろし、雑貨屋を営みつづけてきたひと。アセチレンの臭いにむせながらがむしやらに働く夜市の女。ハイカラなこの街の風土に根ざし、父の遺志をついだ女写真師や、商家の絆纏や、大漁旗を染め続けた女あるじ達である。

夫なきあと、生き甲斐を福祉施設づくりに求めた人や、女教師の豊富な体験を生かし保護司となり、社会奉仕に徹した女、ふたり。差別意識の中で、私がいなければと耐え抜いてきた安岡キサさんの人生。いづれも、明治生まれの気丈な女達の足跡である。それにもまして、函館の歴史的土壌とともに生きていた女髪結たち。厳しい徒弟制度の中で鍛えられ、したたかに生きてきた髪結たちの人生は、本号の特集となつた。

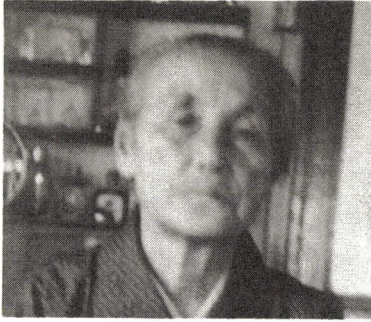
当時の女の職業は、自らそれを望んだのではなく、選ばざるを得ない状況に基盤をもつ。ために、体験出来ない話をなり代わり書き残す作業の難しさに出会つたものである。またしても充分に意を表現し得たとは思われない。女の労働が生きる糧となつて久しいが、戦争によつて働かねばならなかつた女達の心の遍歴にもふれてみたいと思つている。

多忙な仕事の中で、私達の度重なる取材にご協力を頂いた皆さんに、ここに紙上を借りて感謝いたします。

一、駒ヶ岳に生まれて九十二年

中川フミさん

折 登 キ ミ



今日もお元気な中川フミさん

私は明治十九年十月五日に宿野辺九番地（現森町字赤井川）に生まれました。先祖の垣原治六は天保二年七月（一八三一年）に津軽国平田村から来て、木材伐採業をしました。

その後、天保十三

年（一八四二年）に能登国珠洲郡から岩松長右衛門が移住して来て、木材伐採業をはじめました。

嘉永四年（一八五一年）に垣原治六、岩松長兵衛の二

戸がお助け宿（公益宿所）になり官米を年十二石補助されました。お上の御用で手紙を配達する人を泊めていました。その頃にはアイヌの人が配達をしていて、秋になるとお礼に鮭をもってきたそうです。この宿所は明治二年まで続きました。

万延元年（一八六〇年）本村の鷲ノ木村が、あまりに遠くて不便なので自治のために、独立したそうですが、二戸、十三人（男八人、女五人）で淋しいものでした。宿野辺村は、この二戸からはじまったのです。

父は入婿で仁助といい、私が生まれてすぐに亡くなりましたので、私は孫じいさんの垣原市三郎にそだてられま

した。

明治二十三年頃の駒ヶ岳山麓の宿野辺地区は、木材、新炭の産地で知られていましたが、この頃には年産六〇万貫（二二五万キログラム）もありました。堅炭で火もちがよいと評判で「宿野辺木炭」の名で、函館でたいへんよく売れました。

赤井川では「木村」という雑貨店が一軒だけで、あとは製炭業ばかりでした。

じいさんは人をつかつてすみを焼かせ、函館に出していました。山のすみ窯で焼かれたすみは「かます」に詰めて「だんつけ馬」の左右に二俵ずつつけて家の前まで運びます。一度あけて、改めてつめ直し口炭をあてて、俵をとじて出来上がります。すみを焼く人は木のたくさんあるところに「かま」を作つて焼くのですが、囲りに木がなくなると木のある所に移り「かま」を作つては、焼くのです。木炭の取引は年二回の会計でした。

今の高畑さんは、その頃から焼山に住むようになったのです。

こゝは能登（石川県）から移住して来た人が多く、門徒衆が大部分で信心深い人達ばかりでした。今のお墓のある所にお寺が一軒あつて、法事や葬式には七重や峠下から、お坊さんがわらじをはいて歩いてきました。

明治三十一年に駒ヶ岳部落ではじめて水田を試作しました。これは森村でもはじめてのことです。川村さんでも田んぼが少しあつたので、その稲わらでわらじを作りましたが、寒くて稲わらさえ取れない年もありました。

この頃、お米が高くなつて一俵五円になりました。木炭は一円五十銭でした。

学校は焼山が本校で宿野辺は簡易小学校でした。生徒は二十人程でした。石塔つくりをしていた家の馬場さん、宮崎さんは、じゅん菜沼からかよつていました。

先生は三浦先生でした。「ハタ」「タコ」「コマ」の本でした。うたは「君が代」やお正月とか何かの式に、うたう歌を習いました。みんな和服ばかり着ていましたが、何か特別の行事には桃割れをゆいました。

じいさんは「他人の飯を食わなければ、一人前になれ

ない」といつて私を三年生で学校をやめさせ、函館の馬車鉄道会社の社長宅へ子守に行かせました。二年程して主人は社長をやめ函館支庁につとめました。それと共に七重に家を建て引越しましたので、私は家に戻りました。

明治四十年頃の宿野辺村（赤井川、駒ヶ岳地帯）では二四六戸、人口は一五四七人でした。

赤井川に一軒、焼山に二軒のマッチ工場があつて、そこで働く人がだんだん増えてきて、^{さかき}逆川あたりには十軒ほど家がありました。

たいていの家は草葺屋根でしたが、ナラの四分板を瓦のようにしてふいた家がありました。葺き替えて取りはずすと薪になります。その家には空窓（そらまど）があつて煙り出しになつていました。大きな炉で丸太を焚き炊事をしましたし、おきで串にさした魚を焼きました。

窓は二重になつていて内側は油障子で、^{やまうち}という屋号がかいてあつて看板にもなるのですが、外側の板戸には縄がつけてあり、それを引いたり、ゆるめたりして板戸の開け閉めをしていました。

明治二年以後、お助け宿の制度がなくなつても、出入りの人が多いので泊めていました。一泊二〇銭―二五銭で道内の他地区より五銭位安い料金でした。

食料品は函館から運んできていましたが、春には落やわらびをたくさん取つて塩漬にし一年中食べましたし、ウバユリは四斗樽について澱粉をとりました。

山の中の水の不便な所では冬には雪をとかし炊事をしていました。

国道（旧国道）が出来てから国道に出て旅館をするようになりました。母の伯父は身体が弱かつたので家にて旅館の手伝いをしていました。本州から来た行商や富山の薬屋などを泊めるようになると監視がいるので、許可をとつて旅館業になりました。

春には寿都、岩内に行くヤン衆が函館から歩いてきて泊りました。森からは客引きがきて荷物だけ持つて行きヤン衆はから身で歩いて行くのです。

明治三十五年に尾白内浜で春鯨の大漁が続いてにぎわいました。夏には鮪漁、昆布とり、秋は鱈、鮭をとつたり畑作の収穫で忙しく、冬には鱈漁や冬山稼ぎ、自家用の薪の切出しをしていました。

明治三十二年四月二十二日に宿野辺郵便局が出来ました。局長には森村外五村の戸長をした三井勝用という人がなりました。旧会津藩士で村の人から尊敬されていた。朝夕、駒ヶ岳を眺め和歌を作り「駒ヶ岳百詠」外、一千首の佳吟が残っていますが明治の大切な資料になっています。

この年に株式募集をして私鉄函樽鉄道株式会社が出来ました。(後の国鉄函館本線)

明治三十五年六月に函館と小樽の両方から工事をはじめました。この時、じいさんの市三郎は鉄道敷地になる土地を寄付して感謝状をもらっています。

十二月十日には函館と本郷(渡島大野)間が開通し、明治三十六年六月二十八日に森まで開通しましたので、函館まで三時間で行けるようになりました。

六月二十八日に軍川と駒ヶ岳駅が開かれました。汽車が通るようになってから、人がふえ運送店が出来て、角材や木炭を扱っていました。

十七、八才の頃に裁縫を習いに函館に出て母と暮らし

ていましたが母が病気になる家財道具を売って、入院しました。母は元気になつてから、佐々木という家に再婚しましたが、しばらくして帰ってきました。

私は明治三十八年に十九才で中川栄蔵と恋愛で一緒になりました。佐渡の人で呉服物以外の品の中卸しをしていました。私は一人娘でしたが婿とりではなく嫁に行き函館で部屋をかりて暮らしました。三十才までに女ばかり五人産みました。

イ	チ	昨年五月十五日死去	七十才
千代乃	静岡県在住		七十才
ヨシエ	若くて死去		
キクエ	七飯町在住		六十七才
キヨ	幼くて死去		

大正二年の大火にあい駒ヶ岳に引揚げてきました。イチが若松小学校の一年生でしたので、母にたのんで、東川小学校にやり六年を卒業してから連れてきて、森の高等科に行かせました。夫は教育熱心で女の子ばかりでしたが勉強をさせました。高等科を出て、また函館の実践女学校に入れ寄宿舎に入れました。

その後、下の娘達も同じように函館の学校にやりましたが駒ヶ岳で上の学校に出していたのは女の子では、うちの子だけで男の子では、遠藤さん、小原さんでした。

長女のイチは二十四才で結婚しました。婿とりで子供が九人産まれました。現在男三人、女三人が元気でそれぞれ幸せに暮らしています。

この店をはじめから六十五年になります。夫は六十九才で亡くなりましたが、みんなで力を合わせて今の店をもちたててきましたが、今年の五月十五日にイチは七十二才で亡くなりました。

楽しいとき、悲しいときと、さまざまな思いで眺めてきたお山、駒ヶ岳は安政三年（一八五六年）八月二十五日に大噴火があり、焼けた石や灰が降り、折戸川の谷が埋まり、鹿部本別では家が焼け漁具、漁船もなくなつたといひます。火山灰が一〇メートルも積もる大被害でした。この噴火で駒ヶ岳と砂原岳とに分かれたのです。

西風が強く風下の鹿部、砂原が特にひどかったです。その後も毎年のように小噴火があつても、被害はありませんでした。

明治三十八年八月十九日には一〇〇〇メートルも噴煙が上がりましたが、大きな被害はありませんでした。

大正年間も毎年のように小噴火や煙の見えること、わずかの灰が降ること位でした。

昭和四年六月十七日の大噴火はひどいものでした。一日中、地震が続き夜中から煙が上がりはじめ、十時頃爆発が起きました。噴煙は一万三千メートルもあつたといひます。午後から石や灰が降り、焼けた溶岩が鹿部方面に流れ出て立木を焼き、夜は火柱が立ちました。あまりにひどくて不安になり、私は夫を残し子供を連れて汽車で函館に避難しました。汽車賃は無料でした。

大噴火から五十年たちましたが、駒ヶ岳はずっと静かで美しい姿を見せてくれています。

ここで生まれて九十二年です。長いようにも思い、短かかったようにも思ひます。

忘れたことや、忘れられないことが、たくさんありますし、もうすっかり忘れてしまったことも、たくさんあります。

大内栄さんのお話（駒ヶ岳在住 明治四十年生）

駒ヶ岳の噴火の日に、田かきをしていて水が下から盛り上るようにゆれるので「おかしいナー」と思ったが、それが噴火の前ぶれの地震でした。

田んぼの泥がよるような動き方をしましたが、そのうちにゴーゴーと山なりがして噴火がはじまったのです。

部落の人を集めて、年よりやお産をして間もない人を馬車にのせて、森町まで避難させました。

村中の人を出してから、私は臨時列車で八雲へ行きお寺に泊りました。

翌朝は九時から夕方の六時までかかって、やっと駒ヶ岳の郵便局と電話連絡ができました。

鹿部は全滅だが駒ヶ岳は大丈夫と聞いて早速に帰ってきました。

その夜は稲妻があちこちで、ピカピカと光り、溶岩は真赤でメロメロと流れて、火の海のようにでした。

三日目に田んぼを見に行きましたら、他所から来たという紳士がいて、山へ案内してほしいというので、新山さんの家のところまで行きましたが、溶岩が流れてきて登山道路を埋め、国道までできていました。

まだ石が焼けているので、地下足袋をはいた足があつくて、それ以上登れず途中で引き返しました。

立木は燃えなかつたので、山火事にはなりませんでしたが溶岩の下で蒸し焼きになり木炭になっていました。

陸軍用地のあたりでも堀ると木炭が出るので、その木炭を燃料に使っている家もありました。

山の上には石の五重の塔があり、その下に観音様のお堂もありました。

そのお堂に泊つたこともあります。お堂の前に水たまりがあつて、お詣りのときに手を洗う口をすくと、しぶい味がしましたが、噴火で流されたのか、五重の塔も観音様もお堂も、みんななくなりました。

今野ハツネさんのお話（駒ヶ岳在住明治四十一年生）

今の温泉の近くで雑貨店をしていましたから、山に近いので噴火がはじまると、あぶなくなりました。親せきに避難することになりました。

戸外に大きな穴を掘り、買ってあつた米十一俵のうち九俵と出来てきたばかりの客膳二十八分、お坊さん用のお膳とをゴザをしいて入れ、上からは又、ゴザをのせ、

土をかけました。

残り二俵の米は馬車に積み、その上に着がえをのせて鳥崎の親せきへ行きました。

その頃、私は嫁にきて長男を妊娠したばかりの若嫁で逃げるなら一番いい着物を着ようと思ひ、セルの着物に大きな花柄の帯を結ぼうと思ひ、気がせいて結べず「何をしている、早く逃げよ」と大声で言われました。はきものはその頃、流行のたみ表のキルク草履を、はいて出ました。

昼は地鳴りと地震、噴煙だけでしたが夜になると、すごい火柱とお手玉のように上がる火の玉が見えました。

稲妻が青光りに走り不気味でした。

翌日も、それが続きました。

一週間程して鳥崎から帰つてくると、山を見にきた人が列になっていました。

その中には外国の人が何人もいました。

屋根には灰が降り硫黄の臭いがしていました。

牛や馬は草が食べられず困りました。

避難していた人たちが皆無事に帰つてきましたが、この地区ではけがをした人はありませんでした。

めぐりあい

今年九十二才になられたおばあちゃん（中川フミさん）との出あいは、今から十五・六年も前で、私が夫の転勤で子供と共に駒ヶ岳に着任した昭和三十八年四月九日のこと。

駒ヶ岳に着いて先ずお酒を買つたのが中川商店で、その時お店にいてくれたのが、おばあちゃんでした。

その頃から何時もお店に居て、お若い話し声、身軽な動作で働いておられました。

此の度のお話を聞きに伺つた日に、おがませていただいたい仙壇が、二百年以上も昔のもので、御先祖から、引継がれ、釘は一本しかつかつていないという手のこんだつくり。大きくてどつしりと落ついた立派さから由緒あるお家柄であろうと推察した。

御先祖の垣原治六という人が、昔、唯一戸で移住し、木を切り家を建てて住みついたので宿野辺村のはじまりと聞いて家へ帰つた。その夜原稿の整理をしてから、何気なく開いた「森町百年史」の中に、その垣原治六という名を見て、アッと息をのんだ。

亡くなった親しい人にめぐりあつた時のような、おど

ろきと喜びが重なって動悸が止まらなかつた。

その後、移住された岩松さんと共に開村までの御苦労は想像を絶するものだったでしょう。

それから今に至るまでの歩みを九十二才のおばあちゃん、ずっと見て来られたのですから、「森町の百年」そのものです。

今も御元気でお店に来られる人と気軽に話し、商品の値段もよく知っておられるので感心しています。

まだまだ伺いたいことがたくさんありますから御丈夫でいてお話をきかせてほしいのです。

その後幸運にも御家族から、明治初年の頃の絵図にかかれていた垣原宅の、その頃の様子がわかる複写をいただくことが出来ました。

お助け宿（公益宿所）の頃でしょうか？

現在地と重ねあわせて考えると感無量です。

先人の御遺業に感謝して稿を終わります。

追分茶屋



明治初年の頃の絵図より（垣原宅）

二、函館の夜市

中村ハナさん

小林 八恵



最近の夜市（北海道新聞社所有）

はじめに

おばあちゃん”の代表格が中村ハナさん（八十二歳）と、知ったのだった。

中村ハナさん

在函一年半にしかならぬ私が、函館の夜市に働く女を、書こうと思ったもの、すべてが知らない事だらけであった。

ハナさんは明治二十九年十一月十八日、青森県三戸郡蔵石村中一に生まれた。青森県の東南部、果樹と酪農を基本とし、米、リンゴ、牛乳、木材などを主な産物とする五戸町の西に接する村である。

女性史入会が五十

父の名を小原イセ。母は小原シヨガ。ハナさんは四人

兄弟の末子であり、父親は役場勤めであった。

三年七月だった。その年十月十三日付『北海道新聞』夕刊「函館の郷愁・夜店散歩」なる、密着ルポ記事で夜市の存在を初めて知り、しかもルポ記事中、元気のいい”

深川に入ったが、生活はゆるくなく数年後岩見沢へと移

る。

体の弱かった兄達に代わり、イワシのモッコかつきをしたり、一日五十銭の出面に働くなど、ハナさんにはきつい毎日が続いたのである。

一昨年（五十二年）亡くなった御主人元松さんとは、親達を取り決めた見合結婚であった。「顔もろくに見ねえし式なんかもあげなかつた。」ハナさんは淡々とした口ぶりだ。子供は二人生れたが、長男は十八歳という若さで病死、助産婦として働く、娘のノブさん（六十二歳）と、現在は二人暮しである。

ハナさんは夜市で働いて、かれこれ五十年になる。「いろんな事があつたよ」頭にかぶつた日本手拭いを結び直したり、髪の毛をとかしつけたり、一口では語りつくせぬとばかり、言葉を探しあぐねているのがよく解かる。昔の夜市は現在とちがつて、夜中の二時、三時まで開かれていた。「家さ帰つて、リヤカーから植木下ろしたり、家の片づけなど終え、寝たと思つたらもう朝だべ。なんぼも寝ない毎日だつた。あの時ヤーゆるぐながつたな」その頃のハナさんと、現在は同じ年頃である。ほんの数カ月に一度でも、二〜三時に寝ろうものなら、翌日は相当こたえる。ましてやそれが毎日続いたと言ひ

のだから……。

夜市は安定した収入など望むべくもなかつた。ちよこちよこと元松さんは、昼間の勤めにもついたので「やれ階段から落ちたのなんのつて、どこさも永続きはしねえのよ」おまけに体もあまり丈夫ではなく、夜市もハナさんまかせが多かつた。「他の商売とちがつて、植木は土が相手だべー重いなんのつて、あつたもんでねー」売れば無論帰りは軽い。日によつて売れ残つた時など、どんな思いでトポトポ暗い夜道を帰つたか。リヤカーが女の細腕にぐんと重みを増したろう。その大切な商売道具リヤカーを盗まれた事もあつた。「あわてたのなんの商売も終わつたし、さあ帰るべーと思つたらリヤカーが無いのよ。仕方がねえから仲間の運び終わつたあとに、貸してもらい帰つて来たさ」さぞや難儀したろうに、今は笑つて話すハナさんだ。

夫の元松さんは大の野球好きであつた。「荷物を置くと、もういねえのよ。値段も教えねえで谷地頭球場（現市営温泉のある所）へ、自転車でぶつとんじやうのよ。それも野球するならまだ良 だつてば、見るだけでよ。あされたもんだつたてば。」言葉とは裏腹に、今は亡き夫を語るハナさんの目はあつたかい。

夜市では大正時代に、演歌師の歌なども聴けたらしい。ハナさんは双子歌手、こまどり姉妹がまだ十二・三歳頃歌っていたのをよく聴いた。「めんこがったし、うめがったーだどもあんまし聴いてると、銭っこ払わんならんべー、だから途中でやめて、又植木売したどもよ」ついで昨日の事のように、ニヤニヤと口元を押えて笑うハナさん、私までつられて笑う程楽しげであった。

夜市は冬期間店閉りする。だから生活はいつも苦しかった。旅館だの料理屋の下働きにハナさんが出て、なんとか食いつなぐ有様だった。「正月迎えるのに、どうやって年越ししてると、家の事考えで働いでいだら、よそから鮭のアラもらつて、それで三平汁こさえて皆で食ったという事もあつたしな」と、ボンリ、ボンリと話し続ける声は低くなった。

かつては十七軒もあつた植木屋が、今はわずか四軒。「米屋でも、お菓子屋でも、鉢花を売る時代だべーわしらはゆるくねえてば。」玄関に、所せましと並んでいる鉢花を、黙って見続け、言葉はなかった。

そして「わしゃ、あんまり自分から花を買えと、客に勧めるのは好かんのよ。本当にかわいがり、花を大切にしてくれる人だけ買ってほしいから」まさに、鉢花と

暮らした五十年が語る言葉であると、思うのだった。

初対面であまり長話もと、次回の訪問を約束して帰ったが、それから数日後ハナさんは入院。過労で倒れたそうで、娘さんの勤める中央病院へ現在も入院中である。

雨の降る午後病院を訪ね、「今日は雨だから夜市お休みですな」と、声をかけたなら「うんだな」とじつと窓の外を見続け「今年はもう無理だべー来年の春になるな」ハナさんには、温泉につかり民謡踊って一日が終わる生活などみじんも感じられない。どこまでも夜の市の女そのものを、感じたのであった。

「わしが生きてるうちはまだええけど、わしがいなくなつたらあれ一人だべ。なんぼかでも残しといてやりてえと思つてな」そう語る言葉には、六十歳を越した娘、ノブさんへのあたたかな母のぬくもりがあつた。

函館夜市振興会

昭和五十二年三月「函館夜市振興会」名称になる。以前は「夜店商業組合」と呼ばれていた。

会長は熊谷正次氏。まっ白な頭髮で一見学者風。訪問

した私を妻の妙子さんともども迎えて下さる。丁度来合
わせたと、副会長柳瀬重雄氏も同席、小一時間程話をう
かがった。会長は「おもちゃ屋」、副会長は「あめせん
べい売り」の方である。

道新ルポ記事に、「夜市ができたのは大正時代」と、
書かれてあるが、図書館で調べた新聞には、明治三十
一二年頃とあつた由を説明する。副会長の柳瀬氏は「へ
えーそうかい。いやーそうかもしんねな。うんだ！うん
だ！わしらの小せい頃からあつたもな。せばーやつぱし
明治かもしんね」会長と顔を見合わし、感懐深げである。
会長の熊谷氏は以前靴屋、金物屋、をしていたが、胸
を患い五年も療養所暮らし、その後夜市にたずさわる。
柳瀬副会長も、元は海で働くいさましい男だったが、身
体をこわし、この道に入つたと言う。

夜市には御主人だけが出るのかと問うと、「とんでも
ない。夜市はみんなおつかちゃんでもつてるようなもの
だ。夜市の女はよく働くし、とにかく大したもんだつて
ば。そこらのサラリーマンの奥さんには、ちと真似でき
ねえ位かせぐ連中ばかりさ」と、傍に奥さんがいるから
でもないだろうが、会長は力をこめて話す。

第一条から、第二十条に及ぶ振興会の会則があり、会

員は年間三万五千円を収め、道路許可証などすべてがま
かなわれるそうである。車の増加に伴いその許可証をも
らうのにも、苦勞しているのが現状だと言う。副会長の
話では、警察署長が代わると中には、「全道でもこんな
にして道路に店を張っているのはこだけだ。わしの代
でなくしてみせる」と、言つてのけた署長もあるとか。

又、会則の他に別に申し合わせ事項もあり、出店受付
時刻を厳守する事、五、六、七、八月は午後六時まで。
九月は五時三十分。十月は五時までとか。場所の権利を
他人に貸さない事。開業中に店舗の周囲に、車両やその
他の物体を置かぬ事など、十一項目を申し合わせ、厳守
され整然と営業する事とあつた。

しかし、この商売もテレビが普及してからは、客足が
ぐつと減つてしまつたそうだ。天気にも影響され雨が降
つたら休日だと言う。市の観光協会に加入したり、最近
は「今日は夜市が開かれます」と小型宣伝カーが走るな
どの努力がある。四月から十月迄が夜市の営業月であり、
それ以外は、各自何らかのアルバイト（正月のしめなわ
作りなど）で生計をたてている。「夜市だけで食べてい
るのは、私位なものでしょう」夏働いて、一冬で食いつ
ぶす生活だと、体の弱い会長はつぶやいた。

夜市の元祖は大町から

夜市がいつから始まったのか、はつきりとは解らないのだが、函館新聞昭和九年一月八日付「函館懐古座談会」と題した、岡田健蔵氏（現在の函館市立図書館創設者）ら知名人十名の対談記事があり、夜市について次の様に語っている。

『市の始まりは、明治三十一〜二年頃。蓬来町あたりがにぎやかなのに比べ、大町付近は淋しくなる一方で、なんとかしくなくてはと、大町の有志らが相談。大道に店を並べる様商人に勧めたのが始まり。』

店を出す希望者が少ないものだから、町内の有力者は店を出す商人に、夜店で使う石油を配ったり、赤飯をくれたりして、勧誘したがる程に人出がなく、客足を呼ぶのに相談し合い、余興の小屋掛けをして茶番をやったり、俗謡のようなものをして、人出を招くのに苦勞し、だんだんに客足も、店を出す商人も、増えていき、石油、赤飯を配るのもやめるようになった。それが五の市の始まりである……』

明治の三十一〜二年からだすると、ざっと八十年も

の歴史が夜市にはある事になろう。

三〇〇軒も並んだ夜市

大正四年四月二日函館新聞には、「序幕の恵比須町」とあり、函館の夜を飾る『名物の市』通りを賑はすと春を待ちこがれてた商人の出店した様子を大きく書いてゐる。

「久しく雪の中に春を憧憬れた人々は笑ひさざめきながら肩もすり合ふ程に行きつ戻りつ混雑してゐる。いつもながら景氣の良い売声の高い水菓子屋の台の上はまだみかん、りんごも色あせず、新しい夏みかん、だいだいの香が高い。おとなりの三錢均一のおもちゃ屋にはお父さんに手をひかれた坊ちゃん、お母さんにつれ立つたじょうちゃん方が幼いひとみを笑まして何れにしたらよからうかと小首を傾けて居るのも可愛らしい」と。

又、「女劍舞大入」とあり、「夜市の並ぶ近くの赤のれん屋や小間物の大和屋も繁盛し、女劍舞の小屋は大入りで前には大江山や辨慶や楠公決別の絵看板を見てる人が黒山を築いてお蔭で射的場のねえさん達もお忙しそりだった」と。

そしてこの日の「初市に一番売り上げの多かつたのは下駄屋さんで、急に道が乾いて足駄も履けず」とある。

大正時代は映画の全盛。寄席も大いににぎわった時期でもあり、夜市も現在とちがって明るい時間の午後二、三時頃から店開きしていたようである。

「常磐館の閉場の客や、巴座、宝町錦座帰りの客で近所の小料理屋や、そばやがにぎわったであろう」と、夜市開幕を知らせる記事は結んでいる。

夜市あれこれ

大正四年七月二十九日函館新聞夕刊には、「谷地頭にも先年設けられしも不結果に終わる」とあった。

夜市の移り変わりは、函館の街の変わり様にも順応していたようだ。大火前五、六メートルであった道幅が大火後、防火上二十七メートルにも拡大、車道、歩道に分けられた事。町名の合併。又、夜市の性格上人通りの多い遊廓との結びつきも重要であったと考えられよう。

夜市がにぎわった頃の様子を、当時の小学生が作文に書いている。大正十二年に発行された「函館の小学生」市役所内教育会発行月刊誌から。（図書館資料室所蔵）

夜市

常盤尋五 山崎イヨ

この間は久しぶりで夜市を見に行つた。おしろいをつけたどこかのねえさん、孫に手をひかれてよぼよぼあるくおぢいさん。綿あめやの前にむらがつて居る、どこかの子供そんな人がコンクリートの道をカタカタならして通る。貧弱なバナナを叱る様に大声でどなつて売つてゐるバナナ屋さん。うす暗い電燈の下にうずくまつてゐる神経のつぶそうな金魚屋さん。何時見ても同じものばかりでさつぱり珍しいものはない。たまに珍しいものがあると、そこには黒山の様に人だかりする。大きくて見上げる様なちつぽけな人間では到底見られない。それでもものびあがつて見やうとするので足の方に気をつけないためよその人の足をふむ「こらなんだいたい」などとたちまち談判をつけられるので私はそのたびにヒヤ汗を流した。ふまれた人はその物に名残が惜しいのか、大抵許して下さる。私はず

うと一通り見て帰って来た。

(評) 夜市は世の中の展覧会場です。それが
夜市の面白いところでせう。

(第五十七号七月号)

夜市

新川尋六 中川位一

此の間は萬歳館通りの夜市であつた。

僕は小さい妹をおぶつて外へ出た。コンクリー道を歩いてみると、ビュートと風が吹いて来た。市場は萬燈の如く電燈が光り輝いてゐる。いもや下駄屋、本屋等たくさん、その他の物を置き列べてゐる。「エ、ツりんご六ツで十銭だ安いぞもう一つつけて七ツ。」と言声もあれば、「ああ安い安い栗百目十銭だ」とあちら、こちらから呼び声がする。小さい妹はキャラメル買ふ、下駄買ふ、ぶんど買ふと言うのを僕が「今度母さんと来たとき、皆んな買つてもらふね」とだ

ましたりした。今夜は雨もふらないから人通が多い。

僕は手をひろげて見れば五銭しかもつてゐなかつた。「これで何を買ふ。」と幾度も胸の中で考へた。「甘納豆が好いだらう。」甘納豆屋の前まで来て甘納豆を五銭買った大きい甘納豆だ。小さい妹が「アマツトアマツト食べる。」と言ふので僕もたべても妹さくれてやった。実に味はうまい。「だから僕が好きなのはあたりまへだ。」と思つた。かうして又ぶらぶら市を見て家へ帰つた。

(第八十五号十一月号)

現在の夜市

今の夜市は五カ所で開かれている。一と六が行啓通り。二と七が宝来町高田屋通り。三と八が弁天の大黒町通り。四と九が花園十字街付近の日花通り。五と十が大縄町の中部小横通りで営業、三十一日のみ、休みとなる。

入院前のハナさんは自宅(千代台町)から近い、大縄町と行啓通りの二カ所にだけ、出ていたそうだ。

二と七、つまり二日、十二、二十二、七日、二十七日が、私の住む所からは一番近い宝来町出店の日である。

会長宅訪問十日後、初めてのぞいたのだった。

タコ焼。八百屋。アメセンベイ。おもちゃ。いり豆。

植木。セトモノ屋などが、本屋（浪月堂）の前に並んでいた。ピンク色の提燈が下げられ、黒字でくつきり夜市振興会」と文字が入り、植木屋に並ぶ柴のテッセンが一段とその灯りに映え見事だった。

おもちゃ屋では、白髪の上にもちこんと帽子をのせた会長の熊谷氏が、奥さんと二人小さな客人の相手をしていた。自宅でのブラウス、スカートとは一変し、これ以上重ね着できぬ程妙子さんはコロコロに太り、ズボン姿で笑顔を見せていた。やはり夜は冷えるからだろう。

そのとなりの店では、副会長柳瀬氏が白い上つぱりを着、水アメセンベイを売っていた。センベイをあやつるのか、水アメをあやつるのか実に手つきがたくみである。ヒヨイ、ヒヨイとはさんではセンベイが重なつていき、しばし、みとれてしまうのだった。一袋買つたら「ホイ一枚まけとくよ」と柳瀬氏がニコツと笑う。屋間はセンベイの耳とりが仕事とか。

タコ焼屋は夜市一番の繁盛ぶり、どれ程待つか解らぬ

位客が立ち並んでいた。大阪から初めて北海道へ、タコ焼を持ちこんだ人らしい。味もピカ一なのだろう。

そのとなりの八百屋では、敷物の上にべたーつと座りこんだモンベ姿の小母さんが、「このネギやわくてうめえつてば。ほれ、キウリみでえぐ味噌つこつげて食えばこたえられねえーちゃ」と、口八丁、手八丁忙しく新聞紙でくるんでは渡している。声を出すのも、お金のやりとりもすべておつかちゃんだ。後の方でゴンゴン箱から野菜をとり出していたのが、多分旦那だろう。

会長の言葉通り、「夜市はおつかちゃんでもつてるようなもんさ」に、うなずいたのである。

現在夜市の数は、わずか三十五軒。

函館人の郷愁とも言える夜市。末長く続けてほしいと思うのだった。そして、来年の春にはぜひ元気なハナさんを、夜市で見かけたいと思う。

参考資料

「函館昭和史郷土新聞資料集一」「私の函館地図」

「日本地名大事典東北六」「月刊函館の小学生」

「北海道ことは風土記」「質屋の金蔵」

三、女教師

(その一) 大正初期から昭和初期

秋尾ヒデさん

村元成子



ヒデさんの近影

文明開化を謳歌する日本の国は、明治五年八月三日、国民皆学をかかげて「学制」を頒布した。当初初等教育を大別して上等、下等の八年制に分けていた。

年令別に六才から九才までを下等と呼び十才以上十三才までを上等と区分する普通教育制をとった。しかし、国民に奨学の規定があつても教育する者の養成が必ずしも順調に事が運ばなかつたのも事実であ

つた。開拓期の北海道は、文部省の定める学制内容を即刻実施するのは困難な状況にあつた。北海道独自の方法が考案され、明治八年から逐次実施する方針を函館支庁はたてている。学校の教師としての指導者が、それまでの寺小屋や私塾の師匠では学力不足で問題があり、函館支庁の計画として、明治八年七月、会所学校に小学教科支習所を設置し、教員の養成に努めた。(北海道教育史)

文部省は、同年九月二十九日布告の教員令第三十七条で「教員ハ男女ノ別ナク年令十八年以上タルベシ」と、教師に男女差がないことを示し、更に第三十八条で、「公立小学校教員ハ師範学校ノ卒業証書ヲ得タルモノトス、但師範学校ノ卒業証書ヲ得スト雖モ教員ニ相応セル学力ヲ有スルモノハ教員タルモ妨ケナシ」と奨学政策を出し

ても、教員の養成が遅れている事実から急場を凌ぐ便法として、このような方策も取り入れることになった。

日清戦争後の女教員数は、徐々に、増加をみせてきたが、日露戦争終結の明治四十年からは、小学校令の改正により、尋常科六年、高等科二―三年の義務年限の延長が実施されることになり、急激に増えていった。しかし、内実は女子教員の力量を認めて採用にふみきつたわけではなく、日清戦争後の教員不足と、教育費負担を軽減するため、安い教員の雇用という名目上、女教員が次第に増加したともいわれる。その反面、女教員の採用につき女教員の長所、短所をあげ、受持学級を下級の一―二学年に限るなど、全体的に女教員の進出を抑える傾向にあった。

このように、需要が高まる一方、女教員を侮辱する発言等も教育会の会議の中で論議されていた時代でもあった。明治の末、青踏社の結成以来新しい女が流行語となるなど急速に社会的にめざませていった女性達の中で、女教員は教育会の無理解と偏見の中で、着々とその実力をみがき、全小学校教員の二七％が女教員で占められるまでに成長していた。

大正六年になって、北海道函館女教員総会が開かれ、

次いで九年に第一回北海道女教員研究大会が開催されるなど、北海道の女教員をとりまく周辺が俄に活気を帯びて進展してきた。

秋尾ヒデさん自身は、明治中期の後半に生まれ、末に義務教育を終えた。大正初期、庁立函館高等女学校補習師範科を卒業し、地方の小学校の訓導として自立の第一歩を踏み出し、昭和初期までの十五年を初等教育者としての責務を果された。私は、この十五年間の教師生活を通して、当時の女教師の生きた証言者として、ヒデさんの話をきいた。現在、女教師が全教員の半数以上を占めるまでに発展してきた状況から、大正初期の時代背景をかみ合せながら、男子教員と伍して何ら劣らなかつたであろうその実行力についても知りたい部分であつた。

次に、昭和初期から大東亜戦争にかけて終戦を迎えるまでの期間と、戦後、民主主義教育に転換した現代の教育の世界の中で、女教師がどのように制度を自分のものとして生きてきたか、取材者を変えて記録していきたいと考えている。今回の取材に応じて下さった秋尾ヒデさんは、市内松陰町十二番地の静かな住宅地に、次男の義秀さんと長女斐奈子さんと共に幸せな暮しを送っている。

今年八十一才になられたが記憶は確かなようだった。

教師への道

今年八十一才になられた秋尾ヒデさんは、明治三十一年の春まだ浅い二月二十七日、父野本房次郎、母ふさの長女として、青森県弘前市に誕生した。あとにも先にもたった一人の娘だったので、両親には可愛がられて幸せな幼児期を過している。日本郵船会社で船に乗る父の仕事の都合であちこち移り住み、函館の元町に転居した明治三十七年四月、宝小学校の一年生に入学した。

それまで自由に使用していた教科書が、初めて国定教科書に制定された時でもあり、読本が「ハタ、タコ、コマ」のしりとり風で語呂の合うものだった。修身書は、「コレハテンノウヘイカガオデカケニナルトコロデゴザイマス」といった、時代の特徴が浮きぼりにされた内容のものであった。その後、明治四十三年四月には、第二期の国定教科書が使用され、第三期が大正七年から昭和六年に至る年代に改定、実施されていった。

函館は昔から火事が多いところで、明治四十年の大火で類焼した一家は、母の実家青森へ転居し、ヒデさんは近所の新町小学校の四年生に編入することになった。

この年に小学校令が改正されなければ四年生で卒業していたが、改正された制度が義務教育を六年制に延長することになったため、小学校の五年生と六年生は生まれ故郷弘前市の大成小学校で学んだ。僅か六年の間に、三度の転校を余儀なくされたが、義務教育終了後、県立弘前高女に進学する。弘前高女時代「美人の音楽教師、昆先生の華やかな容姿や、数学担当の黒滝先生の印象が強く残っています。数学は好きな学科でもなかったけど、成績が意外によかったことが、今も記憶の中に残っているのでしょう」と、遠い過去に想いを寄せ、しっかりと口調で話していた。この時代の娘達が女学校に通えるのは、裕福な家庭の、しかも教育に関心を持つ両親の理解が必要であった。弘前高女の三学期の三学期、函館庁立高女に転入したのは、大正三年四月のことであった。

四年生の終了年限を終えて、補習師範科に一年学び、小学校訓導の資格を取り、大正四年の三月末日、晴れの卒業式を迎えたのである。最終卒業学校になった庁立高女は、明治三十八年四月に北海道では札幌庁立高女に次、二番目に設立された官立の女学校であった。現在、道立西高等学校と名称も変り、戦後の新しい教育制度の中で函館市の子女教育の任にあたる等、歴史あるその建物は風

格を具えて函館山の麓に建っている。明治四十年と大正十四年の火事に遭遇し校舎を新築したのが昭和三年のこととで、第一回目の卒業式が明治四十二年三月二十七日であった。

この女学校の特色を「高女論」と題し、「函館は植民地だから良妻賢母というより、独りで食っていけることが大切だと、裁縫学校へ通う者が多い。又、高女生の半数以上は教員養成である」(元木省吾編新聞資料集、明治四十四年十二月二十五日函毎新聞より引用)と書かれているように、ヒデさんが卒業した大正四年頃の函館区の小学校や、町村郡部の小学校の教師は、高女卒の訓導が活躍していた。

この大正四年の全国小学校教員の二五・九%に当る三八三二人が女子教員であったが、五四%を越えるまでになったのは、太平洋戦争終結後の新しい教育制度が実施された時で、男子教員が戦争に駆りだされ、極端な教員不足を補う形で女子教員の採用が行われていた。戦後の昭和二十二年頃からこの傾向が著しく強まってきた。大正初期の函館の女性の職業として、女教員や産婆、看護婦に髪結、水稼業か女中といった種類の仕事があった。その中で、女教員になるには、それなりの資格と素

養が要求されていた。

明治改革期の学制頒布の頃は、女子教員は極めて少なかったので、女教員養成のために女子師範学校の設立を試みたが、東京中心に行われる程度の心細さであった。

函館県立師範学校に女子学生が入学したのは明治十三年十月十五日のことであったが、僅か小学教科伝習所に十名が官費生として入学しただけの粗末さであったという。当時の函館県では、県立函館女学校を創設し、高等女学科と女子師範学科の二科を設置した。しかし、応募者がなく、十二月三日に廃止されたともいわれる。又、県立函館師範学校卒業生の中で女子十名が教育界に送りこまれたというが、その頃の師範学校卒業生には、就業の義務はなかったのである。その後、庁立高女補習師範科卒業生が少い教員を補充したり、秋田県等の師範卒業生が北海道の女子教員不足を補っていた。一方、明治開拓期の函館の女子中等教育が、官立の学校に先がけて、外国婦人の手によって設立発展してきた事実を見逃すことは出来ないだろう。私立遺愛女学校が明治十五年に米国婦人達の努力で生まれた。十九年には、フランス人オグストが元町に聖保禄女学校を建設して広く北海道の道南の子女を教育していた。外国人ではないが、私立六和

女学校が大谷女学校と改名し、遺愛や聖保禄と並んで道南の子女の教育に携わってきた。昭和の今日に至ってもその残された先人の業績は函館の人々の中に息づいている。

初めて赴任した長万部小学校

ヒデさんの庁立高女在学中に、父房次郎さんは、日本郵船会社を辞め、渡島管内の最北の地、長万部村字国縫で木工場を経営していた。地元の従業員十三人を雇い七馬力の蒸気機関を主動力に、一カ月に七トン車で七台から八台もの「下駄の歯」の材料を大阪方面に出荷していたという。下駄材はブナの木が多く、その原料は乾燥させてから出荷するため、いつも火災の危険から逃れられず、注意に注意を重ねても連続三年にわたる火事に見舞われた。悪いことは重なるもので、大正五年二月二十五日、父房次郎さんの急死に遭ったヒデさんは、悲嘆にくれながらも生活のために働かざるを得なかったのである。そこで、母の住む国縫の家に戻り、家に近い所という理由で、「村立長万部小学校」の教師となった。この日からヒデさんの自立の第一歩が踏み出されたのであった。勤務地は隣り村で、自宅から通える距離にあったが、

長万部村の西念寺に下宿することにした。下宿先は、庁立高女の先輩で小学校の同僚でもあった三浦キセさんの兄の家であった。明治十七年に創立されたこの寺は、函館本線の線路づたいの海側に建っていた。

長万部小学校の歴史は古く、『長万部町史』によれば明治十一年四月二十五日、開拓使函館支庁の「第九大区、二小区山越郡長万部村において公立長万部小学校設立、長万部学校と称し来る五月六日に開業式執行、この旨廣告する」（開拓使録第三十号）の公文書にみられる通りだが、長万部小学校の生徒は十七人で、ほかにアイヌの子が一人ぜひ開校の際に入学したいと申し出てきたが、保護者の出稼ぎで間に合わず、入学を見合わせることになつたといった話題は当時の世相を如実に物語って興味深い。

学制が頒布されたとはいっても、村民の教育にかける熱意は低く、当時の新聞によれば（明治十二年十二月三十一日）長万部学校は教員一名、生徒十八人。翌十三年六月では、教員一名に男子生徒十七人、女子七人の就学記録が発表された。政府は、明治十二年九月に学制を廃止して教育令を公布し、翌十三年十二月には改正教育令を公布した。改正教育令は、国家の統制を強化するよう

な道徳教育が強調されていた。

長万部村の就学率は、大正四年に入つてようやく上昇の兆をみせ、同年の学令児童就学成績表（渡島教育会報第十七号）には村全域で九三三名の学令児童に対し、九九・七九%の高い就学率を示し、管内二十六校の上位三番目の成績を収めるまでになった。村民の職業は、農業、漁業、商業とさまざまだが明治の開村期、北海道の奥地の札幌や小樽へ通づる主要幹線地帯にあたり、旅人の宿があつた。「学校の近くで町はずれの道が行きついた曲り角に『山崎旅館』があつて、その娘が私の組におりましたよ」とヒデさんは、六十五年前の記憶をきちんと整理され覚えていた。学校はその国道筋の村のほぼ中心に建つていた。明治十一年十一月に新築落成された木造平屋建七教室は、二百坪の広さで千坪の用地面積を持つていた。一教室の広さが十六坪で、現在の教室よりはひとまわり小さめで、屋根は葺葺、屋内体育館はなかつたのである。

佐藤兼吉校長夫妻に林教頭、三浦、田附、伊藤、久保田男子教員の七人は、新米教師を心よく迎えてくれた。

久保田先生は元軍人で妻子ある代用教員。校長夫人も教師仲間であつた。地元出身の先生は一人もおられず、

三浦先生は森出身の方だつた。訓導と呼ばれるヒデさんの初任給は十六円だつたが、男子教員でも無資格教員は代用教員で十四円と差があつて低かつた。その頃、女教員の月給が平均十二円三十銭、最高が四十円にもなり、最低が五円と差が開き過ぎ、資格が問われる代用教員の場合、平均七円五十銭で低かつた。（もろさわようこ著女の百年引用）「それでも、下宿代を支払つても家に送金できたもんです」と話すその言葉の中に、当時の物価の安さと、反面、生活の質素さを思ひうかべた。

授業の内容は詳しく覚えていないがと前置きして、当時の小学校の様子を次のように語つてくれた。

「佐藤校長は仲々厳格な方で、掃除も満足に出来ない私に、細かく指導してくれたものです。奥さんも先生で子供達が四人おられたようでした。そのお一人が、私の勤務した新川小学校で教鞭をとられた時に、私の息子や娘がお世話になつた不思議な縁でもありました。

その頃、私の組に朝野三太郎と呼ばれるアイヌの子が在籍しておりましたが、一学級に三人や四人アイヌの子供達が勉強していました。子供達の服装はそれは質素で、夏冬共に和服で素足の子が多く、洋服の女の児がいても金持ちの子供だけで、雪の日は、ワラ靴です。ランドセ

ルなんかありませんから、教科書は風呂敷に包んできま
す。遠くから通ってくるので学校に着く頃は肩からずり
落ちそうになっています。お弁当にヒエやアワのにぎり
飯を持つてくる農家の子は、昼食時が大変、冷えたヒエ
は食べるときにポロポロとこぼれます。それでも、弁当
は全員持つてきました。

学校の行事として学芸会や、運動会はやった記憶はな
いのですが、家庭訪問が一年に一度ありました。橋のな
い川を下駄を脱ぎ、袴の裾を胸まで持ちあげて渡つたも
のでした。川向うの部落にも生徒の家があつたのです。

年中行事に、毎日使っている机椅子を裏の川まで運び、
縄タワシでゴシゴシこすつて汚れを落とす作業があります。
子供達は張り切つて、この一年間お世話になつたお礼の
つもりで汗を流して洗いました。

ときおり職員会議が長くなつて手元が暗くなると、机
の上にローソクが立てられます。(電気がついたのは大
正九年)毎日の教案は学校にいる時に書いていましたが、
佐藤校長が支庁へ提出する文書の清書の代筆が回つてく
ることもあつて、下宿のランプの灯の下で毛筆で一字一
字丁寧に書いたものですよ。」このように大正初期の、
郡部の小学校生活は地味で、又、根気も要求された。

『長万部町史』に依ると、大正の初め頃は、この地方

の気候は低温が続き、凶作が尾を引き農家を初め、生活
貧困者が続出した。そのために、家に畳がなく、ヒエや
イナキビの穀を土間に敷き、その上にムシロを重ねてい
た。少し広い家ではその上にゴザを敷く程度のもので、
炉は土足でふみこむことの出来る「ふんごみ炉」。木の
根っこを燃やしていた。天井はなく、屋根に煙出しと採
光の小窓を抜いて窓のない家もあつた。草屋根だから煙
は自然に抜け、外からみると屋根全体から煙が上つてい
るように見えた。けむい上に衛生など考えないので、ト
ラホームに罹りシラミもついた。採光は空缶に灯芯を入
れて明るさを求め、ストーブやランプが入ってきたが、
一斉に取り入れたわけではなく、ランプが入ってきて、子
供達は火屋磨きはやという新しい仕事がふえたことになつた。
この地方の住民の衛生観念は低く、おまけに、住民の
暮らしぶりは決して豊かな方ではなかつたから、ランプ生
活で眼疾になる人が多かつた。小学校では、三月と十月
にトラホームの全校一斉検診が行われていた。

新任の頃、木工場の娘だから化粧はどんな風かと、好
奇心あふれる村民の目を意識したヒデさんは、僅か一年
の経験といえども身も心も立派に成長していた。

その頃、文部省の訓令によって、青少年の社会教育の推進として企画された「処女会」が誕生した。この「処女会」は、明治三十七年の日露戦争が尾を引いた格好で国民教化をねらいとする、青年団や、教育団体の官制化が生んだもので、長万部村に設立された日は、はっきりしない。校長が会長となり副会長にヒデさんが任命され、対象者が村の女子青年団員となっていた。この会の目的は女の身分である裁縫や家事、補修実習が中心になり、加えて修身も学んだ。花嫁修業のつもりでもあった。

「成人した当時の教え子達が、町会議長になつたり、議員になつてゐることを新聞で知りましたが、嬉しいものです。長万部へ一度行つてみたいと思つておりますが六十年以上経つていますから變つてしまつたでしょうね」と懐しそうに話していたが僅か二カ年だけの体験なのに、この村に寄せる想いは深いものであつた。

たとえ、それが青春時代の一コマにすぎなかつたが、ヒデさんの生きた土台のひとつになつていよう。

転勤した町の新川尋常小学校

大正の初め、全道を襲つた凶作と物価騰貴で教師にな

る人がいない。大正六年になり九九%にまで上昇した就学率の割に教員不足は深刻化してゐた。函館の新川尋常小学校が松風町、大門方面の発展につれ、人口が急増し、国有林を払い下げて開校されたのが明治四十五年五月十七日のことだつた。ヒデさんは、この学校で一年生女子組を担当した。長万部時代は男女混合組であつたから活気があつて楽しかつたが、こゝは静かすぎた。校舎は電車の湯の川線に面した便利な位置にあり、木造平屋の十二教室がコの字型に、正面玄関を中心とし応接室と教具室が左右に分れて建つてゐた。玄関が男女別々に設置されているのも明治、大正期の教育方針が窺われて興味深かつた。屋内体育館はなく、式典は廊下に並んで校長の訓話を受けた。校舎の土台がレンガ造りだつたことや、函館港や、大森浜が、校舎から見えたという話は、現在の街並みからは想像も出来ない。

大正初期から昭和初期にかけての女の子の通学時の服装は、和服に三尺帯を結び、前垂れをつけ、履物は下駄や草履だつた。

初代校長が藤沢誠太先生だつたが、ヒデさんの赴任した大正六年は三代目の佐々木小八校長で、校長室がなく職員室で執務されていた。職員室には男女半々位の教員

で、女教員は和服に袴姿で、男子教員は洋服姿で執務していた。体育の時間もそのままの姿でやっていった。

昔から函館の街は火事が多くその度に学校の焼失が一校や二校あった。その上、大正初期の凶作に続き、第一次大戦の軍事費用増大で、教育費が極端に減少され、その結果、二部授業の実施や、教員の欠員補充に無資格教員の採用が増加していた。新川小学校も二部授業を実施し、大正六年に十七学級中十学級が二部。七年になつて十二学級。十三年になつてようやく二十四学級中八学級が二部授業を実施する程に事情は好転していた。この急激な減少をみた理由は、当時、市内でも屈指の実業家三代目渡辺熊四郎氏が、大正六年四月九日に公立千代ヶ岱尋常小学校を建築して函館区に寄付したのを初めとして、大正九年三月二十五日に、区内の二部授業の教育界の困窮をみるにみかね、二部授業徹底を条件に、先の学校の増築費六万円と、敷地畑の千坪を越す土地の寄付を申し出てきたことに依るといわれる。

もはや個人の善意だけで解決出来ない状況に追いこまれていた函館区小学校児童保護連合会では、あまりの窮状に、区長の渋谷金次郎氏に「二部授業ニ依ル児童ノ損失時間ニツイテ」と各学校から寄せられた現状を披瀝し

てその改善案を迫る一幕もあつたとか。

女子組だけの二部授業を八年間担任したヒデさんは、八十名の児童を午前、午後の部と合わせて百六十名も指導した。テスト用紙も従つて一度に百六十枚。教室は机が壁際までびつたりつき、机間巡視は出来ないし、大声を出しても駄目でむしろ声量を小さくして工夫をした。

二部授業を担当する教師には、一カ月に僅か五円だが特別手当がついていた。これで気苦労が報われる筈がない。年号が昭和に代つて三年目の春、小学校最終学年を受け持つた時「母校の庁立高女に八名も合格した時は、それは嬉しかつたものです。この年から高女の入学選抜が内申書を提出しただけで合格を決める制度に変わつたのです。隣の組では、一人も合格出来なかつたときいて残念に思つておりましたよ」と、今昔を問わず教師は受験のためには気苦労が絶えることがなかつたらしい。

文部省は、昭和二年十月、中学校令施行規則を改正し、入学選抜方法の学科試験方式を全面的に廃止し、小学校長の提出する報告書に、人物考査、身体検査に依る入学者の選抜を行つて、人物考査には、口頭試問による本人の常識や素質、性行を調査して決定すると決めたのであつた。しかし、この制度も長く続かなかつたようだ。

妻と、母と、教師

郡部の小規模校から都市のマンモス校に転勤し、六年の年月はまたたく間に過ぎ去った。ヒデさんは二十六才の娘盛りになっていた。大正十一年の春三月、縁あつて歯科医師秋尾浩さんと結婚する。夫浩さんは、大正四年から函館駅前若松町に開業していた。浩さんの父親、つまりヒデさんの舅秋尾八四郎さんは、義学鶴岡小学校の校長を三十年間勤めた教育熱心な方で、嫁のヒデさんに「資格ある女子教員は貴重な存在だから恩給がつくまで勤めてみたらどうか」と、勤めてくれた人である。

義父の一言で、学校を辞めるわけもいかず、共働きを八年間頑張り通したが、「でもつらかった……」と、声の調子まで落とし、当時、誰にも言えなかつたであろう胸の想いをいつきに吐きだした。

「結婚した翌年の十二月の暮も押し迫つた二十九日、長男が誕生しました。幸いに、つわりは軽くすみましたし、出産予定日の一週間前から冬休み休暇に入っていましたから、そのために学校を休むこともなく、学校には迷惑をかけることもありませんでした。只、産休明けの

授乳が大変でした。一日に一度だけ昼食時間に女中が小使室まで連れて来てくれました。次の授乳時間は、夕方帰宅してからになりますから、この時間充分にふくませるのです。それでも不足する分はミルクです。よくお腹をこわす子でしたが、家で何でも食べさせられたからでしょう。母親も大変なら、子供も大変だったのでしょう。他に授乳期の先生がいて心強かつたものです。

朝七時出勤までに、自分の弁当と、家族の食事も用意し、朝は戦争のようでした。主人は、患者の診療を終えた夜は、組合の会合に出席し、又、町会の役員もしてそのため外出で家に居ることがありませんでした。だから、母親役の他に、父親の代りまでやつたようなものです。弘前から私の祖母も来て一緒に暮らしておりましたので、私の月給は自分だけで使うわけにはいきません。でも、主人は勤めることに反対もせず、理解を示してくれました。長男も新川小学校に通い出し、次男の出産を控えては共働きもつらく、義父のよくいつていた『恩給のつくまで……』（その頃は十五年で恩給がついた）働き、昭和五年の九月に退職いたしました。」

専業主婦になつても忙しさにかけては少しも変らなかつたそうだが、気持ちの上では随分と楽になつたともい

う。

ヒデさんの教師時代は、いまほど保育施設は十分でなかったし、制度も整ってはいない。義務教育制度が四年制から六年制に延長され、教員不足が深刻になっていった時代であったから女子教員の必要性は認められながらも、保育所設備や、有夫女教員の優遇措置は皆無に等しかった。女教員の産前、産後の休暇に関する要望は強く、大正九年の第二回全国女教員大会で「有給休暇を八週間にしたい。休暇中補助教員を配置して欲しい」と決議されている。文部省は、大正十一年九月、この要望に応えて訓令を出し、産前、産後の休養を六週間と認め、補充教員の指示を出しているが、法令が即実行に移せない各地区の事情もあり、『函館教育会誌』二一八号（大正十一年七月八日発行）の中で、女教員の分娩問題について率直な意見がのせられている。「女教員の分娩休養というものが大分やかましく論議されてきた。あちこちの女教員会議や何かで休養期間はまちまちであるが決議されておる。この点について従来しつかりした法令なり準則がなかったのは誠に遺憾である。早く法規の制定が望ましい。けれど、学校側から眺めると実際苦しい事である。女教員の多い学校では一カ月以上休養の者が相ついで起き

る。補欠の教員はかけ持ちでは容易ではない。これよって起きる児童の迷惑は、教育上の損失も夥しい。補助代用教員を使うとすれば経費が多くかかる。それで東京の郡部では休養期間中、その俸給を日額いくらで差引き、この分をその補助代用者に交付するという。

これでは、子供を産めば一カ月なり、一カ月半なり飯が食えぬこととなる。教育法規を無視し、分娩を罪人扱いにするようで誠に感心出来ぬが、それでも東京の女子教員はその方がむしろ気楽に休養されて結局よいという。矢張り女も江戸つ子式だね」と。有夫女教員の立場に同情的な発言のようにききとれるが、無給休暇推薦の弁にもとれる。事実産前二週間、産後六週間の有給休暇が認められるようになったのは、文部省の大正十一年九月十八日の訓令第十八号からであった。

しかし、財源の乏しい市町村では補充教員を採用出来ないで、産後の休養を必要とする女教員の授業等については、他の学校の教師が代行したり、合併授業を行なうなど、多くは学校内でやりくりしてその期間の学級運営を行っていた。そのため、中には出産間近まで教壇に立つ女教員がいて不思議ではない時代でもあった。ヒデさんも健康なのが幸いして休暇はとっていない。

さて、大正初期の新川小学校の校区は広く、大森町、新川町、松風町を中心に、遠く高盛、柏木、杉並町の街はずれからも生徒は通学していた。家庭訪問に出かけた家の戸口は、板戸の代りにムシロを下げている家が多く、粗末な暮しは前任校の長万部小学校よりひどかったようにも思えた。

この地域の住民は、経済的に恵まれない家庭が多く、義務教育さえ満足に受けられない児童が増加していた。

函館区では、このような事情から大正六年四月に、義務教育未就学者を学習させる夜学校を新設した。第二尋常小学校と呼ばれるこの学校には、当時、三十名の学童が在籍していた。これらの歴史とともに歩いたヒデさんの十三年勤務していた新川尋常小学校は、函館市の東部発展の影響をもろに受けて児童は急激に減る。昭和五十二年二月二十六日、その名も「中部小学校」と改めて十六年の歴史と校風を遺し、大正元年に始まり昭和も半世紀に渡る教育の場の中で、多くの人材を育てあげてきた功績を称えられその幕を閉じた。

女教師だからといって特別気をつかったこともないと言われるが、学校という職場の中で半数を占める男女の

比率から推して想像すると、能力、実行力を特に要求される厳しい職場だけに、実力を思う存分発揮出来る女性の仕事として、ヒデさんにはやり甲斐のある職場であつたらしい。

妻となり、母となつても仕事を続けた日々、健康を誇りとしながら、それだけでは乗りきれない人生だったと思うが「私はつまらない人間ですからがっかりしたでしょう」と大変気にされていた。

しかし、夫なき後、今日までの二十五年間に及ぶ保護司の仕事は、教師時代の体験がものをいい、現在のヒデさんの生き方の重大な支えになつているのを見逃すわけにはいかない。弘前生まれのおっとりさが、八十一才の現役で働く原動力になつていたのでろうか。昨春秋、古井法務大臣から永年の功績を称え、犯罪者の更生に尽力されたと感謝状が届いた。「今日、子供が年寄りと暮らす人が少なくなつたのに、私は幸せ者です」という。私は本当の幸せを知っている方なのだろうと思つた。

参考資料

- 「学制百年史」「閉校記念誌新川」「長万部町史」
- 「日本教員史研究」「北海道教育史」
- 「女と教育（もろさわようこ編集解説）」

四、女性写真師の草分けとして

小田島安佐さん

伊原祐子



安佐さんの近影

函館における写真術の始まりは、日本写真史（平凡社）の記載によると、

安政五年（一八五八年）コンユゲピッチは、初代ロシア領事として箱館に駐在、この時に湿板写真機を持ちこむ、木津幸

道初の写真場を開き、明治二年東京へ移り、着色写真を發明する。木津幸吉と共に写真を研究し、のち木津幸吉の写真機一式を譲り受け、千五百円を投じて会所町（現末広町）に写真場を設け、函館写真業の元祖と言われる人に、田本研造がいる。

田本研造は紀州（現三重県）の出身、青年の頃長崎に出て吉雄圭齊のもとで蘭医の勉強をするが、安政六年（一八五九年）通詞、松村喜四郎について箱館に渡つてきた。文久年間に壞疽にかかり、ロシア領事の医師、ゼレンスキーより切断手術を受ける。これが縁で、ゼレンスキーより写真術を学び、写真師としてスタートする。

吉は足袋職人であったが、コンユゲピッチから写真術を学び、元治元年（一八六四年）その頃は、新地新町と呼んだ船見町九十番地（現道南青年の家向い辺）に、北海

慶応二年（一八六六年）松前の福山城を撮影し、明治四年北海道開拓使の要請で石狩に渡り、数多くの開拓施

設の写真を撮影した。この頃写真師としての号を「音無榕山」と名のり、写真撮影の手当は、一日三両であった、（この頃米一升約四銭で、一俵が一円八十銭とすると十八俵も買ったことになる。）と記録にある。

田本研造に湿板写真法より進んだ技術の印画法写真術を教え、共に研究もした人に、横山松三郎がいた。

明治二十七年頃函館には、田本研造を師にもつ写真師が独立、また、神戸や横浜で写真術を学び、函館に渡り写真館を開業した人など、十一軒の写真館があつた。

田本研造は、明治四十年十月、七十六才で函館で逝くと記録にある。

市役所前のグリーンベルトを電車通りに向つて歩いて行くと、交差点の角に、赤いレンガ風の建物がある。市内では、古い創業を誇る写真館、規光堂である。"規光堂のおばあちゃん"こと小田島安佐さんが、道南で初めての女写真師であることを知り、その生涯のひとこまを聞き書きするに至つたのです。

私にとつて、聞き書きは、初めてのことでしたので、会員の村元さんに同行をお願いしました。

玄関を開けると真つ先に目に入ったのが、四ツ切大の可愛い赤ちゃんの写真と家族の記念写真、そして美しいウエディング姿の花嫁さんの写真でした。通された二階には、広いスタジオがあり、安佐さんが長年愛用された、カメラと最新式のカメラが、また、しゃれた椅子や、ブーケ、お人形に、ガラガラなどが備えてあり、壁には、人生の節々に写したであろう人々の、入学式、七五三、成人式、お見合用ポートレート、そして華やかな婚禮写真が飾つてありました。和室に通されるとまもなく、安佐さんがみえられました。初めてお会いした安佐さんは、小柄な方でしたが、とても七十八才とは思えない若々しい方でした。「生活のために夢中で過ごしてきましたから」と、きさくに話してくださいました。

生いたち

安佐さんは、明治三十四年八月二十九日、岩手県黒沢尻（現在の北上市）に、父平藤久五郎、母タカのひとり娘として生まれる。当時の黒沢尻は奥羽街道の宿場町として、また北上川の舟運の積換港として栄えた町でした。久五郎さんは、黒沢尻では名の通つた指し物師でした。

「幼なかつたので事情はわかりませんが、父と母は離婚し、父は小田島の姓に戻り、独り函館へ渡つたのです。その翌年、母は父の後を追つて函館に渡つてきました。私が六才の時でした。」

私は、七カ月の未熟児でしたから幼い頃は体が弱かつたのですが、函館の潮風に鍛えられ元気になりました。住居は旭町でしたから、小学校は東川尋常小学校へ入学しました。小学校の頃は、体が小さかつたのでいつも一番前の席でしたが、成績が良くいつも一番でした。手先が少し器用でしたから、習字と絵が上手なので、ちょっとばかり名が通つておりました。」安佐さんは、ちょっとはにかみながらも懐しそうに話されました。

小学校の卒業式では、その頃は、男の子しか読まなかつた答辞を、女の子で、安佐さんが初めて読まれたそうです。

安佐さんが小学校へ入学した頃、久五郎さんは、独学で写真の研究を始めました。安佐さんはその頃のことを「父は、指し物師としての腕も良く、公会堂の能の舞台を造つて納めたほどでしたが、写真が大好きで、当時高砂小学校の用務員をしていた上杉さんから写真の技術を習い、自分も夜遅くまで研究しておりました。子供の頃

でしたので毎晩遅く迄起きてる父が不思議に思えたものです。」と幼い日の想い出として話しています。

腕に自信を付けた久五郎さんは、明治四十四年頃から出張撮影を始めます。大きなズツクの鞆にカメラ一式を入れ、下海岸や、木古内方面にでかけ、一軒一軒訪問して、家族で撮るよう勧めたり、また、お祭りの時は出かけて注文をとつて写したりしました。大正二年鶴岡町現大町十八)に営業していた指し物の店(建具店)を、自分の手で改築し、写場を造り、写真館として営業することになります。写真館の屋号は、宮師(神社やお寺を建てる大工)をしていた久五郎さんの父親から「規光堂」と名付けてもらい、久五郎さん自身も写真師小田島麗水と名のり、技師を置いて営業を始めました。しかし、田本写真館をはじめ、大きな写真館が営業していたので、経営は大変だつたそうです。

商売熱心な久五郎さんは、なかなか入れなかつた千代岱の重砲隊に、御用商人として入ることを許され、兵隊の写真を撮ることになり、兵隊の都合の良いようにと、千代岱に支店をつくり日曜日ごとに、自転車を通つていました。また、重砲隊の仕事をしていた関係で、大正十年七月陛下(現天皇陛下が皇太子の時)が御来函の時、

函館山（当時は要塞地帯で誰でも登れなかった）に随行し、砲台を写し、大きく引き伸ばし、沐浴をして作った桐の箱に収めて献上する名譽ある仕事もされました。

大正十三年八月十八日、千代岱の支店へ自転車で行く途中、駅前の郵便局前で交通事故に会い四十八才の若さで亡くなりました。

女写真師としての出発の日々

小学校を首席で卒業した安佐さんは、庁立函館女学校（現西校）へと進みます。

「女学校の入学試験の成績は三十三番でしたが、この成績では女学校を続けることは無理だと父はなかなか許してくれず、同業者でもあり、親しくしていた大沼の田中さんが、札幌と函館よりない学校で全道から優秀な人のみ受けるんだから中より上の方なら良い方だ、と口添えしてくれ、やっと入学できました。女学校時代は、参考書など買ってもらえませんでしたから、毎日図書館に通って勉強したものです。当時の女学校は、お金持の娘さんが多く、私共しもじもは肩身のせまい思いをして通学したものです。」と話す安佐さんはその頃すでに自立

の道を目指していたのです。

当時女学校卒業時の成績が五番迄は、学校の推薦で、高等師範学校へ入学でき、安佐さんは、四番でしたので奈良県立女子高等師範学校へ進み、女教師になろうと考えていたのです。しかし、ひとり娘であるため、親元を離れることは許されず、写真館の跡継ぎとして修業することに なります。

十九才の時、宝来町の紺野写真館に修正の技術を習いに一年間通い、また、お父さんの手伝いをしながら、撮影技術を習い、写真技術を習得したのでした。

「父は、大変厳格な人でしたから、仕事に対してとても厳しく、あまり叱られるので、なるべくそばに近寄らないようにしていました。また、一度教えた事は、二度聞いてはいかんと言われたものです。この頃は、写真の仕事が嫌で嫌でしかたなかつたんですよ。」と話す安佐さんでした。

結 婚

安佐さんは二十才の時、福山の廻船問屋「清水屋」の息子、虎吉さんと結婚されました。安佐さんは、その頃

のことを「夫と結婚する迄にはいろいろと経緯がありました。内地の伯父さんが、小田島の養子にと言つて連れて来た人を、私はどうしても好きになれず、かと言つてまごまごしていたら結婚させられてしまいます。私は、心を決めて、着のみ着のまま、清水の許へ行きました。初めは大変驚きましたが、苦小牧の知人のところへ匿つてくれました。しかし、すぐわかつてしまい、結婚を条件に、家に連れ戻されました。夫は、長男でしたから、一度、清水の家に嫁入りし、改めて小田島の家と養子縁組をし、小田島の姓を名のり、家業を手伝つておりました。父母は、夫をあまり気に入つておりませんでしたから、間に入つて大変苦勞もありました。」安佐さんは、情熱的で意志の強い方でした。

翌年には、長男久雄さんが生まれ、幸せに暮しておりました。お父さんの突然の死によつて写真館の仕事は、安佐さんが継ぐこととなります。安佐さんは、二十四才になつておりました。

「父が亡くなつて一時はどうしようかと考えましたが、親孝行のつもりで遺志を継ぎ写真館を続けようと、決心したのです。しかし、父の生存中は、嫌々やっていたので十分な技術を身に付けてませんでしたから、もつとし

つかり技術を習つておけば良かったと悔やんだものでした。」と安佐さんは話されました。

“これで生活して行かなければ”と考えた安佐さんは女写真師として生きるべく決心をしたのでした。しかし営業年数も浅く、また、年若い女写真師など、なかなか相手にしてくれなかつたのです。

“女でも男に負けない良い写真を”と考え研究を続けました。

「どうしたらお客様のお気に入つた写真が撮れるようになるか、と考えると夜も眠れませんでした。が苦勞だと思つたことは一度もありませんでした。」こう話す安佐さんに女写真師として生きる決意の強さを感じたのでした。

勤を働かせる写真撮影

明治から大正にかけての写真撮影は、まだ日光を頼りの自然撮影でしたので、写場も光が取り易いように普通の二階建の家より高く、写場内には、光の調節のために厚い布地の白、黒の幕が張りめぐらされてありました。

安佐さんは、その頃の撮影方法を「お客様を撮る時は、幕を少し開けて、写す人の顔に光が当たるよう苦心したも

のです。光線の加減が、午前と午後、雨の日と晴の日、とさまざまですからね、光線をみながら、調節してレンズをしぼり、シャッターを切ります。暗い時にはタイムで撮るのでから時間がかります。お客様が動くなあとと思う時は『首押え』を使って写したものです。夜、撮る時には、マグネシウムをたいて写したものです。」
常に勘を働かせてシャッターを押さなければならず、何度も何度も写し、シャッターチャンスは、身体で覚えたそうです。

「写した乾板を現像してみると、露出の加減、光線の取り方の加減によって、濃かったり、薄かったりしますから、それをまた薬につけて補修するのです。印画紙が堅いのと普通のと二種類ぐらいしかありませんから、ネガ作りは大変でした。また、現像した乾板を修整するのも大変でした。暗室の電気の下で鉛筆を使い、鼻の低いのは囲りを黒くし、鼻のところに白くすると高くみえ、口の大きいのは、囲りをほかして小さくします。シワやシミなどもいねいにほかしてとります。写した人が、なるべく美人にみえるよう、充分気を使い手間がかかりましたから、毎晩遅くまで働いたものです。」

当時の写真は修整の技術によるところが多かったので

す。

「修整した乾板を焼付けする時も、木の枠に乾板を置き、その上に印画紙をのせ、ずれないように四角を押さえて、日光で焼いたものです。天候によって左右されまので、仕上がるまで長くかかりました。」安佐さんが、写真を始めた頃の写真の工程を楽しく話されました。

この頃は、物価が安かったので、一日に三組も写すと生活できたそうですが、収入が不安定だったので、生活は大変だったそうです。

『北海道写真百年史』の記録には、大正末期の写真の定価は、手札判一円五十銭、名刺判八十銭、合判二円五十銭、キャビネ判五円、四ツ切二十円とある。

新しい技術を覚えて

オリエンタル写真工業株式会社の創立者、菊地東陽氏はアメリカから帰国後、自社の製品を広く宣伝するため、自社の開発した感光材料を用い、また、新しい技術を取り入れ、昭和四年八月、全国の写真館関係者を対象に六日間の講習会を開いたのである。

安佐さんは、この頃を思い出し次のように話されまし

た。「長女を産んでももない時ですが、母にたのんで喜び勇んで出かけました。講習は、朝八時より夕方の四時迄でしたが、お乳は張ってくるし、東京の暑さにも慣れていないし、大変でしたが、何とか人より進んだ技術を身に付けたい」と思う一心で頑張りました。

受講生は、五十五人、そのうち女は、私と、島根よりいらした谷さんだけでした。写真に関するすべてのこと、薬品、化学技術、修整と、何から何までおそわったのでとても自信がついて嬉しかったです。しかし、女が仕事をすると目立つ時代でしたから、困りに気を使いながら働いたものです」と安佐さんは、新しい技術を覚えた喜びと、当時の働く女性の立場の辛さを語っています。

安佐さんは、頑張りました。女ですので、男の気のつかないところに目が届き、髪のみだれ、着付け、化粧と手の位置、足の格好と、できるだけ姿に気をくばって写し、また、赤ちゃんを撮る時など、泣いて、なかなか撮れない時でも気長にあやして、表情の一番可愛いところを撮るよう努めました。努力が実り、信用も出て、「女と子供を撮るなら規光堂がうまいよ」と評判になり、お客様も増えたのです。

「お客さんのみえない時は、暗室の仕事があります。

現像、焼付、引伸し、修整と、夜の二時、三時迄も働きました。そのうち学校の卒業写真も手がけるようになり、時には十校も写し、今のうちに、水洗器がない時代でしたので、二月、三月の寒い時期に、一枚一枚、水に手を入れて洗わなければならず弟子達は一番いやがりました。お客様がくると写場へ、あとは、ほとんど暗室で仕事をしておりました。」安佐さんは、写真の仕事一筋に励んだのでした。

母の思い出

安佐さんが写真の仕事に励むことができたのは、お母さんの助けがあつたからでした。安佐さんは「母はとも働きもので、女中はおりましたが、いつも十三、四人の家族の食事を一手に引受けてくれておりましたので、とても助かりました。子供達も当時としては珍しく、

東川町の市立の幼稚園に六人共、送り迎えして卒園させてくれました。時には、近所の子供達を十人ほども連れて万代町の海岸へ海水浴に行つたこともありました。子供達の世話から、大勢の技師や弟子達の食事の世話と本当に良くやつてくれましたので、感謝しておりました。

しかし、頑固な面もありまして、お産の時も出産ぎりぎりまで働きましたが、座産でしたから、二十一日間、立膝で寝せられていました。冷すと悪いからと、布団から手足を出すことさえできず、喉が渇くと、熱い番茶を飲ませてくれました。お産婆さんが、今はこんなことしなくてもいいと言つても母は頑として聞き入れませんでした。頑固な母に育てられたお陰でしょうか、私も、子供達も、身体は、丈夫なんですよ。

母は信心深い人で『金光教』にお参りしておりました。戦時中の生活の無理がたたつて、終戦の年に亡くなりました。当時、六十才を過ぎれば老年とされ医療も満足に受けることができなかつたんですよ。」安佐さんの四五才の時の想い出として感慨深く話されておりました。

手づくりの洋服で

技師、弟子、子供と大勢の家族の生活は、経費も掛かり安佐さんは、人知れず苦勞もされ、何とか切り抜けなければと、元町の公会堂で西島式洋裁の講習を二日間受け手引き書を四冊買われたそうです。

「子供達の下着を初め上着、男の子のワイシャツ、女

の子には、ドレスの丈を短くしブルマーを付けて、全部手縫いですから、夜も寝ずに作ったものでした。でも可愛くできた時は、つらさは、忘れてしまひましたね、私も、出張撮影の時は、洋服の方が活動的ですから、ブラウス、スカートを作り、近所の泉靴店に編上げ靴を注文して作つてもらひ、写場の板の間を利用して、歩く練習もしました。その頃は、洋服を着て街を歩く人が少ない時でしたから、ジロジロみられ恥ずかしく思つたものでした。」安佐さんは、手作りの洋服で経費の節約に心がけ忙しい仕事の合間にもちゃんとおしゃれな心にかけていた方だったので。

大火の時の話

安佐さんは、昭和九年の大火のことを、「私共は、重砲の官舎に避難しておりました。家は、焼けてしまつたと思つていましたら、風向きが変わり、焼けなかつたんですね。写場のガラスも一枚もこわれずになりましたから、やけ出された親戚知人が、三十人も集まつて、とても賑やかなものでした。食事は、当時旧棧橋の橋谷さんより俵で米が届き、漬物も四斗樽にぎつしりありました

から、味噌汁をつくってだすと、よろこんで食べてもらいましたので、家が見つかるまで一カ月位おりました。が、何の不自由もありませんでした。しかし、一面の焼け跡をみて、これからどうしようかと思いましたが、気を取り直して、方々の焼け跡を写し、焼き付けして店の前に出したのです。ところが、地方より見舞いにきた人達が記念にと、買ってくれましたので、作りきれない有様で、おもいがけずもうかりました。お陰で皆様が何日いても少しも困りませんでした。」思わぬ災難に遭われたにもかかわらず、常に前向きに生きてこられたのです。『昭和九年三月二十一日住吉町から出火、二万四千百八十六戸焼失、死者二千五十四人、行方不明六百六十二人』という大火となったのです。

戦時中の話

昭和十二年日中戦争が始まり、日本は段々に暗い世相へと進み、昭和十二年九月、「輸出入品等ニ関スル臨時措置法ニ関スル法律」の公布によつて、これまで、ほとんど輸入に頼っていた、カメラ、乾板、薬品、フィルム類が輸入禁止となり、昭和十三年四月一日、国策により

国家総動員法「国防目的達成ノ為國ノ全力ヲ最モ有効ニ發揮セシムル様、人的物的資源ヲ統制運用」の公布により、統制時代へと進み、昭和十六年の太平洋戦争でますます厳しい統制が施行されたのです。企業統制、物資統制により、感光材はもとより、電気、水に至るまで配給制となったのです。

安佐さんは、戦時中を思い出して「仕事は、戦地へ行った人に送る、家族写真を撮る人が多かったので、けっこう忙しかつたんですよ、男の人は、次々と召集されて行きましたから、働く人がいなくなつてやめた写真館も多かつたんですが、私は女でしたから召集されることもなく、主人は警防団で家にいることはまれですし、弟子も入隊し、長男も工兵隊に召集されましたので、男子は一人もありませんでしたが、長女に手助けしてもらい頑張りました。家の前に（現在の場所）防空壕を掘ることになり掘るには掘りましたが、地盤が低いので、いくら掘つても海水が湧いて大変でした。また、灯火管制で灯りがもれていると、大変叱られたものです。

戦争がだんだん激しくなつたので家族は、時任町へ疎開しました。このすぐ裏に焼夷弾が落ち、強制疎開することになり、周りの家は次々に壊され、私の所は、建

物が高く窓ガラスが多かったので最後になり、いよいよ明後日壊すと言ったら終戦になり壊さずに済みました。そのお陰で今日まで残っているんですが、この辺では、一番古いんですよ。

現在私の後継ぎをしている長男ですが、太平洋戦争に三度も召集されました。三度目には下士官として樺太に行って行方不明になり案じておりましたが終戦になると樺太より第一回目の引揚げ船で無事に帰ってきました。

長男は、今の函館中部高校を卒業し、大学へ進みたかったので、校長先生の推薦で税関に勤めることになりました。戦前、戦後と十年間勤めましたので、結婚を機会に、税関をやめ、私の後を継いでくれることになりました。嫁と二人でやってくれることになり、本当に助かりました。安佐さんは、嬉しそうに話されました。

御主人の虎吉さんは、律義で子煩悩な方でした。安佐さんのお話では「一度税金を納めるのが遅れたことがありましてね、その時、税金は期日に納めるものだ！と大変叱られました。夫ながらなんと融通のきかない人だろうと思つたものです。昔は何を言われても絶対服従でしたから、口答えなんかできませんでした。今の人は、対

等に話せて本当に幸せだと思えますよ。」とのお話に明治の女の耐える姿を感じたものでした。

虎吉さんは、子煩悩な方で、夕食の時など家族全員が集まるのを待つて、自分の傍にシチリンを置き「魚は焼きたてがうまいぞ」と言つて、子供達に焼きたての魚を食べさせるほどでした。また、大変お酒が好きで、安佐さんは「戦時中、主人に何とかお酒を飲ませてあげたいと思ひ、おいしいドロクの作り方を教わつたものでした。戦時中に田本さんに代つて写真師組合の組合長をするようになり、家のことは後に、組合の仕事を一先懸命にやつておりました。つき合ひが多くお酒を飲む機会も多くなつて、胃をこわし、函病に入院し、もう少しで退院できると喜んでおりましたが急に悪くなり、昭和三十一年三月十日六十一才で亡くなりました。」安佐さんは、この時五十五才でした。次男の方は千葉の工大を卒業、リコーに入社され、現在は、広報部長として活躍されています。三人の娘さんが嫁入り前で一時はどうしようかと悩んだこともあつたと、当時の苦勞を思い出され感慨深く話されておりました。

戦後の暮し

写真館にとつても、不況の時がありました。戦後暫らくは配給制が続き、思うように仕事ができなかつたのです。また、進駐軍の写真熱に刺激され、素人写真が流行し始めたのでした。安佐さんは、育ちざかりの子供さんをかかえ生活は、大変だつたと話しておりました。

この頃は、節約と言ふ言葉が頭から離れなかつたそうです。安佐さんは「壁紙や襖の貼り替え、椅子の貼り替え、写真を入れる袋など、自分の手で、できることは、何でもやりました。私も、戦時中は、モンペ姿でもよかつたのですが、お客様もだんだん盛装されるようになり、あまりみすぼらしい姿もできませんし、かと言って高価なものの手ができません。どうしたものかと考えた末、洋服地で、着物を作ることに気が付いたのです。普通は、ダブル巾で三メートルかかるのを、二メートルでまに合わせ、仕立ても、背縫い、脇縫いもせず短時間で仕上げ、羊毛なのでしわにならず、しつとりして何でつくつたのだろうと不思議がられました、お陰でどんな盛装したお客様にも平気でお相手いたしました。」安佐さんは、なんて手先の器用な方だろうと感心してお話しをきいたの

です。

カラー化の普及

昭和三十八年日本のカメラ生産高は、西ドイツを抜き世界一のカメラ王国になったのです。この年から、営業写真のカラー化が普及しはじめたのでした。

安佐さんはカラーに対する研究も始めます。

「初めは螢光灯を使用し一定の角度を決めて光の強弱を計り、いかようにも光源を使用することができませんが天然の色を出すのには、いろいろと苦労がありました。そのうち、ストロボに直してやってみたのです。一にも二にも研究です、背景も、被写体に合う色のバックをいろいろそろえました。何としても他に負けてはいられません、随分研究して、お客様に喜ばれるようになりました。」

戦後のベビーブームは、昭和四十年頃から婚姻数の増加につながり、昭和四十七年頃には結婚ブームもピークに達したのです。

安佐さんのお話も、「昭和四十年頃に、東照宮の神殿のわきに写場を造らせていただき専属になりました。こ

の頃は、神前結婚が流行でしたので大変忙がしく、同業者よりうらやまれた程でした。

婚禮の衣裳は、花婿は、モーニングが流行で、花嫁は振り袖に内掛か、ウエディングドレスのどちらかでした今日のように、一人で何回も衣裳替えするようになったのは、五、六年前ぐらいからです。貸衣裳屋さんが増え記念写真もカラーで撮るようになりましたからね。

昔は（大正末期）貸衣裳屋なんてありませんでしたので、ほとんど自分で作るか、親戚の人のを借りるかでしたので、花婿は、羽織り袴、花嫁は、黒地に裾模様の入った振り袖、頭にはベツ甲のかんざし姿は良い方で、留袖訪問着姿が多く、戦時中は、もんぺ姿の花嫁、軍服姿の花婿さんもいました。今のように、恋愛結婚ではありませんから、時には、写真を撮る時、初めて相手の顔を見たと言う人もあったんですよ。」と当時の世相を再現するように詳しく話されました。

「昭和四十六年六月一日の写真の日には、北海道新聞に女写真師として紹介され、NHKには、おばあさん写真師として出演したり、HBCには、年をとつても技術をと、紹介され、規光堂の名も知られるようになりました。国際ホテルができた時には、日魯の仕事をしてお

りましたので、再三勧められて専属になりました。東照宮は嫁が受けもち、本店と、国際ホテルは、私が受けて三軒ともなると大変忙がしく、多額納税者の仲間入りするほどになりました。息子夫婦が常に私の身体を気づかって、東照宮の写場は、お宮に寄贈し、おしまれてやめることにしました。」

安佐さんは、昨年腰を痛めたのを機会に、写真の仕事をやめられました。安佐さんは「写真の仕事をやめてからは、咳も出なくなり、爪も黒くありません。昔は、酸液を吸って仕事をしていたせいか夜になると咳が出て苦しい思いもしましたが今は極楽です。年寄りにしかできない仕事もいろいろありますから、結構忙しくしていません。」とのお話でした。

月に一度は、女学校時代のお友達と会って友情を暖め金光教の教会へお参りしたり、町内会のお手伝いをしたり、ソロブチミストと言う世界的な奉仕団体に参加し、有意義な日々を過ごされています。

「若い者の重荷にならないよう、身体だけは丈夫でいたいと思っています。」こうおっしゃる安佐さんは、お産の時以外は寝たことがないそうです。

「夫が亡くなってから、私の誕生日に母が生きていた頃食事を共にした技師、弟子達が集まって会食し、昔話をしていきます」とのお話もされました。

お父さんの遺志を継ぎ写真の仕事をされて六十年、女写真師として生きた歳月が安佐さんを包み、小柄な安佐さんが大きく感じられました。

お訪ねするたびに、ご自分で仕立てられた和服に身を整えて迎えてくださいました。お話される一言、一言に、女写真師として、ひと筋に生きてこられた自身と誇りが満ちておりました。安佐さんは、「今は、カメラの精能が良くなったので、だれにでも同じように写せます。これからの写真館は、何か特色を持たなければなりませんね」と写真館の行く末を案じておりました。

参考資料

「日本写真史」

「写真昭和史」

「函館散策案内」

「北海道写真百年史」



安佐さんと愛用の写真機

五、老舗 へ久の女主人

石塚トメさん

佐藤 恒子



石塚トメさん

緑のきれいな、街

路樹をぬって、電車を十字街で降り、南部坂（現市役所分庁舎・旧丸井デパートの坂上、旧NHK放送局辺りを中心に、南部藩の陣屋があり、この名前がついた。元町郵便局向いに、

緑のきれいな、街路樹をぬって、電車を十字街で降り、南部坂（現市役所分庁舎・旧丸井デパートの坂上、旧NHK放送局辺りを中心に、

南部藩の陣屋があり、この名前がついた。元町郵便局向いに、

交番があった。）を少し行った左側に、石造りのガッシ

リした次石塚染工場がある。

この染屋のご主人石塚トメさんは、白髪の日もとやさ

しく色白の奥様で、店を一人で切りもりしている。

石塚さんは、明治三十九年五月十四日生まれで、今年七十三才。静かで、物腰が柔らかい。

染物屋さんの雰囲気にはびつたりで、品物につける渋札に記入する筆字は、眼鏡もかけず、その枯れた書体は、すばらしい。

トメさんは、小学校六年の時、石塚家に迎えられ、お義母さんになられた方は、実は二十才年上のトメさんのお姉さんであった。小学校は、宝尋常高等小学校（宝小）学校は、明治十四年この学校を会場に、区会も開かれた所で、市議会発祥の地でもある。また啄木夫人が、代用教員をした学校でもある。で、その跡は、今は無いが、婦人センターの敷地に、立派な石碑が建っている。

その後、北海道庁立函館高等女学校（現函館西高等学校）へ入学。当時の学校は和服で通学した。袖丈は一尺ちよつと（四〇糎）程で、華美でなく、銘仙や木綿の着物に袴を着用した。

大正十一年、トメさんが四年生の時、摂政宮殿下（今上天皇）が、行啓になり、函館公園で、捧体操をお見せすることになった。初め、紋付にモンベと定まつたが、丁度その年の一年生から制服は洋服に変わった。トメさん達は、一年生から借用して演技をした。その時の事が一番印象に残っているようだ。

現在の生活では、だれもが洋服に抵抗はないが、当時としては、さぞ大へんなことだったと推察される。

最近、後輩の学校生活を写した古いフィルムが、テレビで放映され、なつかしく想い出されたそうだ。



借用した洋服

翌大正十二年十月、トメさんは、十八才で結婚した。ご主人幸一さんは、石塚家の一人息子で、二十三才。ご主人は、高等科（当時の義務教

育は小学校六年迄だった）を終えるとすぐ、先代のお祖父さんが、年季（奉公人をやとい、同じ仕事を約束した年限させたこと）で、年季奉公といつた。）を入れた、本場東京の染屋さんへ修業に行き、そのあと、京都へも染の勉強に行つた努力家だった。

当時誰れもが通つた裁縫塾は、浅利坂（四千年位前の先住民が食べたアサリの貝殻が掘り出されたからで、貝塚）明治十一年、英人地震学者ジョン・ミルンが、米人モールズ教授（東京大森貝塚発見者）と共に、貝塚を発見した。その調査は、アジア協会に報告され、函館が世界の学会に紹介された。）の山田裁縫塾へ行き、三月の卒業の時は、六カ月の身重で、大きなお腹をして、出席した。大正十三年七月長男が産まれ、お店も益々いそがしくなつて来た。お祖父さんは、ご主人が三十二才の時、仕事への責任をもたせ励みになると思い店をまかせた。

工場

〈久石塚染工場は、当時函館に起きた度々の大火に、お客様より預つた品物の持出しが、大へんだったので、お祖父さんは、一大決心をして、店を石造りに変えた。〉

土台を深く掘り、「エンヤラヤー」という掛け声で、杓を打ってコンクリートを流し、その上に石を積み

重ねし念入りな店を作った。内部は、漆喰造り（石灰に粘土を加え、ふのりをとかした液体でねったもの）の重厚な感じがする。万一に備え、戸は二重戸にし、表戸は厚さ一樞ぐらいの鉄板のうらに、厚くコンクリートを塗ったもので、今は戸袋にしまわれているが、災害の時は、味噌を目どめに塗って、火から逃れられたそうだ。この石造りの建物は、大正九年に造ったというから六十年たっている。翌十年の大火、昭和九年の函館大火（三月二十一日、午後六時五十三分、函館市住吉町の民家より出火、折柄の烈風にあおられて、火勢がつき、一日後の二十二日午後六時、辛くも鎮火。二四一八六戸焼失、死者三〇五四人、行方不明六六二人）そして、同年に起きた風速四三米の強風の中でも、ビクともしなかつたのだ。



当時の店

戦争中、警報が鳴ると、店は防空壕に早替り、畳を積み上げて、避難したそうだ。この頃、外壁を黒く塗ったのだ。

しごと

父石塚染工場の仕事は、旗、のぼり、神前の幕、絆纏手拭等が、主であった。いそがしい時は、職人、あんこ（小僧）が、常時十人ぐらいはいた。石塚さん宅では、職人は兵隊検査を済んだ人を言い、あんこは検査前で、通称は名前で呼んでいたという。

当時の絆纏は、現在の作業服なので、注文も多く、北洋漁業の最盛期の頃は、何千枚という注文があつたそうだ。木綿が統制で少なくなつて、不自由になり、スフの混紡も多くなつたが、絆纏の布地は、三河木綿が一番なので、岡崎の業者は、だいたいあと迄品物を送ってくれたので、お客様には喜ばれたそうだ。

絆纏の背中、衿のしるしや文字は、ご主人が達筆だったので、外注せず、型紙造りは全部、ご主人の仕事だった。「型紙」は、日本紙を六十樞四方の鉄板に蠟をひき、とかした上に紙をのせ浸み込ませたものを乾し、小刀でしるし通りに切り抜くのである。この作業は、根気がいり誰れもが出来るものではないのです。ご主人は、器用で手早かつたので、注文が多かつた事は、想像される。

ご主人健在のうちは、しるし物が多かったので、しるし物を第一に扱って、トメさんが受ける洗い張りは、いつも後廻しで、お客様に、いいわけをする事が大へんだつたそうだ。現在は、若い時からいる職人さんが、仕事をしているが、この道も後継ぎがないのが、悩みだそうだ。

終戦後、京都へ出した京染の反物が二十点ぐらい、出来てこないで、三年ぐらいしてから、似た品物を頂き、お客様に、渡した苦労もあった。

洋服におされて、染物もだいぶ少なくなつたが、日本人に和服は、切り離されず、染替えて、娘や嫁にと、ご自分が着た着物を持つて来るお母さんが、出来上がった品物を、喜んで下さる時のうれしさは、格別だという。湯通しと湯のしの違いも知つた。

湯通し 大島の様な細類を、お湯に通し、糊をとり蒸気で仕上げでツヤを出す。

湯のし 金紗類の布地に、まんべんなく蒸気を当てて、巾を出し仕上げる。

石塚さんでは、簇張りをつく、耳のつれが、つかない機械を早くから購入したので、能率のいい仕事をしたので、お客より信用を受けた原因でもあろう。

絆纏のしるしや模様について

一番初めに糊を作る。糊は、白玉粉と石灰を「ふるい」で何度も通したものと、同じく糠を炒つたものを練つて、だんごにし、煮立つた湯の中に入れ、浮いたものを、すりこぎ棒で潰し、糊状にして、その糊を筒皮に入れ、下絵の通りになぞる。筒皮は洗皮で作つてあり、お湯を通して柔らかくしたものを用い、先には、金具がついていて、太さも色々ある。その糊の上に、木屑を「ふるい」で通したものを撒いて乾す。これは糊が、くつつかないためで、柔らかい中に木屑をかけて乾し、固める。戦争が激しくなつて来た頃は、砂を使つたというから、色々苦労があつた事が、うかがえる。

次に豆油（ご）で、大豆を一晩水につけて、柔らかくし、豆腐を作る様に、しぼり汁を作る。その汁に油煙炭（細かい炭素粉で墨の製造に使用するもの）をまぜて、ねずみ色にする。これを豆油といい、布地を丈夫にするためと、下染を兼ねている。

次は丹殻（たんかわ）という木の皮を採取したもので、外面は灰色、内面は褐色、その汁に、綿布・絹を浸し、

そのあと、石灰水を通すと、赤茶色に染るといふ。

それから簇（しんし）張りする。現在あまり、見かけないが、上等の絹布類は、これで張ったものである。

簇は、織物の布を整えるために、古くから使用され、両端に針金がついていて、それを布の端にかけて張るのである。

最後に藍染の瓶に浸す。当時、工場には、藍瓶が、十二ぐらゐもあり、順々に入れて染めて行くそうで、この染の段階に入るのは、熟練した職人の手になる。

その後、水洗い、乾燥するが、寒い時、天候の悪い時は、乾きがおそいので、石油缶を切ったコンロに、木炭を起こし、何十も並んだという。木炭小屋には、燃料店の様に木炭が高くびっしり積んであつたそうだ。

一反は、約十二米の長さであるから、反物を伸す、張り場も広く必要であつた。その張り場も時の流れで、今は、駐車場となつてゐる。

糊、豆油入れ、丹穀、藍染の工程を経て、のほり、暮、絆纏は、仕上つて行くのである。ミシン掛けは、トメさんの仕事でもあつたが、子育ての間は、人に頼み、絆纏の注文の殺倒する暮は、毎日夜中迄仕事が続き、夜食の仕度も、さぞ大儀な事であつたらう。

祖母や子供のこと

お祖母さんは、住み込みの人に着せる仕事着の綿入れ、股引等、縫つて着せたそうで、あのいそがしい中、年中針を手離さず、みんなさつぱりとさせていた姿が、想い出されるという。

そのお祖母さんは、昭和五十二年七月八日、枯れ木が倒れるように、九十二才の高齢で、静かにこの世を去つた。前年、先代の二十三回忌をしたそうで、後生の良い方である。

トメさんには、三男一女のお子達に恵まれ、それぞれ独立してゐる。

長男、俊さんは、函商に在学当時より、陸士に入りたくて、埼玉の士官学校に入り、満州へ行き、終戦後、再勉強し、現在では、伊東の方で、医者として、活躍してゐる。

長女、礼子さんは、父親の願いで、子育てしながらでも、後々役立つであろうと、昭和薬専を卒業、現在は、岩見沢の方へ嫁がれ、材木商の奥様になつてゐる。

次男、宏さんは、千葉大薬学部を卒業後、現在は、そ

の道を、研究している。

三男、幸雄さんは、慶応大医学部卒業後、立川米軍病院で、インターンをし、アメリカへ渡り、ジェフアーンン医科大学で勉強、更にハーバート大学へ進み、現在は精神科医として、ニューヨークで活躍している。奥様は、フランスの方である。

四人のお子達に、十一人の孫が居る。

「孫が、時々来宅し、賑やかに振るまつて行くのです。去年は長男の孫と二度目のヨーロッパ旅行して来ました。」
孫の成人には、必ず作る振袖は、さすが染屋さんだけに目は高くすばらしい。

夫と私

京染・洗張の仕事の間、昭和四十三年ご主人とトメさんは、三男のお嫁さんの両親に会うため、フランスへ旅行し、後に、ニューヨークへも行き、たのしい旅をして来た。ご主人と四人の子育てを終り、たのしかつた旅行の話に花が咲いた事が、折にふれ、想い出されるそうだ。
四人の子供達が、それぞれ独立し、今一人で住まう函館の店は、古いのれんを守る人柄を物語るように、静か

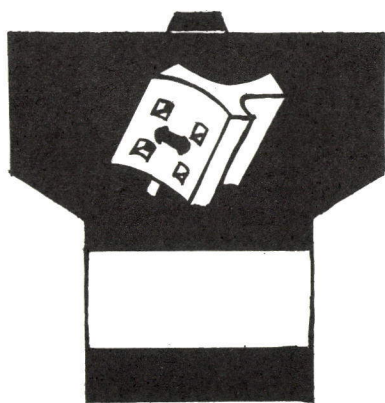
なただずまいである。

しるし物では、函館一と言われたご主人は、その旅行から二年目の、昭和四十五年九月八日、胃潰瘍の手術のあと、一週間の入院生活で、遠い人となったのだ。

「仕事に、ささえられ、生きがいを感じて」と語るトメさんに、古いのれんを守る老舗の意気を感じとれるのだった。

参考資料

「函館」



六、養護施設「函館国の子寮」の創設者

柏倉 シヅエさん

立花 千代



自宅の花畠で・・・

はじめに

聞こえるであろうと思われた。

ここには現在五十二名の家庭的に恵まれない児童が収容されている。昭和五十四年四月発行の同施設要覧によれば「この施設は戦災、戦後の混乱の際、不遇児救済にあたった^{注①}北海道共立愛子会出身の子女を、当時洋裁学校を経営していた前柏倉シヅエ寮長が職業指導をしたのがはじめです。昭和二十八年四月美深、富良野国の子寮について共立愛子会函館国の子寮が函館市杉並町に柏倉洋裁学校を転用して設立、定員二十名で児童を収容して事業を創始……昭和三十二年共同募金の資金により増築定員六十名に増員、昭和三十四年七月十日共立愛子会より分離独立して社会福祉法人函館国の子寮となりました。……昭和四十四年三月養護施設函館国の子寮は

な建物が見えてくる。これが社会福祉法人「函館国の子寮」の建物である。近くの丘にはトラピスチヌ修道院の緑の屋根が望まれて、このあたりならきつと祈りの鐘も

寮舎の老朽と松倉川の河川改修のため函館市高松町五七五の七（現在地）へ改築移転し現在に至っています。」とある。

私は二十年程前に湯川温泉街の古ぼけた木造の建物の前を通ったことがあり、それが国の子寮と書かれてあったのを記憶していた。そしてそこは幼い不遇な子供達を養育している施設であることを知った。

戦後、孤児、混血児など不幸な子供達の存在が社会問題化していた中で、函館市の一隅に於ても国の子寮は、敬虔なクリスチャンである一女性の手によつて始められていたのである。そこで私は創設者柏倉さんの、児童福祉事業へとたどられた足跡を知りたいと思つた。

函館の児童福祉事業の歩み

函館の児童福祉事業は、明治二年十二月六日、榎山淳道という町医者が育児講をおこしたのが始まりである。

これは貧困者の随胎及び、貧児、そして貧児の夭折する有様を憂いて富商、杉浦嘉七、その他の有志や寺院に因つて協力を求め救済をしたものである。

明治四年六月に至つて函館奉行所の大主典、岡本長之も協力して義損金を集め永続の道を計つた。これが育児会社となつた。この会社は建物を増築し、育済館と呼び官からの補助金を得て相当の活動をした。十四年末現在で育児が二十一名に及んだとのことである。十五年よりは函館区によつて経営されて来たが、明治三十三年に函館慈恵院が出来るに及びその事業の一切をこれに託して解散した。

育児会社は随胎をいましめ、不幸な乳児を收容し保育の目的で出発したものであるが、この特色ある救済事業が民間団体の手を離れて、お役所仕事に移つてからの経営方法や、その運営成績については記録に残るものがない、今日これを知ることが出来ない。

一方、慈恵院の記録をみると発足時の明治三十三年の收容児は十一名、明治三十四年は三十一名、乳児よりも幼児、学令児が多い。慈恵院はその後昭和二十一年函館厚生院と改称し、児童福祉施設「くるみ学園」を有している。

又、明治二十三年から函館元町カトリック教会主任司祭（のちに司教）のアレキサンドル・ペルリオーズ師によつて、湯川の現在の女子修道院のところに男の子のた

ための孤児院がつくられた。十才位から十四、五才まで約三十人位いた。明治二十九年十月、渡島当別にトラピストが出来てから孤児院は、そちらに移され湯川孤児院は閉鎖された。

一方、明治十一年五月、函館に居住したカトリック伝導の仏国人、マリ・オネジムと、マリ・オグストの両女史が貧困者の施療と婦人に対する教育事業をはじめ、捨て児などを収容して育児事業を行ったが、大正三年、本邦に日本聖保禄会（カトリック宗教団体）が設置され、同所は函館支部となり、児童施設も有しそれが今日の、「さゆり園（乳児）」、「暁の星園（児童）」である。

くるみ学園、暁の星園も、ともに大きな組織の下に発展して来た。

札幌に訪ねて

柏倉さんは昭和二十八年から約二十年間、寮長として活躍していたが、昭和四十七年に次男民知氏に後を託して札幌に去って行かれた。本年四月、柏倉さんにお会いしたい旨御連絡すると、「私の事などこの世に一物も残したくないと思っております……」というお手紙を戴い

た。しかしその後数回のお手紙と電話で「道南女性史」の趣旨をお伝えしたところ、理解して下さいて快く取材に応じて下さった。それが七月十五日であった。

現在は札幌市豊平区清田九五で、精神科「あしりべつ病院」を経営されている長男謙氏と同居の柏倉さんをお訪ねした。一ヶ月余りの台湾の旅行からお帰りになったばかりであったが、約束の時間に病院の玄関で待つて下さった。七十二才というお年よりは、はるかに若々しく、小柄に見えたがすらりとして紺のワンピースがよく似合っていた。背筋を真直ぐに伸ばされ、歯切れよく旅行の事から話して下さいました。

観光が目的ではなく、ご自身キリスト教信者なので、「台湾の教会を端から端まで歩いて来たの。言葉も勿論解らない。何もかも違った環境でしょう。そこで、本当にキリストは一つ。家に帰ったという安らぎがあり平和があった。それを実際にこの一ヶ月余り体験して来たの。もう死ぬ頃になって幾ばくもない時に、辿るところに辿りついたという感じ。」と、話される柏倉さんのお顔は生き生きとした感動に包まれ、それがこちらにまで伝わってくる。

生いたち

私は明治四十年五月二十六日、北海道の夕張で生まれましたよ。父は仙台出身で安積善太郎といいますが、この頃は炭鉱の事務員をしていました。母キンは福島県勿来関の生まれで、お祖父さんというのが型破りの人で赤ゲットのお祖父さんといわれ、仙台で質屋をしていました。私の父は一人息子でしたが若い時に北海道に渡り、母とは小樽で結婚しました。子供は私と妹の二人です。妹は結婚して東京に住んでおりましたが昨年六十六才、癌で亡くなりました。父の一番記憶に残っているのは、江別の町役場の収入役をしていた頃のことです。私が十二才の時、四十二才で仙台に帰って亡くなりました。私は北見に近い置戸小学校を卒業したのち、裁縫女学校を出て二年間、天塩の音威子府で代用教員になりました。十代の若い頃ですもの本当に子供達に何を教えたのかと思うと、申しわけなくて恥ずかしい思いです。

結婚

大正十五年十九才の時、名寄の教会で知り合った柏倉

と結婚しました。洗礼は十八才の時に受けました。夫は国鉄に勤めていましたが組合運動をしていました。

その当時は組合なんて合法的なものとはつくれなかつたのですが監獄に入る覚悟で組織をつくらうと思つたようです。すぐくロマンチストだつたわけ。彼はいい信仰を持つていて非常に善良なクリスチャンでしたよ。長男が生まれると同時に夫は肺結核になつたのですが、私が二十一才の時でした。それから四年間、殆ど寝たきりでした。途中一寸快くなつたので自分のように病気で苦しんでいる人々に何かしたいと思ひ、たまたまお友達がお医者さんだつたので、自分が事務長をしてその人と一緒に病院をつくるつもりで、上磯郡知内村に行つたの。あそこは氣候もいいしそれで行つたんですよ。皆ロマンチストだつたのよ。それが仕事半ばにして又、倒れてしまつて志を果さないで亡くなつてしまいました。昭和六年、夫が三十三才の時でした。私とは六つ違いで、若いうちに死んでしまつたのできれいな思い出しかないの。

自立への道

夫が四年間も寝ていて亡くなりました時に、さて何を

しようかと考えましたの。当時女の人の職業つて限られ
ていましたものね。学校の先生になるか髪結さんになる
に限られたものです。そして働くものが馬鹿にされた時
代でした。その頃『婦人之友』つて雑誌を読んでいまし
たの。なかなかハイカラで時代の先端をいくような事が
書かれてあり、私も若かったし共鳴して読んでいたの。
私は手先の仕事が好きでしたし東京に出て、「友の会」
(昭和五年雑誌『婦人之友』三十年の記念につくられた
婦人団体)の生活学校で洋裁を勉強しました。

東京へは二年間近く行っていたのですが、その間四才
と二才になつてゐる子供達の面倒は、知内町で母親がみ
てくれました。この母は昭和三十年、八十才で亡くなり
ました。私が国の子寮をはじめた時も協力してくれまし
てね。亡くなる時まで漬物をつけてくれました。皆に好
かれる人でした。私は母が嘘をついたつて記憶がないの。
私が嘘をついたりするとすぐ怒つてね。昔武家の出で
あつた事を誇りにしておりました。私の子供達は祖母に
非常に愛着が深いわけです。育ててもらつたようなもの
ですから。

友の会には入つていたんですが、合理化運動をしよう
としている事はわかりましたけれど、お金も時間もある

奥さん達の会合であり、真に働くもののある場ではない
と思ひ、出て来ました。

昭和十年初夏の頃、東京で洋裁技術を学ばれた柏倉
さんは、函館市十字街でささやかな洋裁店を始めた
という。近くの高級洋服店の下請も引受け、かたわ
ら洋裁を教えることも始めた。当時、そんな仕事を
する人はあまりいなかったの、忙しくなつて多い
時は五、六人の針子がいきました。収入も相当あり、
貯金も出来るようになった。戦争が激しくなつた昭
和十七年頃、当時郊外であつた杉並町の知人の家に
疎開のため移転したがここで洋裁塾をはじめられた。
戦後、柏倉さんはこの家屋敷を国の子寮を設立す
るにあたり、約八十五万円で譲り受けた。半分は公
共の補助を受けたが残りの分については
「この頃には私もいくばくかのものは持つていまし
たし、何とか集める事が出来ました」と淡々と語つ
ていた。

洋裁塾から国の子寮設立

杉並町には三百五十坪の土地があり、家の建坪は百坪でした。家は檜造りであったように思いました。そこで洋裁塾をやっていたのですけれど、やがて戦争も終りました。昭和二十八年、私は四十六才でしたが子供二人共博士コースを出ましたから、一人前になって離れて行つたので、私もこれで母親の務めが終つたと思つたわけです。子供等がみんな私の懐から去つて行つて淋しくなつたし、自分の空しさを満足させられなかつたし、これからは好きな事をやりましようと思つた。生活の手段でないものを何か張り切つてやりたかつたの。今まではお嬢さんや奥さんが習いに來て、教えてあげていたわけですから、今度はこの小さな技術を生かして気の毒な少女達に教えてあげようと思つたわけです。

当時はまだまだ衣食住に不自由な時代でした。今は福祉施設の施設長となるには、学歴とか、経験とかその他の条件が問題になるのですが、私が子供たちを預かるために、道庁の福祉課に相談に行きましたところ、二つ返事で是非やつて欲しいとの事でした。今思うと世間を知らない甘い考え方に顔が赤くなります。

昭和二十年十一月、富良野町の名取マサさんと美深町の松浦カッさんが富良野町に、北海道共立愛子会をつく

りました。その共立愛子会の中に国の子寮という施設が二つあり、当時建物は美深と富良野にありました。松浦カッさん（衆議院議員松浦周太郎夫人）とは教会以来の親しい知り合いで子供たちの為に働くお姿には感動しておりました。私もその支部として働きたいと考えていましたので「函館国の子寮」として独立し、知事の認可がおりましたのは、昭和二十八年六月二日、その日は丁度長男の結婚の日でした。

一年位の間札幌の教護院（不良行為をなし、またはなすおそれのある児童を入院させて、教護することを目的とする施設）を退院した十数人の少女を預かりましたところが彼女達は洋裁などを習う気がないのですよ。逃げていくやら泥棒してくるやら、売春してくるやら、今日苫小牧まで逃げて行つたと思つたら、明日はこつちの方に逃げて來たという案配で、そのたびごとに迎えに歩くでしょう。保母さん一人で、充分な体制が整わない中に事業がはじまりましたので、一年中帯を解いて寝なかつた思い。タンスはこじあけるし、徒党は組むし、そういうすれっからしにこつちが持つてあるかれたものです。彼女達は無賃乗車をするには、どこの改札口から逃げて行つたらいいか皆知つていなのです。

洋裁技術を身につけさせ自立への道に役立てたいとねがったにもかかわらず、こんな状態が毎日のようにおこつて柏倉さんも途方にくれ、閉鎖しようかと思つた事も度々あつたという。その状態を役所の方でも考慮してくれたのか、当時は戦災孤児も多かつたので、昭和二十九年頃には純然たる養護児童（保護者のない児童、虐待されている児童、その他環境上養護を要する児童）が送られてくるようになった。

先きにも申しましたように、私がこの仕事をするに当たつて、本当に子供達が、可哀想でやりきれないとか、戦災孤児をどうしてやらなければならぬとか、そんな動機ではなく、生き甲斐が欲しかつたわけ。そんな時に戦災孤児がいたわけでしょう。そういう困っている子供達と一緒に暮らすことは彼等にもいいし、私も満足するだろうとそう思つて始めたの。けれどもそのことの為にどんなに苦しんだかわからない。先ず物質面でも非常に乏しく、衣類など貰いに歩きましたし、自分の着物をほどこいて布団もこしらえました。又ある時は全員が赤痢になつたり、時には幼いものが死亡したり、私自身拷問されるような苦しみもありました。

その内に子供達もふえてきて、杉並町の家では手狭になりました。真向かいに有名な幼稚園があり、国の子寮の子供達とはかなりの生活の差があつて「あんを汚ない子供がいては街が汚ない」という声も耳に入るようになりました。何よりも毎晩子供のおねしょに悩まされていた折、昭和三十年三月、湯川のバラックのような家と借地を、無条件に杉並町の土地、家と取り替えて、引越しました。私が計算の出来る人間であつたらこんな事は決してしなかつたでしょう。なんでそんな計算の合わない事をするんですかつて言われたけれど、何故かというところの家には温泉がついていたので。子供が毎晩おねしょするでしょう。それで温泉に入りたいばかりに取り替えたんですよ。毎晩子供達を温泉に入れて暖めたらおねしょをしないうらうと思つたの。とにかく二十何人の子供がかわるがわる毎晩おねしょをするんだもの。

湯川町から高松町

湯川町に移り子供達を温泉に入れられ、幸せでした。ときには「貴女は素晴らしい事をした」といわれると、いい気になつて喜んだりした事もあつたのです。子供達

を連れて散歩に出る時など、とても幸せな私でしたけれど、やっぱり苦しみの方が多かったですね。経営に関する費用は公から出ましたので順調に進み、子供たちにもそんなに不自由はさせなかつたです。出来るだけの事はしたつもりです。希望する男の子は職業訓練校にやつてどうにか食べられるようにもしました。今でも訪ねて来てくれる子もいます。国の子寮で日を過ごして良かったという子供もいるでしょうね。

子供は好きな方でしたね。でも、やっぱり子供達は愛に飢えているんですよ。どんなに保母さんが可愛いがつたつて親のような愛を注げるわけがないですよ。一人の保母さんが何人かを受け持つんですから大変なんですよ。こんなに小さいのに（手で示して）親に捨てられてね。可哀想ですよ。私等のような他人を信頼してこうやつて生きているのかと思うと、時々涙が出ましたわ。い布団にねさせても毎晩、毎晩、おねしょでは、こつちも腹が立つし……。でもね若い時の苦労は買つてでもしろというでしょう。だから家庭というものにあこがれて大きくなりますわね。退所後、子供達はしつかりした生活をしていますよ。早く家庭を持つてね。

時がたつにつれて湯川も家が建ち並び子供等の駆けま

わる土地も少なくなりました。この時、昭和四十三年、トラピストの神父様が子供達のためにもっと広い土地が欲しいという私の願いをきいて下さつて、湯川に近い高松町に二町歩（六千坪）の土地を、本当に安く百八十万円で売つてくれました。

昭和四十二年七月、近隣の根崎漁村地域住民の要望に応え、公共の補助をうけて私立根崎保育園も開園した。このために求めた土地七百坪は約二百万であつたが三百坪を保育園に寄付し、残りは二年もたらない中に一千万円以上になつたという。

たまたま松倉川の河川工事が始まり敷地が半分以上削られることになつたので、国の子寮は移転しなければならなかつた。又家屋もいたんで改築しなければならなかつたので、思い切つて高松町に寮を新築した。家庭のない子供達にいくらかでもそれらしいものをと、小舎制（一戸建の住宅で、国の子寮の場合、六室あり保母さん二人を中心に児童は幼児から小学生、中学生が十二、三名が一緒に住んでいる）にし、本館と三棟の小舎を建設し、昭和四十四年三月移転した。

移つてまもない頃、高松町の国の子寮は虫かごの中に
いるみたいでした。秋になると野ねずみがガタガタ枕元
を走るし、コオロギが家の中に入ってくるし、そういう
所だつたんですよ。夕方になるとトラピスチヌの鐘が鳴
り、夕陽がきれいでした。牧草に囲まれた中で子供とギ
ンギンギラギラを歌ったり、その子供達の先頭になつて
歩いたり、ハマナスも咲いていました。

あの頃、安く譲つてもらつたんですが今では空港に近
いので、いくら安くても坪五万円では買えないでしょう。
半分位自分の名義にしておけば、今頃私はお金持ですよ。
その頃指導員をしていた次男（現寮長民知氏）が半分
だけ自分の名義にすれば誤解を招くから、止めた方がよ
いというので、私は何一つ自分の名義にはしていないの
です。

私みたいに夫もない、金も、学問も、教養もない人間
がなぜあんなことをしたんだろうと思いますが、自分の
持つているものをみんなさらけ出して事業を始めて来ま
した。そして或る時は満足もしました。けれどそれは絶
対的な満足ではない。いろんな事があつて人の良い面、
いやな面を多くみたように思います。又人ばかりでなく、
自分の中にある悪い面をも多くみたような気がして、い

やにもなつて来ました。だけど神様はいろいろな環境で
私をきたえ、そして愛の中に育てて下さつた。あのまま
国の子寮に止まつていたら月給も良くなるだろうし、条
件は整えられていくであろうけれど、本当に内なる満足
はなかつたと思います。そして神様のご計画は他にあつ
て、私を函館にいられなくして下さいました。

裁 判

その頃昭和四十三年四月、北大出の青年を指導員とし
て採用しましたが、私とは考え方が合わなくて、翌年五
月、解雇したの、すると相手側は守る会を結成して不当
解雇撤回の訴訟をおこしました。それは昭和四十四年六
月中旬のことでした。それを共産党が支持してスピーカ
ーを鳴らし、赤旗を立てて小さな子供を養つているこの
施設にやつて来ました。裁判になると何十人も傍聴に来
ました。その中で私は証人台に立ちました。

共産党は街中にビラを貼つて歩き、私が行つていた教会
の青年達も皆守る会につきましました。この時、熱を出して
いる子供が六人もいたのですが、保母さんがいつべんに
五人も辞めるという事態も起き、私はもうすっかり窮地

におとし入れられてしまいました。裁判の方は半年かかって判決が出ました。この時は相手側が勝ちました。そして彼は再び国の子寮にもどつて来ました。しかし、もどつたときも、以前と同じ考え方でしたので、どうしてもやつて行けないと思つたので、私達は高裁（函館支部）に控訴したのです。それは又一年以上もかかりましたが、判決ではこちらが勝訴となりました。これに対して相手側は又控訴しましたが不利とみたのか依願退職して十万円を要求してきました。私はもう争うのは嫌だから十万円を渡すという条件で、昭和四十七年十月、和解しました。

この裁判には三年以上かかりました。私は疲れてしまいました。家の中はガタガタになり子供の養育どころじゃあないでしょう。責任も感じますし若い者がやつたらいいだろうと思ひ、理事さん達にお願ひして私は札幌へ去つて来たの。四十六才から二十年間、国の子寮で働いたことになりました。

昭和四十四年六月一日付の『北海道新聞』は、この件について「信教の自由侵害か、不適格」か施設職員解雇で審問」という見出しで次のように報道し

ている。

「この養護施設はキリスト教精神に基づく社会奉仕を定款にした福祉法人、函館国の子寮（柏倉シヅエ寮長）で解雇されたのは指導員……昨年四月から同寮に勤めていたが、この五月中旬に柏倉寮長から考え方が異なるのでやめてほしいといわれ、五月三十日の理事会の決定で、解雇通告を受けた。……理事長名で……さんに出した退居通告にも『キリスト教無視は指導員として適格性を欠く』とあるので考え方の違いが発端となつて解雇問題に発展したもののようだ……」

札幌に来て

函館の国の子寮の経営では、失敗して去つて来たわけですが、裁判沙汰にまで至つたことを今は申しわけなかつたと思つています。こちらに来て色々心と心の戦いはありました。けれど今は「主」にあずかる事が出来て平和があります。嫁や孫らとともに礼拝して、何とも言えない安息を覚えるのも、七十二才の今になつて辿りついた境地です。何年も働き蜂みたいに働いてきましたが、

今は外国をあちこち旅行しています。毎年よく歩くのです。若い時は山登りをしました。北海道の山は大体全部登りましたね。道があるんだもの。雌阿寒岳、雄阿寒岳、大雪山、十勝岳、ニセコでしょう。その頃まだ誰も山登りをしていないほんとうの山ですね。山登りで足が強いから荷物を持ってまだ歩けますよ。この度台湾へ行き新高山へ登って来ました。

現在はあしりべつ病院の一隅にある補修室で、患者さんの繕いものや、お話相手をなさり、日曜日は御自宅で集ってくる人々と共に、礼拝のひと時を持たれている。

私は柏倉さんには一度しかお会い出来ず十分な取材を得ることが出来なかつたので、次の方々にお話を伺つてみた。

教会での友人、新浜さんご夫妻

大火の翌年（昭和十年）六月頃、相生町にあつた道銀向かいの日本キリスト教会日本伝導会に柏倉さんが訪ねて見えた時、玄関で会つたのが初対面です。信仰が心の

支えになり毎日聖書をよんでいて聖書に詳しかった。

洋裁店を開いた頃からの友人、渡辺りつさん

生活力が旺盛で前向きで、生き生きとしている感じ。いつも熱意を持っていたから、次々に一貫した真摯なものがついて廻つたと思う。戦後一時、札幌からの非行少女を収容することにしたが、彼女等は盗み、万引、けんか、放浪性があまりに烈しくてどうしてよいのか、眠れない程悩んでいた。

約十年間国の子寮の保母をされた塩田アヤさん

天衣無縫で計算のうまくない人。子供達の食事、衣類を求めるためにはどんな所にも陳情に行き、ねばり、獲得する情熱があつた。保母さん達も八時間労働どころか子供達と共に起居し、情熱を持っていた。

国の子寮主任保母二十年勤務の菊地春代さん

「お金もないし食べるものもない時もあつたのに、こ

これまで来れたのは神様が守って下さったのよ」といっても言っていた。朝早くから花の手入れが好きで、手伝わないでいるとよく「花に愛情がもてないのかしら」と、小言を言われた。子供達の洋服は手づくりが多く、女子の制服も手づくり、みんなも手伝ったが三倍位も早かった。子供たちに神さまのお話をしている時は楽しそうであつた。

終　　り　　に

柏倉さんはその願いに反して、函館を去っていかれたが、昭和二十六年、児童憲章が制定されたのと前後するように、養護施設、国の子寮を設立されたその功績は大きい。薄幸な幼い者達の心のふるさとでもあるこの施設の存在を市民として忘れることは出来ない。

次男民知氏は、その母の像として

「良い事をしようとしてこの仕事を始めたわけではなく、クリスチャンとして純粹に生きようとした、ひたむきな態度を人間としてえらいと思う。洋裁塾を開いていたので、家事、子供の養育は一切実母まかせ。従つて祖母が自分の母で、母は姉の如き存在であつた。」と語る。

㊦ (1) 北海道共立愛子会

富良野市名取マサ氏が、戦争の災禍に両親を失つた不幸な子供達を、温い愛で守つてやることは日本の母たちの共同の責任であることを痛感して、援護施設の創建を発願、昭和二十年十一月二十三日、認可された。

参考資料

「富良野市史」 「国の子寮解雇事件総括」
「社会福祉法人国の子寮要覧」 「海峡 66・86・87号

(国の子寮要覧より作成)

年 度	入 所			退 所			在 籍 児童数
	男	女	計	男	女	計	
昭和28	2	35	37	2	8	10	27
29	12	26	38	8	24	32	33
30	8	10	18	4	26	20	31
31	15	25	40	2	10	12	59
32	9	17	26	8	12	20	65
33	20	11	31	19	14	33	63
34	7	6	13	6	12	18	58
35	12	8	20	10	10	20	58
36	9	13	22	7	14	21	59
37	5	6	11	8	5	13	57
38	9	10	19	8	14	22	54
39	9	8	17	7	8	15	56
40	16	9	25	18	9	27	54
41	14	6	20	8	9	17	57
42	17	17	34	22	12	34	57
43	22	10	32	21	15	36	53
44	10	13	23	6	9	15	61
45	12	4	16	10	11	21	56
46	8	7	15	5	7	12	59
47	18	5	23	18	7	25	57
48	9	3	12	8	7	15	54
49	10	3	13	9	3	12	55
50	11	5	16	15	3	18	53
51	13	5	18	15	10	25	46
52	11	4	15	8	2	10	51
53	6	5	11	9	1	10	52
計	294	271	565	261	252	513	

七、遍歴ののち野犬抑留所の管理人として

安岡キサさん

五十嵐 綾子



キサさんの仕事場

今まで、通称「犬

殺し」（職業名）に

関する仕事は、男性

のみが従事する仕事

だと思っていたので、

女性も働いていると

聞かされたときは本

当に驚いた。

女性が働く場とし

ては、大変特異なケ

ースだ。どうしてこの仕事に就くことになったのか、日

が経つにつれ、笹島保健所長の薦められる安岡キサさん

を採訪してみようという気持が強まった。

野犬抑留所を訪ねて

野犬抑留所とは、一般には聞きなれない名称だが、昭和四十一年十二月、北海道で初めて整備された野犬抑留

所が函館の見晴町に出来た。

捕獲した犬を収容するけい留室、犬を焼却する焼却室、

焼却するための油を収納した小屋、いずれも木造建物だ

がL字型に隣り合わせて建っている。

以後、他都市でも出来たが、飼犬管理事務所とか、畜

犬センターという表現で呼んでいるという。

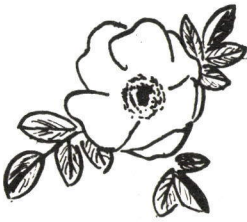
この野犬抑留所は、市民の憩いの場である見晴公園（香

雪園）につづくゴルフ場を右手に見ながら、川に沿った

道を二十分ほど歩くと辿り着く。その途中、二股になつた別れ道にさしかかるが、右手はやや勾配のゴロゴロ石の粗末な坂道に通じ、左手は畑の中を突き抜ける平坦な道路だ。その別れ道の三角地点に“野犬抑留所”と書かれた大きな白い標識が立っている。そこから坂の上の小さい丘を見あげると、四角いコンクリート造りの煙筒が見えるので（夏から秋にかけ木の葉が茂ると隠れて見えなくなる）その煙筒を目じるしにすると間違わずに行き着くことができる。右手の坂道を登りつめて右側二軒目が安岡さんの家で、その側に在る。

日乃出町に人家が増えたので、見晴町に移転した。訪ねて来る人が間違わないよう、二股の別れ道に、ご主人が手製の標識をベニヤ板で作って立てたが、心ない者の仕業で、今の標識が建てられるまでは何度引き抜かれたか数知れないという。

初めて安岡キサさんにお会いしたとき、「私には隠すことなんか何もなくてすけれど、悲しいことは多くてね。おもしろい話なんか何もありませんよ」と、静かに話してくれた。



生い立ち

私は、明治四十四年二月七日、上磯郡木古内村字釜谷に生まれた。男一人、女一人の兄妹だった。

私の母親は、私を産んで二十日もたたないで死に、幼かった私にはよくわからないが、父は日露戦争で死んだらしい。兄は父方に育てられ、私は、上磯の釜谷で漁師の網元をして、良い暮らしをしている孫ばあさんに育てられた。亡くなった母親の親も同じくらいの子がいたので、十三才くらいまで子守りをしながら一緒に暮らしてきたが、辛くて逃げた。

その頃、学校は尋常高等六年生までであり、兄は行つたが私は行けなかった。

ブリキ屋の女中として

函館の東雲町に、ブリキ屋と鍋掛け屋（鍋などを直す仕事）をやっている店で、職人を十九人雇っていた所に働いたが、その家族は九人いた。私はそこで十三、四才から十八、九才まで働いた。ご飯炊きが辛くて十九人

もやめた所だ。毎朝三時に起き、お弁当を十何人分も作った。就寝は夜の十一時で、夜は店を閉めてから、お弁当のおかずに入れる梅干と塩辛を買いに行った。

寒い冬は手があかぎれでひどかった。クリームをつけると食べ物に匂いが付くので、味噌をつけなさいと言われたが、とても痛くてつけられなかった。

そこのおばあちゃんは、私が良く働くからと、雇主おばあちゃんの息子)の次男が兵隊から帰って来たら、嫁にしたいと言っていた。

昭和三、四年頃で給料が七円だった。その頃、餅屋は十五円という話があったが、離さなかったし、自分がやめれば困ると思うと出れなかった。風呂代は五銭、クリームは上等ので二十五銭の頃だ。雇主はやさしい人で、盆と正月には、おかみさんに内緒で五十銭をそととくれ、可愛がつてくれた。隣に貯蓄銀行があったので、そこへ貯金した。

しかし、兄が兵隊に行き、おばあちゃんに毎月五円仕送りをしなければならず、残り二円の貯金だったので、娘ざかりをメリンスなど着たことがなかった。当時新川町に萬歳館ばんざいという映画館があり、その通りに今の朝市のような大きな市場があつて、買物に行つたが、クリーム

は手につけることを禁じられていたから、えび茶の足袋だけ買った。足袋は二十五銭だった。十七才頃から生理があつたが、脱脂綿を買いのにゆるくなかつた。古本や新聞紙を切つてトイレに下げたものだ。

よそへ行くとき、奥さんは、きれいなチリ紙を持たせてくれた。だが、着物を脱ぐときに、ふところから落ちてしまわれてしまつた。

また、出掛ける時は必ず髪結さん呼んで髪を結つた。その頃の髪型は、日本髪か耳かくし(洋髪)だったが、奥さんは丸まげを、私には桃割れを結わせて、お供に連れて歩いたが、褒められた。お店にお客さんが来て、私が出迎えると、行儀が善いと褒められ、あんこ(男の若者)たちが来ると、ここの娘かと聞いた。当時の写真があつたが、皆に持つて行かれ、今は手許には一枚も残っていない。

雇主に娘がいたが、映画に行き、弟たちが娘の夜食を食べてしまい。私はよく叱られた。雇主が子供達に、「この人は朝三時に起きて働いているんだぞ」と訓した。

雇主の次男が憲兵で、私の兄がその班に入つていたが、馬跳びで怪我をし、十五円送つてくれと言つてきた。でも十二、三円しか送れなかつた。その後、お店の次男が

除隊になり、次男の嫁にと言われている私は、読み書きの出来ない自分がここにいたら、どんなに迷惑を掛けるかと思うと、いたたまれず、その店を出ることに決意し、ある日、風呂へ行くと言つて出た。私と縁談のあつたその人は、その後私を捜したらしい。

大 阪 へ

たまたま、本州へ出稼ぎに行く人が多く、昭和十三年五月、私は大阪で羊かんを包む皮（中側が銀紙で表が竹の皮のような模様入りの包み紙）を作る仕事をしていたが、大阪陸軍工廠に勤めていた同郷の、今の主人とめぐりあい、結婚した。

主人は二十一才で兵隊検査があり、二十二才で雄別炭鉱に働いたが、落盤で怪我をし、歌志内の病院で良くならず、大阪の病院へ行った。

その医師の紹介で、昭和十三年に大阪陸軍工廠に勤め、大砲など弾に詰める薬莖（薬莖）（真鍮製の小筒に火薬を入れたもの）を造る仕事をしていた。昭和十八年頃は、大砲を船まで運ぶのに油がなかった。主人の親が炭焼きをしていたことが履歴書でわかり、陸軍工廠の命令で、木

炭車を走らせるための炭を焼くため、奈良県十津川の、吊橋のある奥地に入つたので、私も一緒に行った。

そこには四世帯の夫婦が入居した。作つた木炭を背負つて、鉄道線路の枕木のように横に渡した丸太の隙間から、川底の見える吊橋を渡つて、道路まで運び出すのが女の仕事で、主人達は、吊橋の上をケンマ（櫓に杉の丸太をつけたもの）を綱で引つ張り、運び出す仕事だつた。船もガス炭（石炭のない時代で木炭の熱を動力にした）で走つた時代だ。

仮りの住居は、杉の丸木を出すときに剥ぐ杉の皮で屋根を葺いた。主人が訓練に出掛けている間に、木炭を袋に詰めるのも私の仕事だつた。

蛇や蛙の多いところで、ヤカンの蓋ぐらい大きい蛙が蛇が呑みこんでしまつたり、口で尾をくわえ、自転車のタイヤのように丸くなり窓辺にぶら下がっているのを、暗がりてチューブかと思つて触わつたら、冷めたいので蛇だとわかつた。暖かいところが好きで、昼は大きな石の上で丸くなつており、炉辺の炭火のそばにいたり、茅葺きの屋根の丸太を這つて、餅搗きをしている湯気の上がるところに下がつていたりで、その度に肝の冷える思ひだつた。

その後、その十津川は、雨のため水が出てズリ（山崩れ）で全滅し、生き残った人々が北海道へ渡り住んだのが、今の新十津川だと言われている。

十津川を舟と筏で渡ったが、上りは舟を引つ張つて上り、帰りは荷物を積んで流れて下つたものだ。昭和十八年には、大きな橋が架かったが、野尻に倉庫があり、そこから荷物を積んで十津川を舟で往き来した。引越しなどは筏だった。

函 館 へ

終戦後、ふるさとの木古内へ戻ったが、主人はまた炭鉱に入り怪我をして、昭和三十年、函館へ来た。職業安定所の門をくぐり、同年十二月十五日付で、野犬捕獲人として市の保健所に雇われた。臨時雇だったが同三十七年に準職員、同三十八年には技術員として正式の職員になったが、私は同三十一年三月一日付、管理人として嘱託で雇われ、今日に及んでいる。

函館へ住むようになり、ある日、主人のお弁当を持って行ったら、駅で、縁談のあつたお店の次男に行きあつたが、何も言えなかつた。主人より私は四才年上だが、

両親がいないので親切にしてくれる。

日乃出町にいた頃

主人が野犬捕獲人として市に雇われ、私たちは日乃出町の官舎に住んだ。塀をまわした家だった。

現在の、カトリック少年の家の向い側に救護施設の明和園があるが、その一角にあった。また、道路をはさんで海側は、冬になると橇遊びや、自衛隊が来てスキー滑りをしたほどの、大きな砂山があり、新川のところにもあつた。

その砂山は、しけのため波が寄せてきて砂山が出来たとされている。

むかし、啄木の歌に「砂山の砂に腹這い初恋のいたみを遠く思い出づる日」と、砂山を歌っているが、私が住んだ昭和三十年頃は、そんな面影などさらさらなく、市で管理していた四軒か六軒つづいた家で、ハモニカ長屋と呼ばれ、困った人たちが入る長屋があつた。その後ろに貧民部落があり、昭和九年三月二十一日の函館大火以来、その砂山に貧民が増えたと言われているが、私が住んだ頃でも、三十戸か五十戸あつたと思ふ。

よく人殺しとかやつた犯人が貧民部落へ逃げ込むので、その度に刑事が来て、私の家の塀に穴を開け、そこから覗いて張り込みをするので気味悪かった。

やみ米を売りに来た女の人が、お金も米も盗られ裸にされたこともある。

砂山に住む貧民たちは、リング箱やトタン板などで掘立小屋を造っていたが、その小屋は、砂山に横穴を掘り壁や天井は板で覆い、畳代りに板やござを敷き、明りはローソクを用いていた。空気穴にする煙筒を砂の上に突き出し、出入り口には階段を二、三段つけ、葎を垂らして生活していた。

官舎に移り住んだ初めの頃は、何度も物を盗まれるのを恐ろしかった。

塀の中に乾してある洗濯物を、竹の棹の先にクマ手のような針金を付け、それに引つ掛けて盗るのだ。盗ったあとその棹を投げていくのでわかった。いわし籠を自転車につけた六十五才くらいの人が専門に盗みをしていらしい。靴下が一度に五、六足もなくなつたが、物を掛けて覆っているの探しようがなかった。泥棒に四回も入られ、お米を二斗、主人のオーバー、アノラックや、私の買ったばかりの洋服も盗まれた。大きなリヤカーの

跡が、道路を越えて向い側へとつづいていた。

主人は役所へ、子供は学校へ出掛けたあと、ガラス拭きをしていると、犬のお客が来たので、その応待をしている間にバケツを盗まれた。また、空バケツに雑布を干しておいたらそれも盗まれ、バケツはどれほど買い替えたかわからない。豚の餌を集めるリヤカーで、薪木を盗んだりもしていたようだ。

戦後、物資のまだまだ足りない時代で、捕獲し、収容していた犬を、自分の犬だといって、イカ割り用のマ、キリを持った四、五人連れの男たちが犬を連れていった。殺して肉にし、食べてしまったらしい。

官舎の側にニッポウ食品の網工場があり、大きな門を閉めてしまうと聞こえないので、門を叩いて電話を借り警察へ連絡したが、殺されてからでは仕方がなかった。

そんなことのある度に電話をつけて貰うよう役所にお願いしたが、七年経つても付けて貰えず、やっと電話が付いて一週間もしないうちに、誰かのいたざらで電話線を切られ持つていかれた。その当時、電線は高いお金になつた。

戦後十年を経ても、住民の生活環境は立ち遅れていた。家の前の道路はまだ砂の道で、カトリック少年の家の在

る辺りは葦原の湿地だったし、今の金堀小学校や運輸会社の辺りは、全部ゴミ捨場で蠅がひどかった。こやし汲みの馬車が何台も通ったが、貧民部落の女のところが遊びに行くのか、馬車をその辺で繋いでいくので、官舎の付近は、こやし汲みの馬車が連なつたものだ。

見晴町へ移る二、三年前、隣に施設の建物が出来た。

入所した人が、お酒を飲んで焼酎ビンを投げつけ、よくガラスを割られた。ある時はトイレの中に男の人が忍んでいて、びつくりしたこともある。その施設には若い人も老人もいたが、変な人ばかり居た。

家にポンプが付いていたが、井戸水は赤くて飲めず、水道は道路を越えたハモニカ長屋の外の一つあるだけで、貰い水に行くのがとても恐ろしかったことを覚えていて、何年頃か記憶していないが、日乃出町にカトリック少年の家が出来てからは、そこに住む人柄も少しずつよくなつてきた。

一方砂山には、砂鉄工場の小さい仮小屋が既に立っており、砂鉄を採るため、夜は裸電球を棒に引つ張つて付け、鉄と砂を区分するのにホースで水洗いする作業が、昼夜を通して行われていた。その砂鉄は自動車でどこかへ持つて行ったが、船で室蘭へでも運んだのではないだ

ろうか。砂は左官屋が安く買ったが、作業小屋にはトイレがなかったので、業者は、砂を買うのかトイレを買うのかわからないと言っていた。

差別意識

昔、犬の捕獲人は個人だった。昭和二十七、八年頃は毛皮が一枚千円もしていたようで、やみ屋が捕獲し、青森へ持つていったらしい。それで、犬を捕獲する仕事はなお嫌われるのかも知れない。

給料制になつたのは主人が初めてだった。捕獲人は四人で、リヤカーを使い、二人ずつ二方面に分かれて歩いた。ある日主人が自転車仕事の途中、学生らしい若い男に石をぶつけられ、額を四針も縫う怪我をした。

誰にでも生活があるだろう。私たちも生活のために働いてきた。真面目に働いていけば目があくこともあるだろうと思つて耐えてきた。この見晴町も人家があつたので、はじめは野犬抑留所を建てることに反対された。

私は、マーケツトや廉売へ買物に行くが、今でも「犬殺しのばつちやんだ」と顔を知っている者は囁き合ひ、「どれどれ」とつつき合う。「犬殺し」とまで言わなく

てもよいのに、言葉ですよね。子供達はどれほど苛められたかわかりません。

自分はあの世へ行かなければならない。元気で働かせて貰うよう、犬たちが苦しまず成仏するように、毎日朝夕一時間ずつ、一緒に居る孫たちと家族揃って拜んでいるのです。死ぬまで家族と同じに考えています。

猫でも、人が真似できないね、ずみを取ってきたのかと、魚をやることもあり、墓にも供えてやります。小さい子猫には身をほぐしてやり大きい猫には骨を与えてやりま
す。「犬の子いらない」と、五匹も七匹も持つて来ると、可哀そうで仕方なくて、牛乳を買つてきて飲ませます。でも、「犬殺しのばつちやんだ」と、顔を見る人、見る人と言われ、人の心が見れないものかと悲しくなります。そんなことばかりあるけれど、中には「お世話になります。お参りもできなくて」と言ってくれる人もいます。そんな時、この人は犬に守られて仕合せになる人だと思つて嬉しかった。

当時の世相

二度目に伺つた土曜日は、午後から休みだとお聞きし

たが、ご主人は読経の最中だったので、邪魔になりはしないかと気になったが、キサさんは気さくに応じてくれた。

お伺いしている一、二時間の間に、電話のベルは幾度も鳴る。「仕事の電話なので、家を留守にできないし、平日は、午後になると上磯方面などから、毎日仕事の車が来るので忙しくなります」と、語るキサさん。

市民が不要となり、処置に困つて持つて行く犬を処理する仕事なのに、他人事のような冷やかな言葉をも、生活のために耐え、毎日が哀しく、辛い思いで生きてきたサキさんは、「この頃、ようやく目が開いた気がします」と語る心の内を、市民の私たちは、どう受け止めればよいのだろう。

犬の放し飼いが多く、食糧の不足な時代は、野犬に幼児らが咬み殺されたり、畑、家畜が荒らされたなど、新聞紙上で報じられることも珍しくなかつたので、野犬の恐ろしさは誰もが記憶するところだ。殊に、冬は飼犬でも野性化し、餌を求めめるのか、住宅街を徒党を組んで群れ歩くさまは、大人でも恐れたほどだった。

こんな世相の中で、行政の取り組みはどうだったのだろう。

捕獲の過去と現在

保健所の方の説明によると、昭和二十五年八月二十六日、狂犬病予防法が施行され、予防注射はしていたが、函館市衛生課の中の業務として捕獲もやっていた。昭和三十四年、同四十九年に条例が改正されている。

戦後、ペット類が多くなり、その頭数も増えてきたが、飼いがルーズなために、畑の被害なども多くなった。特に咬傷事故が目立った。(集配人・幼児・牛乳・新聞配達人・徴収人・清掃人・遊んでいる子供など)。

昭和四十五年の後半より麻醉銃を使うようになったので、捕獲は容易になったが、それ以前は、毒餌と針金を併用した。

その後、飼育者の自覚により、放し飼いや捨て犬が減り、登録頭数が増えてきた。同四十八年から亀田市と合併したので、不要なものを含めて数の上ではいくらか多くなっているが、傾向としては良い方向に動いてきた。と言う。

捕獲された数を知ること、どれほど野犬、またはルーズを放し飼いが多かったかわかると思い、参考に捕獲

頭数を掲載した。

犬の捕獲頭数			
年	頭数	年	頭数
昭和27	765	昭和42	2,198
28	1,868	43	1,622
29	1,970	44	1,316
30	1,737	45	2,056
31	2,576	46	1,219
32	2,831	47	1,428
33	2,994	48	1,378
34	3,148	49	1,635
35	2,788	50	1,357
36	3,513	51	1,169
37	4,526	52	888
38	5,809	53	751
39	4,426		
40	4,157		
41	952		

(41年度までは、不要のものを含めた路上捕獲頭数。42年以降は、路上で捕獲したもののみ)

(註) 特殊な業務なので、人がいなかった。

(保健所調べ)

昭和二十七年、同四十一年のように、捕獲数が少ない経緯の中には、働き手がいなかった、臨時でいたということもある。

業務の推移

函館昭和史郷土新聞資料集(元木省吾)より引用。

昭和六年二月四日付Ⅱ野犬買上げ二月三日から

一〇日間、市内巡查派出所。牝犬三〇銭、牡犬二〇銭、第一日三一匹、第二日六五匹。

同六年二月七日付 野犬狩二月六日、水源池裏五〇、谷地頭二四、高竜寺裏一〇、合計八四頭。二月七日二頭、夜か午前二時、三時の早朝行う。

昭和六年一月一八日、二月八日付 近頃の野犬買上げで思い出した。高森町に野犬狩の二名人が居る。桑田さんと斉藤さんと市と警察の囑託。桑田爺さんの投縄が飛んで、首つ玉にかかり忽ち混棒が頭上に落下すると、如何な猛犬もかなわない。

昭和七年三月一〇日、三月二八日付 函館署野犬買上。三月一五日から一〇日間。牝二〇銭、牡一五銭、六ヶ月未満一〇銭。此期間買上数、牝九四、牡三〇、子供一一三。金額四二円一〇銭。

昭和八年三月六日付 野犬買上三月一五日から二四日まで。牝二〇銭、牡一五銭、一月未満一〇銭。大黒外五交番。

昭和一四年三月二日付 野犬狩二月一〇日から二八日まで、四四六頭。

昭和一五年一二月四日付 北海道都市保健衛生事務研究会。九月五日、六日。七市の関係者と、警察

関係。

昭和二三年五月一四日付 市内の道立三保健所五月三一日付で、函館市に移管される。

同年五月二七日付 財政負担問題なお解決せず、札幌で会合。

同年九月三日付 市立函館保健所新発足。重野所長、元木次長。

以上、この資料集によれば、野犬狩は民間の手で行われ、その買上げは警察で携わっている。時期は一月から三月の寒いときで、時間は、夜か早朝に行われたことがわかる。

(高森 湯川尻から大森町まで砂丘がえんえんと続き、金堀川の南は一番高く盛り上がっている。「たかもり」高盛、高森などと書かれていた。)

衛生行政制度の変せん

衛生面について、どのように捉えられてきたのか、北海道保健所長会二十周年記念誌の中から、今日に至るまでの流れを追ってみた。

明治三十年、本道では北海道庁官制の大改正があり、十九支庁が設置されると共に六部一署（内務、殖民、財務、警察、鉄道、土木及び監獄署）がおかれ機構が整備されたが、同官制第二十三条によると、衛生事務は警察部の所管するところとなっている。

大正十年十一月（勅令第四三五号）庁府県衛生職員官制が制定され、衛生事務に従事する技術職員として衛生技師及び衛生技手が設けられ配置されるに及び、地方庁における衛生課は、単に衛生事務を所管するに止まらず遂次技術職員をおくことにより強化されてきた。

本道の衛生行政の機構も、衛生課の創設以来徐々にその内容を充実しつつあったが、依然としてその業務の中心は防疫事務であった。

昭和十七年、地方庁の機構簡素化を機に、同年十一月衛生事務は内政部に移管された。

これは、衛生行政の一つの進展であったが、当時のいわゆる衛生取締りに関する純警察に属する事務は、そのまま警察部の所管として残されている。

昭和二十二年四月、連合軍総司令部から「保健所の拡充強化に関する覚書」が発せられ、同年九月に

保健所法の大改正をみ、保健所は従来の保健指導業務をさらに強化するほか、公衆衛生関係の行政事務をも処理することになり、いわゆる衛生警察事務は全面的に衛生部に移管され、保健所を名実ともに衛生行政の第一線機関とする行政組織が確立された。（以上、道保健所長会二十周年記念誌より抜萃）。

では、大東亜戦争が始まる前後の昭和十五、六年から終戦後の同二十二年、連合軍の覚書が発せられるまで、捕獲の実態はどうだったのか、関わりのある方に聞いてみた。

昭和十六年、A氏が子供の頃は、やみ屋の「犬殺し」がいて、捕えては皮を剥いで毛皮を売っていたようだ。また、B氏によれば、函館市では司法行政と衛生業務とタイアップしてやっていた。市町村と協力し、毒まんじゅうを使い、予告なしに捕獲、毛皮は軍で使い、肉は自治体で処理したらしい。と話してくれた。

焼 却 室

お天気良かったので、焼却室を見せていただいた。

戸の入り口左側には、作業の前後に手を消毒する液を入れた白いホーローの洗面器が据えられていた。中へ入ると私の背丈ほどもある釜場の大きな扉が立ちはだかるように目に飛び込む。釜の上には、キサさんの心遣いであろう。花がいくつも花瓶にさして飾られ、ローソク立ても置かれて、誰でも自由にお参りできるようになっていた。

「ここに抑留所が出来てから十四年目で、新しく釜を直して貰ったので楽になりました。焼くときに犬の油が付くのか、焼いたあと、釜の引出しを夫婦が力を合わせても、やっと引き出せるほどでした」とキサさんは言う。

観音開になっている釜の扉を開けると、中側は肌色の煉瓦で造られている。引出しには車が付いていて、レールの上を出し入れするようになっていた。犬の油で焼けるのか、古くなるとレールが曲がってしまうそうだ。

どれほど重いかと、私もキサさんと引いてみたが、相当力のいる仕事だ。一メートル五十センチはあるだろうが、鉤の手になった鉄の棒が二本備えてあり、その先を引出しの両側にひっかけて引き出す。

釜場でスイッチを入れると、隣の小屋からパイプを通じて油が釜場のタンクに入り、自動的に焼けるようになる。

っている。焼却の時間は二時間半くらいかかるが、人間と同じで、ガンなど病気を持った犬の骸はなかなか焼けないという。

「人づてに聞いて来るのでしょう。個人で、遠く上磯・七飯・当別などからもペットの死骸を持ってきます。必ずお金のことを聞かれますが、ここは市で管理していますので無料です。こんど、立待岬の啄木の墓地へ上る坂の上り口に、個人で経営しているペットの納骨専門の地藏堂が出来ました。焼いた骨はどうしますかと聞いて、そこを教えてあげると、大抵の人は骨を持って帰ります。供養料が一回二千元ほどかかりますが、畜魂碑も出来ています」と、写真を見せて下さった。

「困ったことですが、今でも犬の死骸をここまで持つて来ず、坂下の橋のところへ捨てて行きます。子供の知らせで行つてみると箱の中で腐乱しているのです。夜、捨てて行くようですが、きつと人に頼まれて来るのです。よう。きちんと持って来るべきです」。

「先日、若い女の人から電話で、"可愛がっていた猫が死んでから、毎夜か、なしばらくに、あ、恐ろしくて眠れないのですが、どうしたらよいでしょう"という相談がありました。成仏できないのでしょう。一度会つ

てきたいのですが……」と、気遣うキサさんだ。

「犬魂之標」

周囲が一メートル二十センチ四方もありそうな、焼却室の真四角いコンクリートの煙突がそびえ立つ、小高い斜面の少し上の方に、「犬魂之標」という犬の墓標がひとつそりと建っている。その両側には、安岡夫婦がわざわざ大沼から背負ってきて植えたというオンコの木が、丈二メートル近くにもなっていたが、左側のオンコは誰かの火の不始末で焼け、一メートルにも満たない。でも、三度目に伺った八月上旬には、実を赤々とつけていた。

この「犬魂之標」は木造りの質素なもので、丈は二メートルほどもあるのか。毎年九月二十日、犬を祀る日と定め、市の関係者が集まり、



犬 魂 之 標

犬の霊を慰めるための供養が行われている。

たとえば、野犬であっても、意ならずして処分された犬を、また、働く職員の気持をやらわげるといふ、二つの意味をこめた供養だとお聞きした。

この墓標の周りには、個人で持ってきたペットの墓標が幾つかあるが、強いての頼みで断わりきれなかった、とキサさんは話す。

小さいどの墓標の前にも、毎日、キサさんが手向けるという水の入った器と、ささやかな花が飾られていた。

けい留室（繫留室）

焼却室の向い側は、けい留室だ。内部を見せていただけいたとき、古びた首輪をした一匹の犬が繋がっていた。諦めたのか、おとなしい。

「犬でも悲しいときは涙を出します。人間は涙が頬をつたいますが、犬は皮膚に毛があるので流れず、目のふちにいつばい溜めます。犬だつて一つの命です。嬉しい、悲しいは表情でわかります」。

「すばしい犬は、捕獲車が行くと消毒臭いので、その匂いで逃げます。捕まるのは大抵人なつこい犬です。」

犬が捕えられてくると、私は、どうして逃げなかったの、どうしてここへ来たの、と話しかけます。捕えられて三日間は、ここに抑留しておきますが、それを過ぎると処分されるので、一時間でも、一日でも早く飼主から連絡がないかと、そればかり思っています。

この仕事は、誰かが受け継いでいかなければなりません。誰がやっても、市民の皆さんは、暖かい思いやりで見守ってあげて欲しい」

今までは、麻酔銃で捕えたものや、病死した犬が殆どだったが、最近は、車に撥ねられる犬が多くなったそうだ。

表彰のかけに

キサさんのご主人安雄さんは、二回表彰された。

一回は、昭和三十九年十月二十二日、北海道保健所長会で……。二回目は、同五十二年十月二十日、全国環境衛生職員団体協議会で、「公衆衛生及環境衛生向上に寄与した」と、表彰を受けた。

キサさんの仕事振りを知っている係の方は、「一人で

はとても出来るものではない。奥さんの内助の功があったればこそだと、私たち職員は思っています」と、力強く言う。

日乃出町にいた頃は、夫婦ともども苦勞したと、その係員はつけ加えた。

かつて、私の犬がフライリヤ病にかかり、心臓の中の糸状虫おしを除去する手術をしたが、麻酔が醒める途中で、心臓発作を起こして死んだ。

担当獣医は、処分してくれる所があるからと、持つて行ってくれた。

ふと、そのことを思い出したので、キサさんに話をしたところ、「ここしか持つてくる所がありません。ここへ持つてきたでしょう」と言う。

犬を飼っている人は多い。皆、いつかはお世話になる所なのだ。私たち市民は、目立たないところで、市民のために、仕事ゆえ哀しく、辛い思いをしながら働いている人々にこそ、感謝の気持を忘れてはならないと思う。



函館の髪結

(一) はじめに

近藤弘子

古来から日本女性の最も誇りとされてきた緑の黒髪。その長い歴史の中で女髪結の発生は一般的に江戸の中期とみられている。

『江戸結髪史』によると上方で明和初年（一七六七）頃、歌舞伎役者の男衆（役者の身辺雑事を勤める男）の妻が遊女達のために結髪をしたのが起源であるという。

当時遊里は歌舞伎芝居と共に風俗の流行の基であり、江戸中期から後期への町人社会で女性風俗の先端を行くと考えられたのは遊里の女であった。それまで一般女性は必ず自身の手で髪を結うのが嗜みとされていたのに、物堅い下町の娘やおかみさん、山の手の武家女性までもが、遊女、役者の真似をして派手な衣裳や髪型に身をついやし、女髪結の顧客となっていたのである。

それは町人階級のめざましい経済力の表われであったが幕府は悪弊として、しばしば禁令を出している。にもかかわらず嘉永六年（一八五三）における江戸市中の女髪結は千四百人余と『日本結髪全史』には記録されている。

この時代は髪が男女・階級・年令・境遇・職業を適格に区別しており、その種類は数百にも及んでいる。そして明治一―大正一昭和と伝承されてきた、いわゆる代表的な島田、丸鬢、銀杏返し等の日本髪は江戸年間に定着し改良されてきたものである。

維新後の文明開化は風俗にも新しい息吹きをもたらし、明治四年、「断髪令」が出された。これはそれまで髪を結いようで身分が示されていたことへの画期的なでき事であった。女性の中にも古い因襲をかなぐり捨てよう

に断髪する者も出てきたが、明治政府は翌五年、「散髪の儀は勝手次第たるべき旨、先般御布告相成、専ら男子に限り……抑婦人女子衣類は素より男子とは区別の御制度に……」と「女子断髪禁止令」を出し、女性の断髪を戒めている。

明治維新は身分制の解放であり、男性にとって「断髪令」もその一つであつた。しかし女性の場合はこのように風俗に干渉したのである。「断髪令」を境に髻を結わなくなつた男の頭は床屋で処理するようになって男性の髪結は亡び、その後官立の理髪伝習所が設けられた事でもわかるように、男性の理髪は今日まで一貫して職業として発展してきた。そしてその後は髪結といえば女と相場が決まつてしまつたのである。(地方によつては大正期頃まで女髪結という言葉が通用していた。)

産婆と共に明治以前から女の仕事として公認されてきた髪結であるが、明治中期の進歩的な雑誌『女学雑誌』には、「髪結、是れは無下に申しき業なれど、女の内職としては揃一、二本を資本とは手取り早き業なり……二銭より、一銭五厘……一日の収入おおよそ八、九銭」

(「細民婦人の内職」明治二十三年九月二十日)と書かれ、『日本結髪全史』には明治四十四年の東京市の女髪

結は三万人で、うち鑑札を受け正規の府市税を納めている者は二千九百四十人余と記録されている。

明治期に出てきた新しい女の職業—女医、看護婦、女教師等とは異なり、ごく普通の女達の仕事であつた。そして「髪結の亭主」という椰揄が今日まで根強く残っているが、厳しい徒弟制度の中で磨かれた技術でありながら、当時は社会的評価も低く、世間一般の待遇も悪かつたのである。しかし一方では「髪こそ女の命」とも言われ、その時代の風俗を反映してきた日本女性の髪型は明治以後、大正期の束髪、昭和期のパーマの流行を経て、髪結の呼び名も美容師と変わつていった。

昭和二十六年六月の理容師、美容師法の規定により国家試験が実施されるようになってはじめて男性の理髪師＝理容師と、女性の髪結＝美容師とは職業として同一に認められるようになったのである。

女の伝統的な仕事でありながら、とかく陽の当たるところの少なかつた「髪結」。その存在に光を当てたい。

参考資料

「江戸結髪史」 「明治女性史(三)」
「日本結髪全史」 「紅と紺と」

(二) 明治・大正期の女髪結について

近藤弘子

古くから港町として栄えてきた函館には江戸時代から私娼がみられたが、享和三年（一八〇三）に官許公認の遊女屋「山之上町遊郭」、文政元年（一八一八）に、「島の郭」ができています。

女性がお金を払って髪を結うようになったのは花柳界が皮切りであったことを考えると、当時すでに女髪結もいたのではと想像できるが、私が調べた限りではその存在が明記されているのは明治二十一年発行の『函館新繁昌記』にある。当時の函館の様子は次のようである。

人口	四万八千人
貸座舗（遊女屋のこと）	二十五人
飲食店	百五十五人
芸妓	八十六人
娼妓	百八十一人

「女髪結」は蓬萊町一佐々木ナツ、相生町一八田キヨ、旅籠町一渋谷ヤス、会所町一佐藤キノの四人の名が見られ、他に女性の名が出てくる職種としては遊芸師匠、引手茶屋が書かれています。

開港以来の外国軍艦の入港や、樺太漁業や商取引による出船入船、そして北海道開拓の足場となつて多くの男達をさらに奥地へと送りこんでいた明治中期の函館を背景に、女髪結の仕事は花街からスタートしたのであるうか。

同じ頃「明治二十三年、函館における束髪と洋装は函館控訴院夫人と深瀬病院院長令嬢の二人」（『函館新聞』より）とあるのは明治十八年、東京で宣教師ホワイト氏が洋装のために西洋風の束髪を唱えたのがきっかけとなつて、「婦人束髪会」ができているのを考え合わせると

異国文化に馴染み、ハイカラ好みであった資産家育ちの函館女性の一面ではなからうか。

明治三十二年発行の『新編函館繁昌記』には「諸職人賃銭雇給金」として船大工や土方など三十二種類が書かれ、その一部は次のようになっている。

	上	中	下
散 髪	十六銭	十四銭	
髻 剃	五 銭	四 銭	
女 髪 結	七 銭	五 銭	三 銭
和服裁縫	七十銭	五十銭	四十銭
洋服裁縫	一 円	八十銭	五十銭

女髪結の結い賃は髻剃ひびそりよりちよつと多い位で散髪の半分。和服裁縫と比較してみると非常な廉価であつたようだ。

ところで明治中期以降の急速な資本主義の発達は働く女性を急増させていたが、大正期になると全国的にさまざまな分野に台頭している。函館の場合はどうであつたらうか。明治期に定着していた女髪結の働く女性としての位置は、大正期の函館職業婦人の中でどのようなものであつたらうか。

大正七年二月五日(十五日)の函館新聞は「覚醒した函館婦人」として『女の収入(一)(十)』をとり上げている。それを要約すると当時の函館女性の仕事と収入は次ページのようになる。

そこには明治末から盛んになっていった北洋漁業の基地函館における女の仕事の多様さと、その働き振りがうかがえる。そして個人差もあろうが、女髪結の産婆につぐ高給振りは「洗濯婆」や「女中」などとあいまつて、当時の函館経済界のパロメーターでもあつた大森遊廓や見番の賑わいのせいかとも思われる。



抜歯毛筋

元結通し

女の収入(一) (十)

※ 大正七年二月五日～十五日の函館新聞による

職 種	内 容	他	賃 金
活動写真の女案内人	電気館、音羽館、寿館で十五、六人		月に四円～五円
女 弁 士	三人(弁士か技師の妻)		月に十五円～二十円
裁縫の賃仕事	木綿物二十五銭～三十五銭 絹物四十銭～八十銭 裁縫所を開くと生徒一人七、八十銭の月謝		月に十円程
洗濯 濯 婆	洗濯物や洗い張りをするが、女中の世話・妾さがし・芸娼妓の口をさがす、ぼろいもうけがある。		月に八円～九円
網 工 場	近年一般労働者の賃金値上げと共に値上げした。		一日四十銭～七十銭
綿 工 場			一流で一日四十五銭
浜 稼 ぎ			一日六十銭内外
女 交 換 手			一日三十七～五十銭
豆 選 り 女 工	函館では豆選り工場は二、三カ所		一流女工で月三円
各会社の女事務員	銀行の女事務員は女給仕のようなもので三円～八円		月に十一、二円
女 髪 結	市内に二百三十人。 一人の営業者に多くて三人、少くて一人の梳手(弟子)がついているから四百人近い女髪結がいる。大規模な人は男子も及ばぬ莫大な収入。		遊廓や西部花柳界をお得意とする人は月百二、三十円
女 理 髪 師	最近の事で理髪同業者に認められていない。男子と差がない。		七円が普通で十二円
看 護 婦	講習生時代は病院に食べさせてもらって二、三円の小使銭を貰っている。		古参は月に二十～三十円。附添は三十円以上

産婆	収入が一定せず、豊かな家庭に出入りしている人は月に二、三百円以上。路地なんかで小さくやっている人は二十円位。	月、二、三百円と三十円まで個人差あり。
お琴の師匠	月謝一円を四、五カ月ほどまとめて出す。弟子が三十人いれば上々。	月四十円
お花の師匠	一円から一円五十銭の月謝で廓内の中働は二、三十円の心付けもあるが、それには客座敷に立入るようでないければ、古参になるともらいが多いが危険も多い。腕次第	月三十円内外
女中	早坂千賀子と横山きみ子の二人。早坂さんが明治四十一年亀田屋小路に開業したのが当区女医の初め。	大きな家で月、二、三十円そば屋で十四、五円
女医	高女か師範の出身者は最初教壇に立つて十六、七円。	年七、八百円の収入で月別にすると六十円
女教師		月二十四〜八十九円迄

※ 牛乳一合、六銭。米一升、三十八銭（七月で）。電車車掌・運転手月収十九円（五月で）

全国的にみると大正中期は束髪全盛で一般家庭ではまだ自分で結っていたのに、「函館における女髪結の相当の羽振りの良さと世間の一定の評価はその後の新聞記事にもしばしば見られるのであった。

我が国の漁場産業を支え、北海道最大の人口を誇り、東京以北随一の花街でもあった明治、大正期の函館の隆盛と共に活躍していた女髪結達の足跡である。

*裏面から見た 女髪結さん

参考資料

現在二百七十名、収入は産婆の次位

「函館新繁昌記」

函館新聞大正十一年五月十六日

「新編函館繁昌記」

*進歩した髪結さん 函館新聞大正十三年六月十五日

*盛況で集った美人千名、昨日の結髪美装大会

函館日々新聞大正十三年九月二十日

(三) 戦前の函館婦人髪結組合

酒井嘉子

髪結と理髪

明治三十年発行の『日本女禮式大全上巻』には「男の髪を結ふ職人ありたれども、婦人の髪を結ぶを業とするものは絶えてなかりしが、近来の婦人は皆競ひて人に結ばしめ……よりて女髪結を業とするもの日に多し、これ一の弊風なり、凡そ婦人たるものは、自ら其髪を結び、又一家の人の髪を結ふはその本業なり、主婦たるものは能く其本業を務め、髪は自ら結ふて、髪ゆひ職人に掛らぬ様にすべし……」とあつて、女髪結が多くなつてきている状態を弊害と決めている。

しかし、江戸中期から主として花柳界相手に女髪結が

存在していたことは、(一)でみたとおりである。函館においては、(二)にも引用されているが、明治二十一年発行の『函館新繁昌記』に諸営業一粒撰として、理髪職では末広町の宮本萬吉と奥山猪三太、富岡町の越村清勝と五十嵐定吉の四名、女髪結では蓬萊町佐々木ナツと相生町八田キヨ、旅籠町渋田ヤス、会所町佐藤キノの四名が載っている。この時期、既に理髪職と女髪結が別個に独立していたことと思われる。

明治二十四年の『函新』を繰っていると、一月十五日付には理髪床休業と、四月十四日付には当区内理髪床組合は現在六十七戸うち開床六十一とある。一月十八日付には「蓬萊遊廓の女髪結全ギ星、一正、丸仙なども一昨夜通し大働き……結びたる鬘は丸鬘、唐人鬘、潰し島田

など様々の注文……」とあつて、蓬萊町芸娼妓連中の年二度の紋日のお化粧やお服装（つくり）に活躍する女髪結のことが載っている。即ち当時の新聞も、女髪結と理髪床とを区別して使っており、後者は既に組合を組織していたことがわかる。

理髪組合

大正四年発行の『函館の理髪界』によれば「函館に初めて結髪床ができたのは文政（一八一八—一八二九）の初年で、大黒町の金高印江戸屋で……」断髪令の発布後、鏡を飾った新式理髪店を最初に開業したのは奥山と言ふ男と宮本萬吉であり、その理髪料はバカ高く金二十五銭から五十銭とある。ところが、函館の人口増加と共に理髪床はふえ、料金の競争を始めたので、明治八、九年組合を作り料金を定め、店舗数を制限したが、この組合は明治十五年、北海道開拓使（庁）の廃止後つぶれ、明治四十五年になつて保健組合が組織されたとある。

先に引用した明治二十四年の新聞には、理髪床組合云々とあり、『函館の理髪界』ではこの時期組合はないと書かれていて矛盾するが、組合成立の事情は窺える。

女髪結組合の結成

蓬萊遊廓がさかんであつた明治二十年代に、女髪結が活躍していたことは上述したが、女髪結の組合はいつ頃作られたのか。

大正十三年六月十五日『函新』には「二銭の結賃で髪結さんが寄合を組織していたのは、明治二十四年頃からのことで、時勢に伴つて四銭、六銭、十二銭から十五銭と料金も上がつてきたが、今日の隆盛をみるようになったのは、現組合長の笹谷キワ子さんや物故した天金のお母さんが功勞ある……この人々の多年の苦心によつて現組合を創立され、道庁から認可を受けたのは大正元年のことと、組合認可と共に業界が著しく進歩した」とある。

明治二十四年の『函新』を繰つて調べてみたが、関連記事は見い出せず、大正元年については『函館大正史郷土新聞資料集』をみたが、組合認可の記事はなさそうである。この記事中、物故した天金のお母さんとは、当時二十五才で活躍していた佐々木ナミ子さんの母で、明治二十一年に活躍していた佐々木ナツとも関係ありそうである。（現「天金美容室」に問い合わせるとナミ子さん

の母はヨシと言ひ、その母がナツかもしれぬとの返事）
一方、昭和三十年七月一日付『道新』に「函館婦人美容師会は、明治三十八年函館婦人結髪組合の名で発足以来今年で五十周年を迎え……」とあつて、組合発足は明治三十八年とあるが、図書館には、明治四十年の大火でこの期の新聞は保存されていない。

いづれにせよ、明治二、三十年代に女髪結組合らしきものが成立していたものと思われる。但し、大正三年発行の『函館商工録』には函館の商工業者組合七十三の名称を列記しているが、理髪組合、女髪結組合共に記載なし。大正六年度『函館商工名録』には、七十八の実業組合が列記され、そこには、函館理髪保健組合―恵比須町、函館婦人理髪営業保健組合―蓬萊町と登場、が共に電話なく、組合員数も記載なし。但し、七十八組合中、婦人と名のついた又は婦人だけの職種は女髪結だけである。

組合活動の内容は後で述べるとして、女の職業における組合結成という点ではかなり早い例ではないか。村上信彦の『明治女性史(白)』には、女髪結の組合についての記述はないが、東京に産婆組合が誕生したのは明治二十一年で、翌二十二年東京府産婆総数は六百十五人とある。

髪結よりも古い女の職業である産婆の組合は、函館では

大正七年函館警察署内で行われた大会において成立(『函日』大正七年五月十一日付)、区内約八十名の産婆中五十名が参加して、毎月一回産科医の講習を受けること、年一回講習会開催の事など決議とある。東京より三十年も遅れて結成されているわけである。

髪結と税金

女髪結はいつから納税対象になったか、函館の場合、今のところ解からない。『日本結髪全史』には「女髪結師は、“おぐしあげ”などという看板をあげた位で、家内に梳子と言つて弟子を雇い入れ、自宅で客を迎え、或は諸家へもおもむいた。明治四十四年東京市の女髪結は三万人で、うち鑑札を受け正規の府市税を納めている者が二千九百四十余人で……」とあつて、明治末の東京の女髪結三万人中約一割の人が税金を払っていることになる。

函館の場合、理髪業者が明治期、納税していたことは資料からも明確である。

明治十二年の『函館支庁管内一覧表』には、地方税対象として二十二の科目があげられているが、その中に理髪業はない。しかし、『明治十五年函館県統計表』によ

ると地方税の税目二十五のうち理髮床税は、開拓使函館支庁収入として六十六円あまり、函館県収入として十円あまり、合計七十七円とある。この十五年、開拓使(庁)は廃止されたので翌明治十六年の『函館県函館区一覽概表』には、三十三種の免許営業人中理髮床六十五人とあつて、その年の地方税の一パーセントにも満たないけれど理髮床営業税は三十六円五十銭とある。

先に見たように明治二十年代の資料では、理髮床と女髮結を区別して使っていたが、明治十年代のこの時期、理髮床に女髮結が含まれていたかどうか。

明治四十年発行の『最新函館案内』には「明治四十年六月函館警察署に於て調査せる警察の取締に關する營業者数左の如し」としてあげている六十余种中に理髮業三百四十とあるが女髮結の記載はない。同書には、明治三十九年度所得納税者人名表があつて、先に引用した理髮職四名中の一名富岡町(現弥生町辺)の越村清勝の名が見える。女髮結らしい人の名は見当たらず女樓主らしい名はある。

『松前藩と松前』三号(一九七三年七月発行)によると、函館の場合、明治十年代から貸座敷税・芸娼妓税など遊廓からあがる税金が地方財政中かなりの位置を占め

ていたとあるが、明治期の女髮結が納税していたかどうか、以上みた限りでは、私の勉強不足も加わつて解からない。

後にお会いする若松タネさんは、大正十二年の震災後、函館の税務署からの督促に悩まされたとか、髮結の営業届けは、まず組合に出し、組合から警察署へ行つたとも話している。

組合の活動(大正期)

大正期の函館の婦人髮結組合の活動をみよう。

大正十三年には「市内の婦人結髮組合員は、營業主二百四十名、助手徒弟約百名で、婦人結髮業組合としては本道第一と称されている」(同年六月十五日付『函新』)とある。もつとも当時市人口も全道一であった。大正四年十月一日付同紙では二百三十二名と四十二名とあつて従業員は約倍増しているものの、他の新聞記事をみても、營業主即ち髮結のお師匠さんは、大正期を通じてほぼ同じ二百四十人位だったと考えられる。

この時期、全道一と称され、「女の組合としては最も堅い組合」(大正十一年五月十六日『函新』)と書かれ

た組合の活動を見ると、まず全営業者・従業員対象に健康診断を実施している。

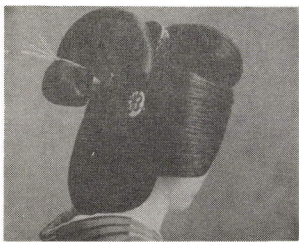
大正四年十月一日付『函新』に「肺結核、結核性諸病、伝染性皮膚病等の患者は一人もなく、唯トラホーム患者のみ……」とあつて警察署にて行ふと書かれている。

後に聞き取りをする平川ハルエさんは、年一回組合事務所に医者が来て、そこへ髪結が出掛けたと話している。

大正八年九月三日付『函日』と『函毎』には、函館婦人髪結組合は、物価昂騰を原因に髪結賃を、銀杏返し十二銭を十五銭、丸髻十五銭を二十銭に、島田二十銭を二十五銭に値上げしたいと警察署に願ひ出るとある。大正八年といえは、全国各地に米騒動が起こつた翌年で、『函新』によれば函館区内でも六月二十五日は小売米一升五十四銭、七月十四日は五十七・五銭、翌十五日には六十銭と米価の動きが解かる。大正期の女髪結は、一流になれば産婆に次ぐ高収入を得る職業であつたから、この値上げ申請は便乗値上げかもしれないと考えると、大正七年の記事に最高で百二、三十円の収入とあり、値上げ認可後の大正十一年の記事には三、四百円はあると書いてあるのも興味深い。

この大正十一年の五月、現在は国の重要文化財に指定

されている元町の旧函館区公会堂で、組合主催の結髪美装大会が開催された。盛況で集まつた美人一千名の見出しで、同月二十日付『函日』には理髪組合や東京の結髪連合会からの諸挨拶の後くり広げられた公開競技の模様を詳報している。来会者は花柳界の粹を姐さん達も交つた婦人連のみ、正面舞台上にズラリと並べられた鏡台の前で、美しいモデル嬢相手に、まず純白の前掛髪の結の徒弟達が好みの髪を結う。十六分で桃割れ、十九分で唐人髻、二十一分で丸髻といつた具合だが束髪の結び上げはない。丸髻・高島田の競技の後は、東京からやつて来た佐藤女史が江戸好みの文金高島田と緋ひまど鹿子かこをかけた結綿を披露して賞讃を博す。芸妓の余興の後は、市内一流の師匠株が中島田の競技。最後に婚礼衣裳の着付けが化粧から仕上げまで約四十分をかけて行われ、七人の花嫁御寮ができあがる。かくて午後一時より始まつて延々七時間余り、閉会は夜の八時半であつたと記されている。さぞ、ため息の出るような舞台だつたらう。



髪型“高島田”

昭和（戦前）期の組合

昭和に入っても、髮結の技術向上のための講習会は再三開かれたとか。但し和気あいあいの雰囲気にはほど遠く、おしゃべりもなくみんな黙々と技術を覚えたり盗んだり真剣だったとか。客足が遠のくのが心配で東京へは一度も行ったことがないとは大森遊廓の髮結平川ハルエ談である。

昭和に入ると新聞に関連記事が少なくなっているように思われるが、主人と助手合わせて約三百名余いた髮結が、昭和十年六月二十二日付『函新』には「結髮組合また騒ぎ出す」という見出しに続いて函館結髮組合員数百八十五名とある。昭和十年といえは函館市の約半分が焼失した大火の翌年であり、函館にも国防婦人会が発足し戦時色の出で来た頃でもある。これらと関係あるのか組合員数の減少が目立つ。不景気で廃業した髮結もいたと思われる。同十年函館市の調査（昭和十一年刊行『函館市職業別世帯分散状況調査書』）では、理髮師・髮結・美容師の総数が、使用人も含めて、三百三十人とあり、同十一年四月十八日付『函日』には、市内の理髮床は四百軒

もあるので、年期あけ職人が独立できずモグリをしているとあって、かなりの差異がでているがそれはさておき、結髮と美容師を区別していることが気にかかる。

日本の髪型は、大正になって洋髪が日本式髪型となって流行。昭和初年にはコテに代わりパーマネット・ウェーブ機が導入されて、昭和十年頃から各地の美容師はどことも大盛況となる。この状況が髮結と美容師という区別になって現われているのではないか。

しかし、日中戦争三年目の昭和十四年、国民精神総動員連盟委員会は「パーマネット・ウェーブその他浮華なる服装化粧の廃止」の規約でもってパーマを排撃する。

これに対し美容界は、パーマネット自粛型、国策型淑髮、興亜電髮、翼賛髪などと称して切り抜けようとした（『日本結髮全史』参照）。

実在の女髮結師をモデルにその一生を描いた小説『女のいくさ』の中で、主人公清は「なによ、日本髪は非常時の髪じゃないっていったのは、じきこの間じゃないか」と反発しながら「パーマネットは贅沢だ。なぜお前たちは外国人のマネばかりするのか」と叱られる場面があるが、函館の場合どうであったのか。

昭和十年、百八十五名だった組合員は、敗戦直後には

百三十名となつて更に組合員が減少している。

平川さんは「組合で街頭に立つて日本髪を結うのは止めましょう」と訴えたことを覚えていたが時期はわからない。昭和十五年の『函日』には、自発的に函館カフェー同業組合防護団結成、白割烹着に国防婦人会のたすきがけて警察署に六百人出席とか、女給矯風会の三百五十人、警察署にて防諜講演を聞くとかあつて、自分たちの営業をおびやかされながらも戦時体制に協力していく。

若松さんも「護国神社の石段、あれは以前はもつと幅狭かつたんですよ。市内の髪結さん百名か百五十名位の人達が集まつて勤勞奉仕で幅広くなつたんですよ。組合が呼びかけて組合員として参加しました」と話している。

以上、大正・昭和前期の婦人髪結組合について考えてきたが、ここに一つの疑問がある。従来、独自の組合であつた婦人髪結組合が戦争末期、理髪組合と一体化したのではないかということである。理由は、昭和三十年三月四日付『道新』の記事である。//合併進まぬ美容師組合一派手な正統派争い”という見出しで「美容師会は分裂騒動の代表とまで名をはせている。戦後、それまで、髪店と同一組合を編成、その婦人部だつたのが独立して全市の美容師を統合しての函館婦人美容師会（会員数百三

十名）となり、それが昭和二十三年、ついに分裂」とあるからである。いつ一体化したかは、少なくとも新聞記事からは解からないが、昭和十年には、函館結髪組合員百八十五名、組長川端ツイ、副組長辻イツと今野（昆野の間違いか）と記載されている（『函新』六月二十二日）ので、それ以降のことと思われる。

あとがき

先述した如く、大正期の函館の新聞には、再三、婦人髪結組合の活躍振りが報道されている。明治以前から官許公認遊女屋が存在していた函館であつてみれば、婦人髪結組合の成立も、かなりさか登ることができるのではないかと考えた。

現在の理美容組合に聞けばと思ひ「函館理容組合」に問い合わせると、「函館美容業協同組合」を紹介してくれた。問い合わせると、協同組合組織になつたのは一年程前のことで、過去、まして戦前のことなど解からないし

△『函日』	昭和9.8.18	付には	18日
函館婦人髪保健組合	結髪広告あり		
△『新函館』	昭和17.7.25	付には	5日
島田丸鬚洋髪	55銭、40銭、50銭	45銭、30銭、30銭	

書類もないとの事、但し、現“道南理美容学校”の理事長の田口光雄氏なら詳しいのではと、それから保健所が私たちを管轄していますと教えてくれた。

田口氏には、以前一度お会いし戦前の美容組合について伺っていたのだが、私側の不備もあり、あまりよく解からなかった。保健所にも念のため問い合わせたが、案の定、戦前のことは資料もないとのことだった。そんな事情で市立図書館郷土資料室だけが頼りだったが、力量不足としめ切り日に追い立てられて、十分に活用できなかったといきれないのが心残りである。それに、組合に焦点をしばって、戦前からの市内の美容師さんにより多く当たってみることに警察署に行くことが残っている。

注 1. 引用文中の傍点、、、は引用者がつける。

2. 『函新』『函日』『函毎』『道新』『新函館』は、それぞれ『函館新聞』『函館日々新聞』『新函館新聞』『北海道新聞』『新函館新聞』の略である。

3. 参考資料は文中で明記しているので省略する。

明治・大正の代表的髪型



1、文金島田



2、丸髷



3、银杏返し



4、結綿



5、桃割



6、束髪



7、夜会巻



8、耳かくし

(四) 明治・大正の代表的髪型

紺野洋子

日本髪

1. 文金島田

現在は婚礼用の髪型として限定されている。文金という名の起こりは、八代將軍吉宗が、小判の改鋳を行い、純度の低い小判が流通し物価が上がった。その頃根の高い島田が流行したので文金（元

2. 丸髷

文年間の小判）による価上がり、島田の根上がりをかけて文金島田とよばれた。既婚婦人が結った。手絡の色によって年令を区別した。

3. 銀杏返し

江戸時代中期からの代表的なもの。十五・十六才から七十才過ぎまで、階級も巾広いが、主に粋すじに結われた。

4. 結綿

下町で親しまれた髪型で、もとは鹿の子の部分に真綿を結んだので「結綿」と呼ばれた。

5. 桃割

若い娘達が結ったもの、この図は俗に関東風とよばれた。

束髪

明治十八年「婦人束髪会」が結成され、従来の日本髪に対して衛生的、経済的、機能的立場から普及した。日本髪を結うときと同じように前髪・びん・たば・髷に分けて結い上げるが、手法は簡単なものであった。二百三高地、揚巻等もある。

6. 束髪

明治四十五年頃の束髪、日本髪のように「富士額」を強調した髪型。

7. 夜会巻

明治中頃からはやった。日本髪と、欧風の折衷した髪型。花柳界、上流社会でも結われた。

洋髪

大正時代に入ると、従来の日本髪、束髪よりも活動的で、個性的な髪型としてでてきた。かもじを使わない七三、六四（女優髷）や、アイロンで、ウエーブをつけたもの、耳かくし、断髪等。

8. 耳かくし 大正十五年頃の髪型、アイロンでウエーブを出している。

参考資料 「日本髪結髪理論」「洋髪の歴史」

（参考図は前ページ参照）

(五) 大森遊廓の髪結として

平川ハルエさん

近藤 弘子



七十二才頃のハルエさん

平川ハルエさん、
明治三十二年四月三日、秋田県能代町現能代市)に生まれ、現在八十才。函館の大森町で髪結業を職として六十余年になる。大正末から昭和にかけて、巷では「廓のお師匠さん」と呼

ハルエさんの生家はそもそも廻船問屋であつたが木材も扱つていた。東北の山あいに開けた静かな町。大きな川にはいかだが列を作つて流れていた。使用人も二、三人はいて二つ年上の兄と裕福に育つたという。

数え十四の時、父が商談の最中に四十才で脳卒中で急死した。兄は商談相手でもあつた父の知人に連れられ台湾に渡る。木材の鑑定師になるために。体が弱かつた母は娘を連れ近隣の実家に身を寄せる。小さな料理屋であつた。娘に三味線を覚えさせて芸者にする気であつた。だが、ハルエさんは子供心にチャラチャラした雰囲気が嫌でたまらなかつたという。そのうち函館の大森遊廓で髪結をしていた叔母(亡父の妹)が「貸さないか」と言つてきた。回りの親戚連中に「イノシシのじよつぱり

ばれた。

イノシシのじよつぱり

あんたみたいなわがまま者三日もいれない」とからかわれ、「このままいたら芸者にされてしまう。函館に行つてなんたかつた、一人前になつてみせる」と氣負つたハルエさんは母を説き伏せ、孫ばあさん（亡父の母）に連れられ海を渡つてくる。ぎつちりと桃割れを結び、元禄袖の筒つぼに駒下駄はいて胸には膨れんばかりの風呂敷包みをかかえ。

大正二年九月、函館の大森遊廓では稻荷神社のお祭りの日であつた。むせるような人ごみ。銀杏返しの派手な着物姿の女達。飛び交う嬌声。十五の秋田おぼこには驚くことばかり。ふるさとの秋祭りは素朴であつた。別れの時、ただ泣いていた病む母に寄せる思ひは「イノシシのじよつぱりは、女髪結になつてみせる」このことひとつであつた。

弟子入り

明治末からの北洋漁業の発展は函館に好景氣をもたらし、明治三十九年の貸座敷数（遊女屋のこと）は九十軒。その頃蓬萊町、台町（現船見町）にあつた二遊廓は附近の民家から度々風紀上移転の要請があつたので、翌明治

四十年の大火をきっかけに人家の少なかつた大森町へ。移転終了の明治四十二年十月が大森遊廓の始まりである。ハルエさんが来函した大正二年には五十四軒、大正六年には八十四軒、娼妓五百九人と『函館区統計』、『花柳細見巴廻華』に記録されている。

叔母で師匠の渡辺イトはきれいな好きで厳しい人であつた。「女髪結と言えば世間から電報持ち（おしゃべりなこと）と思われているんだから、絶対余計なことは言うな。自分の体についた口だからしゃべれば手が遅れるし、それだけ技が身につかない」毎日、炉や、渡辺の紋のついた炉かぎは磨き粉で特に念入りに磨かせ、畳や板の間は勿論、家中の家具は撫で回すように手入れさせ「一反事、二けつ」と言つて、呼ばれたらすぐ腰を上げないと氣嫌が悪かつた。

ハルエさん達三人の弟子は朝は五時半から起きて、ご飯ごしらえ、掃除、洗濯を分担し七時半には弁当を詰めて師匠の主人をドック会社に、その養女を裁縫塾に出し、それからお師匠さんを起こす。そして手がすいた者からお得意さんである廓廻りをする。遊女を楼から出したがらないので、自宅には看板は上げず出髪（出向いて髪を

結うこと)一本槍であつた。

遊女達は夕方の六時からあくる日の午前二時まで店張りをする(客を引くこと)のが習わして、午前二時になるとお客のつかない遊女も「おひけ」と言つて部屋に下がつてもよいことになつていた。髪結が出向く午前八時頃には黒い板塀に囲われた廓中がしんと寝静まつていて、朝帰りの客と樓の台所に女中の姿が見えるだけ。

弟子達は筒つぼの着物に仕事着の白衣を着て、ブリキの髪結箱に梅の木の梳き櫛、解き櫛(師匠はつげの木の櫛)、癖もみに使う木綿手拭い等を入れて、馴染みの樓の裏口から「ごめん下さい」と声をかける。一等店(抱え娼妓が二十人以上)や二等店(十五、十九人)では、たいてい中庭に面した階段の下に三帖程の畳を、三等店(十、十四人)では廊下にうすべり(縁をつけたゴザ)を敷いてそこを髪結場にしていた。葉陰がちらつく低くてほの暗い格子窓に鏡をもたせ、樓の七輪に金だらいをかけ、ぐつぐつお湯を沸かすと下準備が完了。

弟子入りした最初の仕事を立てないように遊女達を起こしに行くことであつた。「○○姐さん、髪結いに来たよ。すぐきてね」一等店の遊女達は寝部屋と酒宴の部屋の二間つづきを当てがわれていて、戸をきつちり閉

めて寝ていると聞こえないので酒宴の部屋まで入つていく。中には目覚めの悪い姐さんもいて枕元で揺り動かすこともあつた。廊下に姐さん達の草履の他にスリッパがあると客が居る証拠なので、そういう時は廊下で呼びかけた。高い草履に赤いメリンスの長襦袢姿の姐さん達が乱れ髪を押さえ髪結箱を抱えて、寝ぼけ眼で大儀そうに髪結場にやつてくる。さあ、それからが仕事の本番。リレー式に一人の弟子がフケ取り、次の弟子が熱い手拭で癖もみをし、さらに次の弟子が前髪をとつてかた油でピンづけし、根かもじ入れて最後はお師匠さんが仕上げをする。銀杏返しと島田が多かつた。

公娼制であつた大森遊廓の遊女達は病氣(性病)持ちになつて駆梅院にでも入らない限り、景気の好し悪しにかかわらず、三日に一度必ず髪を結うのが決まりであつた。だから一軒の樓で五、六人、一日平均五楼程のノルマを果すのに時間に追われ、お昼ご飯抜きも度々で厠に行く暇も惜しんで遊女達の分は夕方の六時迄に結い上げる。それからお部屋さん(樓の女主人)、仲居さんのを結い終わり、金だらいついた油を新聞紙や抜け毛で拭き取り掃除が終わると八時。家に帰り、油でビタビタになつた白衣をカセイソーダで洗濯し、夕ご飯がすむと十時。

この頃には一日の疲れと眠けが襲い崩れるように蒲団に入る。

ハルエさんは寢床の中でその日の仕事を帳面につける。楼名と遊女名、銀杏返しはいの字、島田はしの字と書き、みそかには通い帳に拾い書きをして各楼に回す。この結い賃は遊女達の借金に加算されるしくみである。帳面をつけながらグラツと頭を落とす事は毎度で、気を取り直しては見て覚えるしかない髪のかい具合いについて考えているうちに寝入ってしまう。

師匠はじめ弟子達の髪は半月もほつたらかして、くまうってどうしようもなくなつてから火箸で梳くときれいになつた。風呂屋通いも十日に一度。生活は師匠に食事から、ちり紙まで面倒みて貰い、年に二枚のおしきせと、お小遣いは藪入り（一月二十日頃）に師匠から五十銭、姐さん達一同から少々。給金は一銭もなかつた。年に二回の休み（お盆と藪入り）に電気館に映画を見に行くのと、たまに姐さん達からお菓子や果物を貰うのが楽しみなだけの徒弟生活である。

母の死、そしてひとりだち

十七の時、母が子宮癌で亡くなる。知らせを聞いて駆け付けようとしたが、お師匠さんがいさめる。「おまえ、十七にもなつて親の葬式を出せと言われたらどうする。生きてある時さえ会わないでいたんだから諦めな。もし

親戚の者に葬式代がわりに売られたらどうする」台湾に渡つた兄の消息は絶えていた。ハルエさんは涙をのんで諦めたという。私は首をかしげて聞いた。「葬式代ぐらいで親戚の者が売るでしようか」ハルエさんは話し出す。「いえ、いえ、あんたさん。わたしらが子供の頃自分の娘でさえ売る親がよくあつたんです。母は永患いで迷惑をかけたでしようし。親のない娘は売られるのが嫌なら芸者か女髪結になるしかなかつたもんです。あの頃、女髪結はたいてい貧乏人が体に欠陥があるか。現に叔母もやぶ睨みだつたんですよ……海を渡るにも奉公の身で自由になる金は一銭もなくて、毎日函館山の方を見ては泣きあかしたもんです」

その後ちょっとしたきつかけで、十六の頃死期近い母から一度帰るようにと便りがきたのをお師匠さんが一存で握り潰していたことがわかつた。師匠とはいえ、これが叔母のすることであろうか。悲しかった。生前の母がくどく念を押し「親子は一世、夫婦は二世、主従は三

世といつて叔母さんには恩ができるんだから何よりも大切に」の戒めを一番の寄りどころにしていた自分自身をも、怨めしかった。なにもかもくやしかった。早く一人前になつて自分のお金が、身に付くお金が欲しいと心底思つた。いきおい仕事に熱が入り、腕もぐんぐん上がつていく。

十八の時、お師匠さんが夫と別れ貸座敷業に商売替えをする。七、八人の遊女付きの高砂楼を居抜きで買ったのである。叔母は高砂楼の横の方にハルエさんのため六帖の寝泊まり兼髪結場を作つてくれた。他の弟子達は大森遊廓を出ていった。「ハルエでよかつたら結わせてくれる所がないかと叔母が聞いてくれて。それからがひとり勝負だつたの。毎日二十人分も結つて。苦労したんですよ。寝る間もなかつたね。年期は大抵七年、一年助け奉公で結局八年ついで一人前になるんですよ。それなのに私は三年とちよつとだから。中には、はやりつ娘むすめに髪にうるさい姐さんがいたもんです。引きずるような長い髪かみの姐さんもいて。重いもんですよ。フケ取りから仕上げまで全部一人でやつたんです。若いのに頑張る屋だからと同情されて。それであんたさん、十八から二十まで助け奉公として働いたお金は全部叔母に上げたもんです。

叔母は遊女屋になつてからは左団扇。あの頃銀杏返しが二十五銭、島田が五十銭。姐さん達は銀杏返しが多かつたね。それに比べ、廓のお決まりが二等店で二円五十銭、三等店で一円五十銭ですもの。腕のいい姐さんの手にかかるかかると男という者はなんぼでもお金をはたくもんです。体は楽で儲けは何倍にもなつて。叔母は昭和七年に廃業するまでに当時のお金で二十万もためたんですよ」ハルエさんは一人で廻つた楼名を指を折つて数えていく。伊勢楼、北越、呑気、盛喜、高砂、角進、いづみ、あづま、南部、文明……。

二十はたちの六月に叔母から今月働いたお金は全部上げるから、それでひとり立ちするようにと申し渡された。以前の顧客であつた新川町のお琴の師匠、Kさんに勧められるまま、そこに下宿住いを決めた。六月分の働いたお金を集めたら十二円であつた。新しい蒲団を作り、師匠の元を離れ、移り住んだ大正七年七月四日をハルエさんは「私が独立した日」と記念している。

函館日々新聞によると大正七年の貸座敷数九十九軒。娼妓五百五十九人。遊客十五万五千三百十三人。揚代四十一万二円七十七銭。この内外国人は十五人で七十六円八十

五錢。(當時の函館の人口は十万弱)

當時の大森遊廓の遊女専門の女髪結は遊廓内には、辻、木村、鈴木、平川。外からの通いとして、あねや、福岡とハルエさんは記憶している。

男 嫌 い

夏にひとりだちして秋には最初の弟子をとっている。

十四才の子であった。弟子にはねえさんと呼ばせた。「弟子を持った気分？どうでもないね。毎日約束通り結うのに目がまわるようだったもの。信用が第一だから。その子が肋膜やられて田舎に戻る時、その子も泣く、私も泣く、姉妹みたいでしたよ。その頃ですよ。警察に呼び出されて『なんだおまえ、まだ子供でないか。髪、結えるのか』『はい』と返事したら『一生懸命やれよ』って励まされて。身元調べでしたよ。弟子が何人いるとか。いつまでも子供くさかったんだね。実際子供だったんですよ。三十位になつて人並みにお師匠さんと呼ばれるようになったても、子供っぽい変りびとと言われていたの」

私は聞いてみる。廓にはめくるめくような人生があつたのではないでしょう。この国の公娼制という名の許

に、人身売買の犠牲者であった、貧しい出の女達の性に群がった男達。そこを根城に暮す楼主や牛太郎や、遣り手婆さん。嘲笑と怒声と哀しみの交錯する生臭い大人の世界。動くばかりだったとはいえ、数え十五からそうした日常を見聞きして子供、でいられたでしょうか。そして変りびとと呼ばれたのはどうしてでしょうか。「あんたさん、聞いて下さい。最初何だろうなあ、姐さん達きれいにして男の人がきて。それがだんだんわかってきて、泊まっていくんだなあ、不潔だ、男の人って、いやらしいなあと思つて。いやだ！きたない！番頭なんか、こつたら者みんな道楽者がつているんだと思つて、口もききたくない！つていう感じ。仕事終わつて夜帰ろうとするでしょう。よく番頭が客引きのため出ているのにつかるとですよ。『ただいま、お帰りですか』と調子がよくて。雨降つている時なんか傘の中に入つてきて二軒も三軒先もついてくるんだから。急ぎもしなければ口ひとつ聞かないで黙っているの。『負けたぜ』つて帰つて行く。男嫌いだとか変りびととか評判がたつちやつて。弟子二人とKさんの所にいた時分にね、今の大門(現松風町)なんか、まっ暗でさみしかつた。一人で近道を行こうとしたら、後から首にぐつと男の腕が回つてきて『一緒に

行こう、行こう』と言われて。私は若い時分はきかなかつたからね。男みたいな言葉遣いだつたから。ああいう時は度胸がぐつと坐るねえ『何しやがるんだい。離しやがれ！馬鹿野郎！見損うな。俺を誰だつて思っているんだ』男はしようもないというふうに諦めてくれた。でも、私も女だねえ、すぐ走れなくて、それに敵に弱々しいところを見せたくないと思つて。家が近づいたら足が下駄ごとガクガクしてしまつて。雨がシヨボシヨボ降つていて男の顔もよくわからなかつた』

八十才のハルエさんの声に意外な力がこもる。男への罵声は男の声そのものに近い。かたぎの異性に接することもなく早くから大人の男のいやらしさだけを見てしまひ、そこから抜け出す事のできなかつた若い潔癖さへの郷愁が今でも子供、子供と語らせているのでしよう。一面、子供のなりをして男嫌いでおし通した事は手に職をつけたとはいへ、親のない娘が廓という特殊な世界で身を処していく知恵ではなかつたでしようか。廓から離れようと思つたことは一度もなかつたという。あくまで傍観者でしかなかつたハルエさんと籠の鳥の実践者でありつづけた遊女達との越えがたい溝。しかし遊女達がいてこそ二十そこそこで弟子もいた「廓のお師匠さん」は、

今こそ己れの辛苦を通して彼女達を理解しているにちがいない。身を沈めざるを得なかつたのではないでしようか。好きでなる人がいるでしようか。と問うと「あんたさん、家のためとは言つてもあんな商売は自分が好きでなきや、やらないもんですよ。本当に嫌いなら車引つばつても草鞋はいても生きていくつていう商売、なんぼでもありますよ。親のため身を落した人は私が見た限りでは十人いれば一人位。同じ年位の娘が『親に売られた』と言うから『あんたがた、そういうけど本当にこの商売が嫌なら親から逃げたつてよかつたんじゃないの』七つや八つの子供じゃあるまいし、公娼は十八からだからね。『騙された』つて言うの。私が『そんな事ないよ。このお商売が好きなんですよ』と言うと笑つているよ。中にはいやだ！つて泣いている娘もいたけど、ほとんどの男持つたり男に売られたり道楽者だね。転々として四十位の女もいたよ。私よくね『あんた達、奥さんいて子供いる人騙しなさんなよ』と言つたもんです『いやあ、騙してくれて来るんだから、しかたがないでしよう』年いつてせかせか働かなくてもよくなつてからは、たまにはそんな話もしたもんです。カムチャツカに嫁ぎに行つてきた男なんかさんざん金取られて。腕のいい姐さんに

あたつてスツカラカンになつて、番頭に借金替りに土方どに売られた若い男もいたもんだ」

シミの少ない今でも色白の美肌で、娘の頃には桃割れがよく似合つたにちがいない、ハルエさんの小さく坐つている姿を私はじつと見ていた。

兄のこゝと

兄がふらりと函館にやつて来た。大正九年頃であろう。木材の鑑定師にもなれず、来函してからも奉公してみたがどこも永續しなかつた。

大正十一年にハルエさんは兄に代わつて亡母の七回忌を果たそうと思ひ、故郷に十年振りに帰つてゐる。二十四、五才の頃である。すでに三人も弟子がいて錦を飾るような氣持であつたという。親戚の者に「あんたの母さんは木の葉の落ちるのを聞いても、ハルエが帰つてきたのかと待つていた。あんた、仏様の前さ、寝なさい。顔撫でて貰いなさい」と言われ鳴咽した。娘を恨んで死んだであらうと切なかつた。兄も、もうすぐ父親になるといふ。帰函してから「こらえ性のない兄」のため、高砂町のマーケットの近くに小さな宿屋を買つてあげた。「兄が

駄目だつた。飲む、打つ、買うの三道楽。小さい時わがまま手いっぱい育てられて。心からさし締りがなかつたんですよ。Kさんが入院して留守の時、仕事終わつて弟子達と帰つて来ると部屋がまつ暗、見たらカラカミ、畳もはがして自分の宿屋に運んでいた。それで平氣な兄だつたんですよ。私は立場なくして弟子連れて宿屋の方に移つたの。監督がたら。兄は飲むと虎つこで、飲まない時は今度こそお前達を養つてあげると言うから、私も勝氣で、働けるうちは養つてなんか貰わないよつて。弟子の分も下宿代として払つて。それで湯の川で芸者あげたりして、宿屋も失敗しちゃつて借金取りばかり。見切りつけて弟子三人と遊廓の方に移つたんですよ」

大正末には北洋出漁のカニ工船の増加がみられ、街は大いに賑わつていた。景氣がよくなると島田を結うのが多くなる。銀杏返しの倍の値段だが見栄えがするから樓主が好むのである。結い賃も遊女の借金のうちなのに、はやらない遊女が島田を結いたがると樓主が洗る。この頃には一日平均四十人分も結つていながら遊廓はいつたいに払いが悪く、みそかにはその半分も集金できなかつた。いちいち氣にしていたら遊廓の髮結は勤まらない風習が昔からあつたという。

お得意さんの寒月楼が結い賃を八十円も滞り、催促したらその代りに遊廓内にある借家をくれた。兄の借金取りから逃れるためそこに移ったのである。しかしすぐ見つけられ、兄、兄嫁、赤ん坊、嫁の父まで同居するはめになった。ハルエさんはがむしやりに働いた。遊女達の慰安会がある時は楼に弟子ごと泊めてもらい、「おひけ」の午前二時を待つて午前十時頃まで四十人位もこなすのである。銀杏返し十五分、島田二十分のスピードである。入つてまもない遊女には唐人まげ、結^ゆ締^めをした。この頃には師匠としての腕も冴え、結い上がりの流れるような粋な美しさは定評があつた。

大正末から昭和にかけ一カ月二百円以上も働いたが、毎月八十円ずつ兄の借金を返していたという。白米一升四十四銭、とうふ一丁六銭、清酒一升七十銭の頃である。

縁 談

もうすぐ三十路という昭和二、三年の頃、Kさんが縁談を持つてきた。相手は妻が病死した子無しの四十近い人。カムチャツカに漁場をもつていて羽振りが良さそうだった。「結婚しても兄がむつたりお金をせびりに来た

ら、カムダがうまくいかないと思つて気が進まなかつた。でも、兄も口ではすすめてくれて。見合いの席には銀杏返しを結つて、べつ甲の櫛さして。結納が決まつてから、結婚したら髪結はやめてもらいたいと切り出されたの。私は弟子を一人前にしないうちは責任ありますから、それが嫌ならやめますつて、言つてしまつて。その日は寝ないで考えた。私一人やめれば、ここで五人の間（兄、兄嫁、弟子達）を救えるんだから、私は行かない。やめた！ 仲人さんは日魯のお偉いさんだったの。後で『おハルさん、あんたなんぼ偉いかしれないけど女の方から破談にするなんて、日本始まつて以来だよ』後々までつけが回つてKさんの法事の席なんかでも『髪結して、どんな偉い旦那持つ気？』必ず嫌味言われたもんです」この見合い騒動からまもなく、兄嫁が男の子を産んで十カ月で夫に見切りをつけ、子供達を置いて家を出ている。それからずつと、ハルエさんは兄の二人の子を母親代りになつて育ててきたのである。ばあやを頼んだこともあつた。さいわい、子供好きを弟子がいて育児専門に面倒みてくれた。

師匠としては叔母のように日用雑事には喧しくなかつたが、「身持ち」については厳しかった。「平川にいる

時は身を固くきちんとして貰いたいと思つて。弟子達には男のおの字も言つてはいけない！つて言つたもんだもの。髪結に関係ないもの。客が遊女相手でしょう。だから多く使つた弟子の中には姐さん達がお客を送るのをバフラツと口開いて見ている姐もいるの。『あんた達、何見ているの、姐さん達は商売でやつているんだよ。あんた達は髪結が商売』だからみんな弟子達は固くて恋愛結婚したのは一人もいないね。十年いた娘が三人、十四年いたのが二人。永くいた娘には店を買つてやつて結婚の時は婚禮の仕度もしてやつたの。そういう弟子が下の弟子に『お師匠さんは一生懸命勤めると、やつただけの事はある人だから』と言つてくれて。実際、今と違つて昔の弟子はよくやつてくれたもんです」

昭和六年の満州事変の前後から廓の内外にカフェが立ち並び、女給の間から洋髪（耳かくし等）がはやり出し町の一般女性にも影響を与えた。非常時には日本髪は手数がかかるといふ国策も背後にあつたのである。しかし廓ではまだまだ日本髪全盛であつたが、楼主が二人寄ると暇だね、と愚痴が出た頃でもある。昭和六年五月七日の函館日々新聞には次のように書かれている。

「蓬街にも一大改革の声。カッフェの進出のため、貸

座数もカッフェ化し、道庁も思い切つて認可し、夜明楼、小金楼、米大黒では改造し、コーヒー一杯・ソーダ水一杯で、積る話の三分の一は出来る」

函館大火、公娼制廃止

遊女達の逃亡を恐れて、楼主が数珠繋ぎにしたという噂が飛んだ昭和九年三月二十一日の函館大火。大森遊廓は全焼してしまつた。同年四月九日の函館日々新聞に復興は遊廓から。大門の旧営業者四十九軒、娼妓二百二十名、バラックを許可された三十軒は一両日中に建築にかかる」とあるように廃業者が続出している。しかしハルエさんは家は焼けたがみんな元気で、二、三年位食べるだけのお金はあるんだからと落ち着いていた。バラック建てであつたが大火後初めて八帖程の「平川美容室」の看板をあげた。通い帳を大火で焼失してしまい、各楼には以前の借金はご破算にするからと約束して、以後は現金払いにしてもらつた。だが、いつの間にか払いが悪くなつていつたという。

大火後は附近にカフェが多くなつたので時流に遅れてはいけないと思ひ、札幌にパーマの試験を受けに行き、

弟子達にも講習会に出席させ機械を一台入れた。日本髪は油っぽくても手肌が荒れないのに、パーマでは薬品負けてガサガサになった。そのうち遊女達の中にもパーマとまでいなくても洋髪（耳かくし等）をしたいという声が出てきた。日本髪は崩れたら自分で結えないというのが大方の考えであった。遊女の好みで洋髪を結うと「髪結さん、その髪、結わないで下さい。店がひき立たないから。見馴れないからね」と楼主からたしなめられた。ハルエさんは相変らず日本髪専門で、弟子達が平川美容室で洋髪やパーマをした。カフェの女給、料理屋の女中、仲居さん等が常連になっていった。「昔は人の客、取るようなことはなかったもんです。だつて自分の腕次第で来るもんでしょう。楼の方からお呼びがかかったらお得意さんができるわけ。若い時は東京へ勉強に行きたくても行けなかつたもんですよ。行けばお客を落としてしまふ、そう思つてね。かたぎの人結う暇なかつたね」

大火後縮少したとはいえ、大森遊廓の八十パーセントを平川美容室が手がけている。石川楼、山田、三浦屋、静岡、福井、銀月、三輪、一寸亭、さんご、たまき、正月、近江、武蔵、寒月、改新、丸高……

四人も弟子がいて繁昌した。この頃には組合の役員も

していて、夜には商工会議所に簿記を習いに行き、税金の書類作りもひとりやつてゐる。三十代半ばで女の働き盛りでもあつた。「なんぼ働いてもお金がたまらない。兄につきこんで。『金くれれ』と来れば、やらないと何倍にもして返されるから、しかたがなくてやつたもの。飲み屋も買つてやつたのに失敗して。兄は金食い虫つ子で平気な顔して『親なき後は、兄親だから孝行しれ!』

つて言うの。道楽亭主がいたようなものさ。私はきかなかつたから自分の難儀なことは涙出さなかつたね。兄につきこむ分、子供二人置いて貰つたと思つて。子供二人は親孝行なの。息子が十八の頃に『おばちゃんはいいい人だけど悪い人だ、あんまり面倒見すぎて父さんをナマコにしてしまつた』つて言われたこともありすよ。うちの子達も、親の本当の愛情なくて暮したんだろうね。私がいくらかわいがつても、本当の親でないもの。どつた欠けるところがあるんだろうなあと思つて。私は嘘するのと嫌いだから、小さい時から母さんと言わせないで、おばちゃんと言させたの。死ぬまでおばちゃんだね」

太平洋戦争中にも貸座敷の廃業者は出たが、公娼制の遊女達は徴用されることもなく、一緒にパケツリレーや竹槍訓練をした。ハルエさんの弟子達も他の若い一般女

性的ように工場等に徴用されず、平川美容室は暇であつてもどうかか食べていけるだけの働きはあつたという。この頃にはバーマ禁止、日本髪自肅の国策に従い、遊女達の中には簡単な洋髪をする姐さんもでている。

敗戦すぐの昭和二十年九月に軍艦二隻が函館へ入港、十月にはニューヨークの兵隊六千人が上陸している。戦争中、閑古鳥が鳴いていた大森遊廓は再び活気づいた。米兵の治安という大義名分に、各楼はにわか作りの派手な横文字看板を上げた。寒月楼はワールド・ムーン、銀月楼はシルバー・ムーンといった具合に。花魁を写真で知っていた米兵のため、以前より短い毛で再び遊女達は島田や銀杏返しを結い出した。平川美容室も大わらわであつた。当時の市長であつた登坂良作は『終戦前後』で次のように書いている。「婦人のことと言うと、ある時、売春婦のことで呼ばれました。一晩に八人のケガ人が出たと言うのです。……ケガと言うのは性病の伝染のことなんです。アメリカ軍では、兵隊がケガをすること、一々上司に報告しなければならず、それが師団の名譽に響くというので、本気になってとつちめられました。そして、売春婦を即時市外に追放しろという。私は『市長に売春婦を追放する権限はありません。同じ函館市民を

売春婦だからといって追放することは出来ません。……』ますます怒つて『売春婦に米の配給を停止せよ』と言うから『それは人道問題で私には出来ない。……』すつたもんだの挙句、仕方がないから息抜きの場所を、将校用と下士官以下のところをつくつたわけです。それがあつたために一般の市民に、あまり被害がなかつたとも言えますね」

翌二十一年一月二十四日、マッカーサー司令部の許に公娼廃止令がでている。同年同月二十六日の函館日々新聞は、次のように報道している。

「聯合軍総司令部民間情報教育部二十四日発表によれば、総司令部は二十四日、日本の古い歴史をもつた公娼制度の廃止を命令した。即ち、日本政府に手交された指令により、直接、間接に日本の公娼制度存続の権利を認め許可を与えるすべての法律規則その他の法令は、すべて無効とすることが命ぜられたのである。総司令部公共衛生福祉部長サムス大佐は公娼制度の害悪に関し、次の通り言明した。

この制度の最大弊害は日本国全体を通じて年々多数の婦女子を公然と経営され、法律の保護を受けた娼婦に押し込む習慣が存在し得たというのである。数世紀にわた

り多くの場合、まだ未成年の日本少女達は文字通り自分の意志に反しこれらの娼家に追ひ込まれ、その両親が五百円から一万円にも及ぶ前借りを手中に収めていた。これらの娼家の制度は少女達が容易に前借りを返還することが出来ず、この社会から足を洗ふことが事実上殆ど不可能なやうにされていた。……」

最盛期の「大正六、七年頃には、吉原」を凌ぐとまで言われた大森遊廓は公娼制廃止令が出た時、僅か貸座敷十五軒、娼妓六十五名であった。ハルエさんに言わせると、困つたなあと思つていたら、ある日からピタツと遊女達がいなくなつたという。その後、街で馴染みの姐さんに出会つても互いに無言であつた。この世界のしきたりであるという。来函した大正二年から昭和二十一年までの約三十三年間で、自力で足を洗つていった遊女は二人、身請けされた遊女は三人位と、ハルエさんは覚えてゐる。廃止後収入はガクツと減つたが、しだいに平川美容室には場所柄、水商売の女性客が多くなり、ハルエさんの日本髪の噂を聞いて年の瀬には角巻をした町の娘達の順番を待つ姿が見られたという。

昭和三十年に兄が亡くなる。好きな競輪の帰りにお酒を飲んで、ドブにはまつての窒息死であつた。「十一月

九日で、外に溜まっていた水がしぼれていた。死んだつてかわいそうだななんて思わなかつた。定職もなく、三十五年も私が面倒みたんだもの。あんまり心配事がなくなつて頭がヘンになつた気がしたもの。それまで精神にやすまりがなかつたの。兄が死んでから、初めて暮しに余裕ができたんですよ」

数え七十六の時、足の先からしだいに腐つてきた「脱疽^そ・レーノー病」という病気になるまで働きつづけてきたハルエさんに、かつての弟子達が集まつて喜寿のお祝をしてくれた。片足を足首から切断している。もう片方の足も痛んできている。民間療法として時々、患部に蛭を吸わせている。這つてでも自分の洗濯は必ずするといふ。目下の夢は嫁が病氣勝ちで休業中の平川美容室を、孫が継いでくれることである。この冬は「かつら作り」をしてみようと思つてゐるらしい。「坐つていても手は動きまますからね」そのまるまつた小さな手は私にとつてピンつけ油やコールド液にまみれ、激しい働きをくぐり抜けてきた野太い二つの生きもののように思われた。

(六) 洋髪・パーマネントの先駆者

田口フクさん

紺野洋子



田口フクさん

嘉永六年ベリール航
 航によつて、江戸三
 百年の久しい平和は
 破られ、安政五年、
 欧米各国との通商貿
 易が締結された。

函館、新潟、神奈
 川、兵庫、長崎が開
 港され外人居留地が
 出来ると、欧米の文
 物、風俗が輸入された。
 髪型も又その影響を受けた。

明治十六年、鹿鳴館時代を迎え、洋装になると同時に「婦人束髪会」が結成された。束髪の女性達はいきいき

と活動的になつたという。やがて明治三十七年、日露戦争には「二百三高地」と呼ばれる束髪がはやり、これを境として洋髪はますます普及した。大正に入ると、第一次世界大戦後、日本は好景気となり、新しい職業婦人が台頭した。女性の洋装が増え、更に大正十年頃のアイロンの輸入、昭和初期のパーマネント機械の輸入と合わせ、日本式束髪から、個性的な新しい洋髪へと発展していつた。

だが一方日本髪も残っており、大正十二年、今和次郎氏『考現学』によれば次の様な状況であつた。

東京	洋髪	四二%	束髪	二七%	日本髪	三一%
大阪	洋髪	三四%	束髪	二二%	日本髪	四四%

昭和にはいると、昭和十年頃のパーマネント機械の輸入により、髪型の一大改革を予想させたが、昭和六年満州事変に始まり、昭和十六年の太平洋戦争と、世の中は安定せず、明治、大正期に見られるような革新的変化はもたらされなかった。やがて昭和二十年の終戦、アメリカ軍の進駐と共に、今迄押えられていたものが一挙に花開く感じで女性の髪型は服装と共に目まぐるしく移り変わっていった。だが世相が落着くにつれ、洋風一辺倒の中にも、一方では古き良きものも、見直されるようになり純日本的なものも復活した。

田口フクは、明治に函館に生まれ、横浜で修業し、大正末期から昭和にかけて、洋髪・パーマを函館に最初に広め、又戦後は、復古調ブームの中で日本的なものに惹かれ、従来の古いものの中に、新しい型を造り出していた人である。

大正十年、十九才の時単身横浜に修業に出た一人の娘がやがて函館の洋髪・パーマの先駆者となり、七十才代にして、全国婚礼美容家協会理事及び審査委員として、函館の婚礼美容の技術を全国的な水準に引き上げ、なお現在も、北海道代表委員として独創的な創作に打ち込んでいる田口フクに、私は畏敬の念を感じた。同時にこの

道六十年の彼女の足跡を、未熟な筆で表わす事の困難さを、思い知った。言いわけめくが、私は田口フクを取りまくそれぞれの立場の人達の話を書く事によって彼女の生きざまを、より正確に、そして鮮明に浮かび上がらせたいと願った。

フクの夫の田口光雄、フクの長男の嫁、田口前子、甥の田口芳邦、そして長い間弟子として生活を共にした高木重子、最後に、美容商事会社の社長として、函館美容界の内情にも詳しい赤坂謙二、以上の五人に田口フクについて語ってもらった。

田口フクのこと

私は、明治三十六年函館に生まれ、事情あつて母と別れた父と二人暮しでした。父は、宮大工で、私は旭町の床屋に少しいたあと、大正十年夏、十九才の時横浜元町の小原マサの店に見習いに入りました。

小原マサは、その頃函館の銀座通りで繁盛していた床屋「銀座・田口」の長女でした。マサの店は、外人専門で、理髪、洋髪の両方を行っており、横浜でも高級な店で知られ、日本人はめつたに来ませんでした。私は、自

分の髪ぐらいは結えましたが、洋髪は、見るのも始めてなので、外国からの雑誌とか新聞の写真を見ては、ウエーブの出しかたを研究しました。その頃輸入されたアイロンを使って結うのですが、外国人の髪はやわらかくて扱いにくかったものです。

大正十二年の大震災の後始末を手伝い、小原マサにも勧められ、その頃函館から勉強の為、姉マサの所に来ていた田口光雄と結婚し、大正十三年、函館に帰りました。

函館では、義父が大勢の弟子を使って床屋を開業していたので、私達はその店に同居し、私は義父が早速設けた婦人部で、洋髪専門の仕事を、六年間やりました。市内には、束髪を結う店が一軒ありましたが、アイロンを使って、ウエーブを出す店はまだなかったもので、大繁盛でした。基坂の上にあった英国領事館に向いて、夫人の髪を結った事もあります。夫人は、白系ロシア人で肌のきれいな人でした。函館の街はまだ殆どの人が着物姿で、洋装は、金持の奥様やお嬢さん、それに女給さんくらいでした。

洋髪の型は、七三、オールバック、耳かくしなどで、値段はたしか五十銭でした。床屋の一流が五十銭（市内では二軒位）丸髷が三十銭、島田が五十銭でした。私は

洋髪のウエーブがみだれないように、ネットをかぶせましたが、このネットは横浜で任入れてましたが、まだめずらしい物だったので二十銭もしました。芸者さんが、いつも日本髪ばかりで、正月休みなどに洋髪を結うのが楽しみだと来てくれました。店がはやるのは嬉しいのですがまだ洋髪の見習いはいなかったので、朝六時頃から夜仕事がすむのが十二時と、私一人で、昼御飯も晩御飯も食べられない事がしょつ中ありました。身体具合がわるくても病院へ等行かせてもらえませんでした。

洋髪は、マーセル・アイロンを都市ガスで熱して、ウエーブをつけていくのですが、出来上がるのに一時間半位かかりました。お客様の中には、「あまりハイカラ過ぎるから、取って下さい」と云って折角のウエーブを取った事もあります。でも函館は、お金持が多かったせいかわいカラ好みの女性が多く、店は毎日お客様で一杯でした。

そんな中で大正十五年、長女栄子が産まれました。産まれるその日まで働き、産後二十一日で店に出ました。お客様からの電話催促がきて休んでいられなかったのです。店が忙しくお乳を飲ませる暇もないうち、母乳は上がってしまい出なくなりました。手のすいている人が練

乳を飲ませるようになり、義父は「子供がいては仕事が出来ない」といつて満一才の栄子を横浜の小原マサにあずけました。満四才の時引取りましたが、私になつかずついイライラして叱ってしまうので、尚更なつかず、後々まで本当に困りました。主人はその頃、病気が直つて又大学に戻っていましたので、心細い毎日でした。

昭和五年、末広町にあつた㊦デパートで、初めて美容部を設ける事になり、「銀座・田口」とは近かつたので両方行つたり来たり掛け持ちでしたがその頃は弟子もいたのでだいぶ楽になりました。昭和九年、函館大火で㊦が焼け、向かい側の南部坂の下の方に「マーセル美容院」を開業しました。弟子も六人抱え、商売は順調でした。

昭和十一年、義父七蔵は、横浜に行つた時、外人に勧められ、アメリカ製の「シエルトン」というパーマの機械を買つて来ました。舶来を好む義父は、「北海道で初めて機械だ」と自慢していました。翌十二年、国産第一号のパーマの機械を購入し、店内に両方置きましたがアメリカ製の方は、下がつている電線が十二本で、国産品は二十四本でしたから、国産品の方が使い良かったわけです。パーマネント・ウェーブは出来上がるのに三時間ぐらいかかりました。値段は、初め八円から十円ぐらい

でしたがアイロンのウェーブと違つて、取れにくいので、かける人が増えて行きました。若い人は前だけかけたりもしました。昭和十五年十一月、パーマネント協会が出来会長になりました。

昭和十六年、太平洋戦争が始まり、パーマネントは、敵国のものと排斥されるようになり、美容組合では「整髪運動」に乗り出しました。五、六人が一組になり、モンベ姿に、白いかつぼう着、上から「整髪運動」のたすきを掛け、駅前とか大門の繁華街に立ち、道行く人の整髪をしました。パーマ頭の絵には×印、きちんと結つた頭の絵には○印のポスターを作り、バサバサのパーマ頭を櫛でとかし、ワンロールに巻いて結つてあげました。街頭なので、恥ずかしがつて逃げる人もいました。そんな時勢でも、一方女性達のお洒落の気持は押え難く、電気が使えなかつたので、炭火で、夜中にこつそりパーマをかけたりしました。炭火パーマは、加熱パーマといわれましたが、後から「ゾートス」という、発熱薬品が出て炭火に代わりました。

昭和二十年三月、敗戦の色濃い春、建物疎開が始まり私の店も、引越させられました。昭和二十一年、二男晴彦を出産しました。その頃、電気のメーターが配給制に

なり、割当てられた量しか電気が使えなかつたので、古くからのお得意様だけしかしてなかつたので、結婚以来初めて、お産後、ゆつくり養生出来ました。

昭和二十一年九月、進駐軍からの依頼で、米軍将校夫人の美容を受け持つ事になり、「銀座・田口」の並びに開業しました。店内は、日本人と、将校夫人専用の部屋と、別々に仕切り、将校夫人のは髪だけでなく、マツサージ、マニキュア等もしました。私は横浜時代に、これらをマスターしていましたし、片言の英語でもどうやら話を通じました。翌年の夏、函館放送局から肌の手入れについての美容放送をしました。世の中も次第に落着いて来て、洋髪は、すっかり日本のものになり切つていました。二十五年には、野又学園（現有斗高校）の各種学校に、美容科があり講師を頼まれました。ここは夜間部もありました。これが後に道南高等理容美容学校になり引続き講師になりました。三十三年に東京歌舞伎座で「ユーヘアモード」の発表会があり、NHKテレビで全国に放映され、局長賞をいただきました。

昭和二十五年から**ニ**森屋デパートに美容室を開き、ここは、昭和三十六年、長男夫婦にゆづり渡す迄、高砂町の店と掛け持ちで経営していました。

終戦後和服の花嫁が復活し、私はその頃から日本髪に興味を持つようになり、かつら作り、着付等の研究を始めました。二男の靖彦が、かつら作りをするようになり「全国かつら十日会講師」の資格を取りました。長男は全道の美容講師として忙しく、主人は、道南理美容学校の理事長で二十五周年行事を目前に控え多忙な毎日です。私は五十一年から全国婚礼美容家協会理事と審査委員になっていきますので、その職務を通じ、後輩の指導に生涯当たって行きたいと考えております。

田 口 光 雄（フクの夫）

私の父、七歳は明治三年、秋田の米屋に生まれました。家業が倒産し、明治二十九年頃、函館に渡つて来ました。たまたま床屋の二階に下宿したことから、手伝い半分にしながら、生まれつき器用な性質で自分で店を持つようになりました。先見の明があつたのか、とにかく新しい物ずきで、店もモダンな三階建、使う道具類も、すべて新式のもので、ハクリイの化粧品や、石けんを使い、当時珍しい美顔術など取り入れたので、男の客だけでなく、芸者衆にも「顔あたりは七歳でなければ」と、引つ

張りだこでした。

私は七蔵の二男として、明治三十六年函館に生まれ、函館商業学校から日本医科大学に進みましたが、途中結核におかされ、初志貫徹出来ませんでした。私の姉マサは父ゆずりの気性の激しい人で、よく七蔵を女にしたような人だといわれました。明治四十年頃、十五、六才の時横浜に行き、元町、山下町などに理容美容の店を何軒も持ちました。マサは現在八十七才、私学をつくり今でも元気で横浜に住んでいます。

その姉のところで私達は知り合い結婚しました。

七蔵は、店の前の方を男子部（床屋）奥の方を婦人部にして洋髪専門をフクにやらせました。その頃田口は、住み込みの弟子が大勢いて、四十人からの大世帯でした。厳しい父のもとでフクは、相当苦労したらしいです。私は病気で療養生活と、職場、大学と出たり入ったりの実生活でフクとはほとんど一緒に暮らしてましたから、でも今考えると、私がいなかっただから、かえってがまん出来たのかも知れませんか。フクは、横浜時代から、工夫したり、創作したりするほうだったので腕が良いと、評判になり、最良にしてくれるお客様が増えて行きました。竹田病院のおばあちゃんは、今でも六十年來のお客

様です。

長男進が、しょう紅熱の後、足が痛いと言いだしたのは五才の頃でした。股関節の病気で、仙台、東京と病院まわりをしましたでしたが良くならず、小学校も一年おくれて入学しました。不運はそれだけでなく二男の靖彦が、高校一年の時脱疽にかかり足の指を切断し、途中退学しました。靖彦の足は現在も、すっかり直ったわけでなく、いつ再発するかと心配です。そんな事があって、男の子二人共心ならずも美容の道へ進む事になりました。「蛙の子は蛙」と言いますが、進は山野愛子美容学校に在学中へツブーン・スタイルの髪型で、最優秀賞をとりました。靖彦も、フクの後継者として日本髪のかつらに取り組んでいます。フクは根つからの仕事の鬼でいつも新しいものに取り組み、夢中になつていきます。芯のつよい女で、一人でいても、淋しがらない人です。沢山の役職や、知事賞もいただきました。「この仕事は奥深くて、もうこれで良いと言うことがない」「若い人達と一緒に勉強するのは楽しい」と口ぐせに言っています。

フクには、小さい頃事情があつて父と別れた母がいました。後年、父と母を引取り面倒を見ました。私達は、その両親の年令を超えました。もうすぐふたり揃つて喜

寿の祝を迎えます。結婚して五十余年、お互いに労わり合つて残る人生を健康に過ごしたいと願うこの頃です。

田口前子（長男の嫁）

私は、よそ者なんです。実家は函館ですけど私の美容師の修業は他の土地でしたから……、お義母さんには息子と一緒にさせたいと考えていた女性ひとがいたらいいのですが、私達は恋愛結婚でしたから、昭和三十六年から森屋デパートで美容院を開いています。子供はおりません。良く友達に「二人だけで退屈しない？」なんて聞かれますけど、全然そんな事ありません。主人とは共通の趣味持ってますから、主人は仕事柄、しょつ中旅行してますから、晩御飯は出来るだけ一緒に食べる様にしているんですよ。主人が子供の頃、義母は一日中店で働いて晩御飯の時だけが一緒だったそうです。でも義母は、その時昼間言えない注意をまとめてするので、それが嫌で、主人はなるべく早く御飯食べるようにしたと言います。義母は面倒みの良い人で、自分の口からは絶対言いませんが、人の世話はずい分して来た人なんです。それに賑やかなのが好きで、家族マージャンなんかも、す

るんですよ。私達、たまに朝市に行くでしょう、父母の好物買つて帰りに寄る事があるんですが、朝の六時というのに、もうきちんと帯しめて、身しまいがすんでいるんです。人に素顔見せたり、だらしない格好したり絶対にしません。居眠りしたの一度も見た事ありません。仕事の上での義母には、もう無条件で尊敬してます。素質もあつたんでしょうが、素質だけであれだけになれるものではありませんよね。

日本髪のかつら結び上げる時、和紙で出来たひもで、元結を、きつちりしげるところがあります。その時、片方を歯でかんでしめるんですよ。義母は歯の治療していた時それが出来ないからと治療を延ばした事があるんですよ、義母らしいでしょう。家族が集まると仕事の話が出ます。主人とは良く議論になります。「お義母さんに、あんな事言つて、言い過ぎよ」と後から私が言うんですが、親子のせいかな主人は義母にボンボン言うんですよ。でもいつも平行線、お互いに妥協が無いんですね。

敵しい義母ですがこの頃は、「進ばかり出掛けて、貴女もついて行きなさい、いつてらっしゃい」と言つて下さいます。私達夫婦は、店を持つて十八年になります。色々な意味で、親の七光り的なものから抜け出すのに五

年位かかりました。義母は、ぐちをこぼさないし、自分の事は仕事以外はしゃべらない人です。私も親子の会話じゃなくて、同じ仕事を持つ者同志の話ばかりね。仕事の事を聞くと、必ず返事が返って来ますから勉強になります。私はお義母様と言うより、一生尊敬出来る先生でいて欲しいと思います。義母は「ビンつけ油の匂いのない生活なんて考えられない」と言います。私も仕事から離れた義母なんて考えられません。ただ、もう年ですから役職から離れて、楽しみながら仕事をやって欲しいと思います。今でも、東京などで花嫁のショーがあると、浮々と嬉しそうに出掛けて行きます。さすが義母ですね。

田 口 芳 邦（フクの甥）

私は、田口七蔵の孫で、田口フクの甥にあたります。五十四才です。私の父は、若い頃から結核で三十七才で亡くなりましたが、田口光雄の兄に当ります。父は長男でしたから、一応私のところが田口の本家という事になりますか。私の母も亡くなりましたが、弟嫁のフクとは一つ違いで、七人の子供を産みました。素人の家から嫁に来たので、最初理容も美容も出来なかつたので、銀座

田口”の大世帯の中で、家族の食事、子供の世話等してフクは、横浜仕込みの腕で、婦人部を切り回していた事です。祖父七蔵の店は、横浜に別荘持つ程繁盛しましたが、今でも逸話が残っている程、頑固で、偏屈、それに非常に厳しい人で、弟子達の入れ代わりもはげしかったと聞いています。その店に六年も辛ぼろ出来た田口フクですから……。あの人もこの頃は年のせいかだいぶくだけて来ました。声をかけられるようになったのは、ここ十年前くらいからですか。旦那も年で、面倒な事はいやがるし、息子達も、母親にくらべると、苦勞していませんから、何となく頼りにならないし、まあ私で役に立つ事でしたら、何かとお世話させてもらおうと思っています。今も「店を移したいが、どこかにない」と頼まれているんですが仲々良い所が無くてね。あの人は、気に合わないと、はつきり駄目を言う人ですからね。

フクさんの腕は、大したものですよ。まあ言うなら「無形文化財」でしょうね。しかし息子も居るんですから、あの年まで現役で働いているという事は、女として幸せな人とは僕は思えませんね。

かつら作りだけで十分暮して行けるんですから。

高木重子（フクの弟子）

私は、大正八年、鳥牧郡鳥牧村で生まれました。家の商売は、漁業でしたが、魚が獲れなくなつて髪結の見習いに入る事になりました。函館にいた叔父に「お前は、行儀、作法がなつてないから」といわれ、叔父の家で二カ月、台所仕事迄込まれてから田口先生のお店に入りました。昭和九年十一月、十五才でした。店は南部坂の下にあり、「マーセル美容院」でした。マーセルというのは、マーセル・ウエーブを考え出したフランス人の名前だそうです。横浜帰りで、洋髪の出来る先生という評判で大へん流行っていました。実際、マーセル・アイロンを使って、きれいなウエーブを作り上げて行く先生の技術は、大したもの、その頃元町、末広町に多かつた海産商の奥様や、商家のおかみさん達が良いお得意様でした。洋髪の値段は、五十銭だったと思います。丸髷が三十銭、島田が五十銭の頃でしたから。店には弟子が六人いました。先生は無口で「いらつしゃいませ」の挨拶はしなかつたものです。だまつて仕事に打ち込んでいました。

当時の髪結いの見習奉公は、どこのお店も大体同じ様な

ものですが、マーセルは、年期が五年、そのあと御礼奉公が一年でした。先生は厳しい人でしたが、小さな事を、口やかましく注意するのではなく、「仕事は、見て覚えなさい」「技術をぬすみなさい」と良く言われました。

私達弟子は、朝起きると、まず先生の顔色を見る事から一日が始まりました。最初の二年間は、月五十銭の小遣いをいただきました。足袋も買えずに、家から買つてもりました。毎月十八日が定休日、電車賃を節約するため堀川町迄、行きも、帰りも歩いて映画を観に行つたものです。堀川町の映画館は二流で、他の店より安く十銭で観られたからです。門限は厳しく九時迄に帰らないと叱られました。働く時間はきちんとしていて、夜おそく迄働かされる事は余りありませんでした。先生は「銀座田口」時代に、苦しいおもいをしたので、私達に対する思いやりだったのでしょうね。嬉しかったのは、年期が明けて、東京見物に連れて行つてもらつた事です。京橋のホテルに泊りましたが、どこへでも、おそれもなく歩くと言つて笑われました。年期明けて、東京見物に連れて行つてくれる店なんかありませんでした。

昭和二十年五月、先生のお世話で結婚しました。その頃は、高い給料をいただくようになっていたので、一通

りの仕度が出来ました。その年の七月に、先生の長女、栄子さんが、腸チフスにかかり、赤川の隔離病舎に入りました。店が忙しいので、私が付き添いました。私は昭和十八年に、おひまをいただいてましたが、何かあると伺つてましたから。腸チフスが流行つて、病室は満員で付き添いは、廊下に寝ました。結婚して二カ月足らずで姑達に伝染させてはと思ひ、手がピリピリする様な、クレンジール液で手を洗いました。私が病院から着替えを取りに帰ると、姑が、家から少し離れた木に着替えの入った風呂敷包をくくりつけてあつて、私もぬいだ物と同じ様にして置いて来ました。家の中に、入らない様にしたのです。

旦那様は、男前ですし、学問もあつたし、世の男性一般のように、要領良く遊んだのではないですか。先生は、顔に出さない方ですし、どんな時も旦那様を、立てていました。旦那様も、理美容関係のお仕事をしてましたので出る時は、大抵御一緒に、"おしどり夫婦"と言われていました。

最近、余りお会いしませんね、それでも会うと、つい長話になります。仕事の話ばかりですが私も、この年で現役で働いているものだから、そうなるのでしょ

う。先生のまわりには、人柄のせいも、人が集まります。先生は、採算の取れないやり方をなさるので、はたで見ている心配な事があります。先生の立派な技術を、後輩に教えることは賛成ですが、まわりの者が、それを利用する形になつて欲しくないですね。

長男のお嫁さんも、仕事を持つて大変でしょうが、もう少し、先生に近づいて欲しいと思います。

赤坂謙二（美容商事会社社長）

田口フクさん、尊敬の一語に尽きます。

私は商売柄、先生と御一緒に旅行する機会がありますが、こんな事がありました。汽車の中で、私と話しながら、両手の指をこんな具合にくるくる動かしているんです。聞きましたら、指が自由に動くように、指の準備運動だそうです。家でくつろいでいる時でも、ウィッグ（人形の頭）を、そばに置いて、いつでも研究されているそうです。七十七才の先生がですよ。全く頭が下がります。

「百日草花粧会」というのは、全国的なものです。この会員になれるのは、花嫁着付の全国大会で、十五、六位迄に、入った人だけです。全道で十人ぐらいしかいないで

しょう。

田口先生は、会友となっているでしょう。これは全国大会で何回か、上位入賞しなければなりません。北海道では、小樽に一人と、函館に田口先生がいるだけです。

その他先生は、重要な役職を一手に引き受けています。函館の婚礼美容の技術は、全道でもトップクラスですよ。昭和五十四年度、全道大会入賞者六名中、四名が函館でした。室蘭に行った時も、素人の私から見ても、函館より十年はおくれているなアと感じました。先生をつくる花嫁姿は、ういういしくて、気品があるんですね。これはもう芸術ですね。

先生は現在、日本髪に転向し、婚礼美容専門みたいになつてますが、今でもウエーブを出す髪型を結わせたら右に出る者はいないでしょう。日本髪も洋髪も一流ですよ。いつか旦那様に聞いた話ですが、先生は、夜寝ていても、何か考えつくと、仕事場に行つて座つてるそうです。執念みたいなものを感じますね。そして先生は、そういう技術を、人にどんどん教える人なんです。私利私欲が無いというか、恬淡としてるんですね。昭和三十年頃、三百軒ぐらいあった市内の美容院で、婚礼美容が出来る店は、十軒ぐらいしかなかったのが、今では、五百軒の

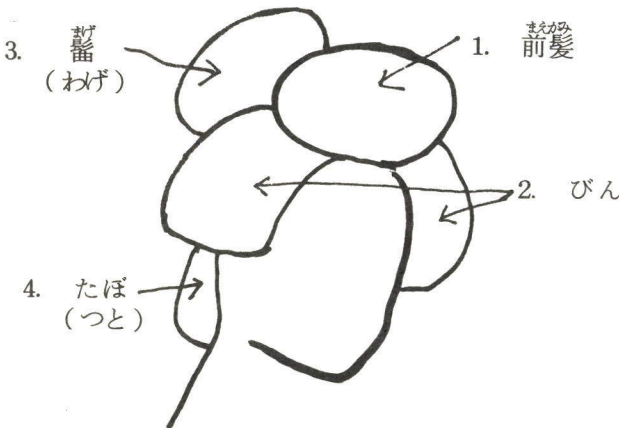
うち、半分ぐらいの店が出来るようになりました。

田口先生のお陰と言つても言い過ぎでないと思ひますよ。

参考資料

「考現学」

「洋髪の歴史」



結髪構成主要部分

(七) 浅蜷坂の髪結福岡スエの弟子たち

佐藤タミさん
若松タネさん

酒井嘉子



丸髷姿の福岡スエさん(撮影年月不明)

函館の髪結を分担して調べようということになって、私主に芸者衆を専門に結った髪結さんを探すことにした。芸者屋の取締り、芸妓に口のかかった時の取次ぎなどをする見番に問い合わせと手取り早いのではと考えた。しかし、今から六十年以上前の大正の中頃には、見番数が七、八と全道一の数を誇った函館の見番も、今は「湯川平和見番」一つだけとなり

何回か電話を入れたが連絡できないでいるうちに、湯川温泉街では古い店という「ツタヤ美容室」を紹介された。大正四年生まれという女主人の口から「浅蜷坂のおタネさん」の名が浮かび上がった。「宝来町電停で下車して、阿さ利肉屋の角を函館山に向かって登り、その辺で尋ねると、年輩の人なら誰でも「髪結のおタネさん」を知っている筈、芸者専門に結った人ですよ」と女主人は丁寧に教えてくれた。

尋ねてみようと思っているうちに、友人が、谷地頭電車通り郵便局並びにある「佐藤美容院」が古いと紹介してくれた。

女主人佐藤タミさんは、大正前期浅蜷坂で鳴らした女髪結「福岡スエ」の実姉の娘即ち姪に当たる人とわかつ

た。タミさんを何回か訪問するうちに、「おタネさんならよく知っています。福岡スエの弟子で、浅蜷坂の店を継いだ人ですよ」ということになった次第である。

私としては、大正十三年六月十五日の『函新』に「蓬街の天金などは指を屈せられる家（髪結の）だ。お師匠さんは本年二十五才の働きざかりでナミ子さんといつて先代の愛娘である」と紹介されている佐々木ナミ子さんが健在ならば今年八十才の筈と、宝来町の「天金美容室」も当たってみたが、ナミ子さんは既に故人となり、今もつて惜しい気持である。

さて、福岡スエというお師匠さんに仕込まれた二人の弟子一七十三才の今も、現役で活躍している佐藤タミさんと、敗戦直前惜しまれながらもきつばりと、髪結さんをやめてしまった今年七十六才の若松タネさんに語ってもらふことにしよう。

櫛又はとかし櫛



(一) 佐藤タミさん



佐藤タミさん（昭和34年写す）

私は、明治三十九（一九〇六）年、函館の青柳町で生まれました。母が三十三才の子なんです。母は青森の貧しい百姓の出で、幼少の頃函館の遊廓の遊女屋の養女となつたんです。でも母は口癖の

ように、養父母には実の娘が一人いたのに、私と、もう一人の養女と三人を、同じように扱ってくれた、とてもできた人だつたと言っていました。

父はその遊女屋の料理番です。佐藤靈光つていつて、好き合つて一緒になつたらいいですよ。男四人女四人の子供でした。でも、姉三人は早く死んで女は私一人だけ成長したので、とても大切に育てられました。父は山形の庄内ので、もと坊さんで、何でもできた人です。桃

の節句に段の雛人形作ってくれたのを覚えています。私の子供の頃は、青柳町で魚屋をしていました。谷地頭の八幡宮の手伝いもしてました。宮さんが来るとかお祭りがある時など八幡宮の料理を作るわけです。

母の兄弟は五人位いたと思います。四人かな。兄一人、母、それから妹二人。母の名はタコ、自分の名前イヤがつてね、名前聞かれるの大嫌いでした。

福岡スエの店

福岡スエは私の母の一番末の妹だからスエで、髪結の弟子に入つたんです。どこでだか解かりません。

この叔母は私が物心ついた頃は、浅蜷坂で髪結をしていて、とても繁昌していたと思えますよ。始終店の内部を改造してました。木造二階建てで、柱なんか料理屋みたいにいいのを使つて大きなうちでね。ふけ取りや梳手、癖なおしが五、六人位、他は表回り（出髪）、今の言葉でいうと出張ですよ。二人一組で三組ほどさせるわけです。叔母は出髪などしません。叔母には子供がなかつたけれど、養女を何人も貰っていました。大概いとかや、はとこでした、可愛がつてた養女の父親が入獄

中と知ると、翌日返しましたよ。そんなかんだで、店には弟子が二十人位いたかな、その監督を私の母がしたたのです。

母について、幼少から叔母の店に出入りしてたけれど、叔母は大嫌いです。おスエちゃん、どうして姪ごなのにタミちゃん嫌いなものつて人が言えば、丙午ひのうま生まれの子がいると出世できないから大嫌いとか、今度「まるよし」に來た芸者のめつたくないこと！タミちゃんみたいつて、私の目の前で言うんです。いくら七、八才の子供でもよく覚えていますよ。だから叔母は大嫌いだった。

福岡スエみたいな髪結にはなるまい、なるまいって思つてたんですが……

いつも五、六十人位のお客が待つていました。芸者衆が主でしたよ。叔母はお客様には愛想がいいですよ。美人だしネ。ところが夜になると弟子をやつつけるんだわ。昼にやつたことをアーであつたコーであつたつてね。昼間は睨んでて、側に寄つてギョツとつねるんですね。したら口には出せないけれど真赤な顔になるんですね。アツつねられたなつて。私はそういうのがイヤだつたのね、トセちゃん（スエの養女）なんか、自分に並ぶ位名人に仕立てただけに厳しいんですよ。昔は鏡台の前に坐

って髪結つたでしょ。叔母は長キセルやつてて、悪いと
ピンピンとたたくんですね、キセルの先が飛びます
よ。

大正七（一九一八）年六月二日『函日』には、「亭主を
尻にしくおけつはでも大きいとこれはごめんさい（函
館の女髪結さんの打明け話）」というちよつとふざけた
見出しで「あさり坂のおスエさんは函館では一流の髪結さ
ん……立派な普請は四年ばかり前に新築した……亭主は
料理番……しかし今では家内とりしまりの役……函館の
女髪結さんは主人も弟子もひつくるめて三百人と少しで
す。遊廓のお師匠さん（髪結の）はお盆の御祝儀が七、
八十円になる……」とある。タミさんの話からは、この
浅蜷坂のおスエさんに黙々と仕える徒弟奉公人の一端が
窺える。

この時、タミさんは十二才、やがて住吉小学校（現青
柳小学校）の六年間を終えるが、母と共に叔母の店通い
は続く。

福岡スエは新聞にも紹介されたほど繁昌していた浅蜷
坂の店を養女トセに任せて、夫と共に上京する。東京生

まれのスエの夫は、蓬萊町の「磯なれ」の腕きき料理人
で、二人は人も羨む大恋愛で結ばれた仲だったとか。夫
が東京永代橋付近に料理店を開き、スエは日本橋芳町に
髪結の店を開くのである。この店に、年期中中の島本（旧
姓）タネさんが奉公することは後で述べる。

一方、浅蜷坂の店は、大正十年の二千四百四十一戸焼けた新
蔵前（現東川町辺）の大火で焼失し、トセは義母スエの
いる東京へ引揚げて行く。手伝い程度とはいえ、仕事の
なくなつたタミさん母娘に追いつちをかけるように、翌
大正十一年九月、タミさんは父を亡くす。十六才の年頃
になつていたタミさんは、同年十一月一日、警察署へ髪
結の届け出をしている。

大正十一（一九二二）年といえは、当時の函館の新聞
は、「女の職業」とか「女の収入」とかをシリーズで連
載したり、女の職業も産婆と髪結しかなかつた明治時代
とは違い、女がいろんな職種に進出し始めていた頃であ
る。しかし、タミさんは、なりたくないと思ひながらも、
最も身近にあつた女髪結を職業に選んだ。これは、父の
死の他に彼女が丙午生ひのちままれであつたということも一因と
なっているのではないか。翌大正十二年の春には、技術
をみがくために、叔母スエというよりはその養女であり、

タミさんの従姉でもあるトセ（タミさんより十才以上も年上だとか）を頼って上京するが、九月、関東大震災に合出つて命からがら帰函することになる。

縁談・上京・震災

海産商のある人が、私に縁談持つて何日も何日もしつこく来てたんですよ。それがある日、私が丙午ひのうま生まれと知るとびつくりして、それつきり二度と来ませんでした。当時だら、どうして丙午の人、嫁に貰ったのかねとか、どうして丙午生まれのお手伝いなんか雇ったのだろうねとか、亭主を食うとか。八百屋お七も丙午だそうですよ。同級生で、それで悩んで、連絡船から飛び込み自殺した人もいます。なんなら嫁に行かないでみせるって心に思つたことを覚えています。

四月二日に上京して、九月一日の震災ですからね、店は芳町つて芸者の街にありました。函館の芸者より気風きかぶよかつたみたい。銀杏返しか、つぶし島田か、低目の島田など結つてました。九月二日が父の一周忌なもんで、母が迎えに来てたんですが、大志持つて東京に出て来たばかりだと母だけ返したんですよ。そして震災です。火

くぐつて逃れたので、東京駅へ着いた時は、頭の髪が焼けて無くなつていないかと思わず手を頭にやったことを覚えています。おタネさん達と一緒に逃げましたが、はぐれて……私はお茶碗とおひつ背負つて逃げた。宮城のお濠で御腰おこしを洗濯しました。

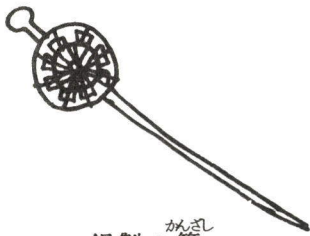
函館に帰ると、私も死んだものと仏になつて飾つてあつたんですよ。芳町の店も焼失してしまい、叔母も函館に来て、浅蜷坂で店開いたんです。今度の店は、全然立派でなく借家ですよ。うちの母が家借りる保証人になつたから、当たり前なら私に店譲つてもいいのに、なんだかんだと私を避けて、おタネさんに借金共々譲つて、叔母は一、二年で又東京へ行つてしまつた。だつて親父おぢさん（スエの夫）つて女癖の悪い人で放しておけないんだわ、心配でね。

谷地頭で“髮結”開業

函館に帰つてブラブラしてたら、タミちゃんちよつとやつて頂戴よつて。一人やれば又他の人も連れて来てくれる様になり、やるようになりました。ここ（谷地頭の現在の店のある所）ですよ。

その頃、田舎へ随分行きましましたよ。泊りがけで弟子と二人で。かつらなんか使いませんから、櫛道具持ってけばよい。

昔、赤川（当時亀田郡赤川村、現在函館市赤川町）の嫁貰う家のしたく、みんなの髪結って着せて、こんだ馬車で大野まで行つて、お嫁さんや周りの人の支度して、又赤川へ連れて来たこともありました。私はめつたに乗物には酔わないのに馬櫛に酔つたものね。あげてあげてゆるくなかつた。婚礼つて、たいてい冬多いんですよ。それでも田舎へ行くんだら待遇よくつてね、出張しましたよ。上磯だとか、大沼だとか、どこまでも行きました。泊りがけでね。下海岸なんて石崎から恵山の奥まで行つた事もある。石崎で嫁さんの髪結って着付けして、我々嫁さんについているでしょう。昔も今も。夜の十時過ぎ、宴会終つて、こんだ恵山へ行つた。馬やる人も酔つ払つて、二時間位かかつて着いたのは十二時頃でないでしょうかね。上がり口で三三九度させられたり、貰う方で宴会が始まるでしょ。私は



銀製の簪かみ

二階へ行つて横になつてたんですが、髪結さん寝て下さいつて起こされたのは朝。見たら羽織、袴の親父さん連中がひつくり返つて寝てるサ、お嫁さんは起きていますよ。昔の田舎つて、たいていそうでした。新婚旅行なんて最近の話です。三日目には嫁さん、里帰りでしょう、こんだ丸髷に結つて……又行かねばならないから忙しいですよ。

一日に三つかけ持ちつて時は、市内でなきヤードできません。迎えなんて来てくれませんよ。車は高級だつたし拾うこともできない、あつちこつちを電車（市電）で走つた。婚礼つて御膳ごぜんでるものですよ、食べてる暇ありません。お礼はその時の相場でね、昔から我々現金払い、貸しなんてしません。まして婚礼だら……はずんでくれる所もあるし、ケチ臭い所もあるしネ。

美容で着物（貸し衣裳）持つたの、私が初めじゃーないかな。大火（昭和九年）前は、振袖なんてよつほどの大家のお嬢さんでなければ作らない。着るにしても、たいてい皆貸し衣裳でした。でも、普通は留袖を作つて、今と違つて、着て行きました。お嫁さんがネ。頭は島田に角隠しです。

昭和五(一九三〇)年十月十一日付『函日』に「函館の花嫁の式服は留袖よりも、式場の引き立つ華麗な振袖が喜ばれる。値段は、中産階級以上は式服衣裳だけで、ざつと五百円。大衆向きは、黒チリメン留袖すそ模様紋付・白紋羽二重二重下着・赤紋羽二重下着・錦糸丸帯一揃で五十円・七十円・百円の特売がある」と載っており、「丸井坂上昆野美粧院の話として、髪結・化粧・着付け・色直しまで一切面倒みると、時間は半日以上かかって一回五円から三十円」ともある。

半円タクシー市内五十銭均一、湯川一円五十銭、もりかけ・コーヒーが八銭の時代のことである。

函館大火・戦争時代

タミさんの商売は順調に進んだが、昭和九(一九三四)年、住吉町から出火し市の約半分を焼失する例の大火で店は丸焼けとなる。

当時谷地頭町の戸数八百六十のうち高台の七十戸以外みな焼けた



とか。約五百円の火災保険金が入ったので、谷地頭の同じ場所に店を建てた。弟子を四、五人雇い入れたので出髪は避け、店で髪結に専心する。

たいてい週一度丸鬻ゆいに来ますね。花柳界扱えば島田、嫁さんなら桃割れや島田、結婚したら最後、丸鬻ゆい他はゆえない。うちはたいてい丸鬻でしたね。サラリーマンや漁業関係の奥さん達が多いんです。束髪もしましたがパーマは私は戦後です。戦争中でも忙しかつたです。戦争中でも結う人は結いましたよ。戦争中、四月八日でしたよ、B、二九が初めて東京に入った(太平洋戦争米空軍による東京空襲は、昭和十七年四月十八日、B二、五十六機による奇襲作戦から始まると資料にはあるの)でタミさんの記憶違いか、いずれにせよ昭和十七年)というその時、私は東京の山野愛子さんの所でパーマ習ってました。その時は習つてもできないとわかってましたけれど、いつかやれるようになればすぐやろうと思ってね。非国民だったかも……戦争なんてとんでもない。みんないい感じの人をいんでないですか。私が行つてる時、東京の人真剣にバケツ持つて(消火訓練の)練習してた。

さすが東京の人違ひな一ツて。我々は腹ではこんなバケツで練習したつてと思つてたのに。下の兄が、道内でしたが、兵隊に行つて間もなく終戦でした。

戦 後

昭和二十(一九四五)年八月、長かつた戦争は終わる。戦争中に修得した技術を生かして、タミさんは「ご婚礼(着付)・パーマ」の佐藤美容院として新たな出発をしている。

市内にあつた道立三保健所が市に移管されて、昭和二十三年九月市立函館保健所として新発足し、美容師は警察署から保健所の管轄に入ることになる。『函館市の衛生』(参照)

この頃の出来事に、昭和二十三年、美容師組合の分裂と同二十五年のタミさんの母親の死がある。商売に忙しいタミさんの食事から洗濯まで身の回り一切をしてくれた方である。

どつちの組合に入るかといふことでゴタゴタするんです。私は初め天金さんの方だったんですが、誘われて田

口さんの方へ行きました。組合は今でも任意ですよ。商売している限り、別に大したことはないけれど、組合に入るべきでないですか。入らない人は料金を安くしたり、ズルイ人が多いんです。

母とは死ぬまで一緒でした。なんでも物のない頃でね、風呂が好きで風呂場を作つたんですが、石炭がないものだから、なかなかたいてやれなかつた。その日二トン入つたので久しぶりにたいなんです。ちょうど節分の日で、七十七才の祝いするつて言つてたけれど何にもないわけだから三月三日の節句にしてあげるからねつて。私が婚礼頼まれて髪セットなんかしていたら、まだ風呂に入つてんだという。無理に上がらせたら、真青な顔してやたら冷たい汗でね。かかりつけの医者が来た時には動かなくなつて、寿命です。病気は全然ありませんつて。私はその後、婚礼に行つたりしてわかんなくなつたけれど、近所の年寄りがあやかりたいと、母が肌に着けてた物みんな持つて行つてしまい、何にもなくなつたそうですよ。母親も、青森で八十九才で死にました。来年は天皇陛下からお盃を貰えるつてその日を楽しみにしてたそうです。

母は私を嫁に行かせなかつたことを悪いと思うんです。

ようね。死ぬ少し前も、オレば憎いと思うべって。こつちも年悪いから嫁行かないわってそういう腹ではいるんですが……それでも行こうと何べんか思いましたがね。今にして思えば女はやっぱ嫁に行くべきです。どんなにええつたって、自分の産まない子は腹一杯のこと言つてケンカできませんから。

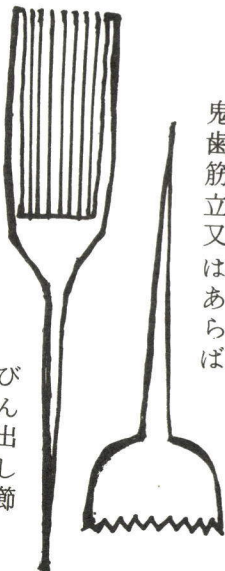
昭和五十二年、タミさんは「開業以来五十年以上の長きにわたつて美容業を営み、公衆衛生の向上と業界の発展に寄与された功績は誠に大きい」と、北海道美容業環境衛生同業組合より表彰状を受けた。函館では前年度の田口フクさんに続いて二人目だとか。

現在、免許証を持つた美容師を二人雇い、タミさん自身は着付けの仕事だけ。戦後、多い時で一日八、九人も髪結（かつら）し着付けしたというタミさんだが、今は婚礼の髪結はほとんどないと淋しそう。△△ホテルといった結婚式場ばかりで、多年來のお得意さんでさえ結婚の時はホテル専属美容室を利用すると不満気でもある。それは営業収入に反映するし、幼い子持ちで富岡から通つて美容師がやめはしないかと、それも心労の一つ

とか、医者はどこも悪くないと言うんですが……と。仕事一筋に、今年七十三才のタミさんは私にはかくしゃくとした美容師さんである。

佐藤美容院の向かつて左側はタミさんの長兄（故人）の家、右側奥は次兄（故人）の家で、昭和九年の大火以前からずっと一緒に生活し、その六人の姪のうち五人までが美容師を志し、タミさんの養女となつたまゆみさんは、現在は子育てで仕事を休んでいるが、タミさんの引退後は店を継ぐことと思われる。沢山の姪や甥、その子供たちに囲まれて「どの子も私について離れない。今でも子供は大好きですよ。めんこくて、めんこくて……」と話すタミさんにとって「女はやっぱ嫁に行くべき」なのだろうか。この夏も店内を改装し、商売に打ち込むタミさんの言葉としては、私には意外であつたが……。

鬼歯筋立又はあらば



びん出し櫛

(二) 若松タネさん



タネさんと弟子達（9年大火後うつす）

私は、明治三十六（一九〇三）年、江

差の乙部の生まれです。漁師の父は幼い頃亡くなり、母親が産婆をしながら苦労して育ててくれました。子供は男五人女一人と六人いました。がネ。そんなもんで、

十いくつの時叔母の病氣看病に函館に出て来たんです。学校なんて三年位しか行きませんよ。

髪結の徒弟となる

叔母の所にジツとしていても仕方ないと、自分で髪結が好きだからと、髪結の見習いに出たんですよ。そこがとんでもない髪結で、出髪ばかりする人だったもんで、

一カ月もいたかね。そこから出て、停車場（函館駅）前に旅館相手に商売していた中野ヒロさんっていう髪結があつたんです。そこへ五年の年季で入つたのだが、店たたみ東京へ行くことになつたので、私も一緒に歩いて行つたんです。

お師匠さんは髪結をやめて、夫婦で八百屋を始めたので、三年という年季半端の弟子は採らないというのを頼み込んでもらつて、福岡スエの店に入つたんです。（スエの店では弟子を七年年季でしか採用しなかつたという東京日本橋芳町の久松警察のすぐ向かい、もとの明治座の隣でした。七、八人の弟子がいて、私なんかほんとに勤まるかと思つたです。年季途中で入つたのであたりの人には気を使うし、お師匠さんはビールが好きな人でね、気嫌が悪くなればビール買いますかつて。どつちかかというヒステリーなんです。大柄な別嬪さんでしたが……お師匠さんの旦那さんは霊岸島の永代橋で、鳥の料理屋をしていたので、店が終わると娘（養女トセ）さんも一緒にそつちへ帰るんです。必ず丸髻ゆつて車で帰るんです。専用の車があつたんですよ。

弟子達は、店の後始末をしてから代り番こに電車にのつて料理屋まで行き、そこの後片付けをし、その時によ

つて泊つて翌朝帰れつて言われればそうしました。日本橋と靈岸島ですから相当な距離（實際は約三キロ）でしたよ。

お師匠さんて、めつたに自分のこと語らない人でした。且那さんで苦労した人なんです。且那さんて東京の人であんまり品の良い人でないから、どちらかと言うと女狂いの方だった。お師匠さんて人は衣裳持ちでね。着物でも襦袢でも全て重ねて置かねば駄目なんです。おタネ！外出だから支度しておくれ。ハイッ今日は何着て行きますか。何々出しておくれつて。そしてすぐ出さなきゃ駄目なんです。鬻ゆつてね、ダイヤの指輪かけて車で出掛ける人だった。

お給金なんてそんな、月百五十円（大正十年頃の年期奉公中の身とすれば、タネさんの記憶違いか）だったです。その中から下駄買わねばならぬし、衣類も全て買わねばならない。イヤ！少ないでしょう。仕事で着る白い割烹着はお師匠さんが出すんですがね。商売覚えるのにゆるくなかつたです。

客は芸者衆もいましたし、ある大家の奥様もいます。お師匠さんは桑島千代（明治末、最も有名な髪結業者で新橋に大きな店を構えていたとか）の弟子つて言つてました。

店での商売が暇になると、たいてい昼過ぎ頃、弟子連れて出髪に行く。先に弟子が行き、後からお師匠さんが来るんです。何軒も回りましたよ。髪結賃いくらだったか覚えていません。

関東大震災

ところが震災にあつて……店は広がったのですが、櫛置く台がグラグラつてきた。お客の芸者も一緒にみんな逃げました。久松警察まで逃げたら、もうすごい人で怪我人も一杯で……そこで毛布貰つて逃げた、逃げた。日本橋通つて宮城まで逃げたね。途中、十二銀行がありますわ、そこが朝鮮人に爆破されたんです。そう言うんです。だもんだから、危ないからつて、止められていたが、こんだいいよつて言うので、そらつと丸ノ内に行つたが又危ないよつて言われて宮城前まで逃げた。

震災は昼十二時近くでしたから、そうですね、宮城に來たのは夜の九時過ぎ頃でしたね。（日本橋から宮城前までは直線距離で約六キロ、ふつうなら徒歩一時間半位で行ける所でないか）真暗です。ただどこを見ても火の海ですわ。ただ、宮城が危ないとなりますとね、宮城

の中から六連発の砲弾がなるんです。するとダツダツと馬に乗った兵隊さんが出るんです。どこへ行くんだか知りませんが、私達が行った時二回出ましたね。朝になって、宮城の濠見たら、みんなおしっこしている。アラツ、夕べこの水飲んだんだってね。濠サ水で泳いでる人もいるんです。それから二、三日経ったら、兵隊さんが濠の水を入れたビン一本ずつと、角パンをくれたんです。逃げる時何にも持ち出さなかつた。お師匠さんを一生命探しましたね。お師匠さんは、お鉢（おひつ）をしょって、家族と一緒に東京駅で寝てました。免に角テントへ戻ったら、テントの前だつて今死ぬという人や生きるという人や死人だらけですわ。

大正十二（一九二三）年九月一日午前十一時五十八分四十四秒、関東一帯を襲つたマグニチュード七・九の大震災に伴う火災で、髪結の店も料理店も焼失し、福岡スエの家族、従業員とも散り散りばらばらになる。

スエは、同九月中に実姉（佐藤タミさんの母）のいる函館に引揚げた。養女トセも連れて帰函しようとしたが、トセは髪結の弟子二人を連れて夫の行く大阪へ去つた。

タネさんは、八百屋をしていた前の師匠の所へ身を寄せていたがスエの夫が迎えに来たので、十月末二、三年振りて函館に戻る。

タネさんは「二十才」になっていたが、スエの店で年季奉公はまだ続く。

浅蜷坂の店

函館サ行くのも大変だし、来てからも大変だつた。お師匠さんは、浅蜷坂をちよつと入つた所に家借りたんです。みな顔覚えて、スエさんが帰つたとなれば湯川当時は村、昭和十一年町になり、同十四年函館市に合併）やあちこちから声が掛かつた。ここから髪結道具のカバン持つて電車で行き、湯川ずつと回つて、温泉に泊つて、翌日又回つて来るんです。お師匠さんは気まぐれな人だから、私と他の弟子が先に行つて辭直し、下梳きなどして待つていと電話来て、今日行かないからタネ！お前やつておけ。仕方ないからヘタながらやる。こういうことがたび重なつて自分の為にはなつたと思います。

お師匠さんはバセドー氏病だつたからね。家で寝てるんですが、湯川から帰つて来るとおタネ！今日はすまな

かつたねって御飯食べないで待つててくれるんです。

お師匠さんは、震災の後二年近く函館にいましたかネ。東京の旦那さんが今度は新橋の茅場町に店開いたんで、借金一杯して、それ全部持つて帰って行きました。私がまだ年期明けてなかつたので、弟子二人も置いて行つたんです。“髪結—福岡スエ”って看板を掲げているものだから、その利子払わねばならないでしょう。一月から利子の催促に来るんですから……借金借金で大変でした。布団だつて一組しかないし、寝るのもゆるくなかつた。正月になつても働いた後から取られていく。電気代はたまつている。米代はたまつている。税金は何にも払わないでしょ。税務署からは催促に来る。その支払つた残りは全部お師匠さんに送るんです。

大正十三年六月十五日付『函新』には、市内の髪結、一流の家として蓬萊町は佐々木と福岡と記載されているが、内情は火の車だつたわけである。

タネさんの誠実さは師匠スエによく通じたのか、送金のために“拝啓おタネや”で始まる巻き紙に筆の封書が届いたという。達筆で読みづらく、又読む暇もなかつた

ので、髪結いながら芸者衆に読んでもらつたとか。

タネさんが美容研修で上京の折など、下へも置かぬ大歓待振りだつたそうである。再上京後の福岡スエは、再び髪結をすることなく、一、三年も経たず淋しく、ひっそりと病没したという。

“髪結—島本タネ”の店

私に大した親切にしてくれた、五稜郭の“すがや”の奥さんが仲に入つてくれて、店をお師匠さんから権利とも譲つてもらいました。布団・鏡など道具一式つけてあの当時に三百円、高かつたですよ。証文もあつたんですが……すがやの奥さんが、ある時に返せばよいつて、東京のお師匠さんの所へ行つて払つて来てくれました。大正の終わりか昭和の初め頃と思います。

お陰様で儲かりました。タネさん、店引き継いだはいけれどなんだ！つて言われないために一生懸命でしたよ。函館にもお師匠さんの弟子はいるものネ。弟子使つてお店やつてる人、四人位いましたよ。

花見の頃は三時頃起こされる。夜は、たいてい十時頃までやつている。十二月二十五日もなると、寝ないも

のです。忙しくつて、どもならなくなつて、六名（前から二名いた）に増やしました。年期は七年です。見習い中、小遣錢あげて盆と正月に着せました。皆住み込みです、函館の人でしたよ。小学校出てから来るのです。家事は弟子に分担させました。

組合には入つてますよ。独立前、お師匠さんの時代は、福岡スエの弟子つてことに入つてました。私は組合サあんまり出ないから、事情はさつぱりですよ。独立してからは忙しくつて出られない。田口さんとか「天金」さんとか熱心でしたよ。組合費はちゃんと納めてね、でも組合でもらつたことなんて、何にもない。山野千枝子さんとか、死んだ遠藤波津子さん（共に東京で活躍した美容家）とか、来れば必ず行きました。山野さんは、コテを使った洋髪が得意で、モデル（お客）連れて講習に行きました。

自分の店を持ち、商売も軌道に乗つていた昭和二（一九二七）年、タネさんは二十四才で結婚した。相手は、「ハハハ、恥ずかしくつてしゃべられない」と高笑いするタネさんと同い年の海産商人だった。当時は海産商人

も景気がよかつた。なんとなく好き合つた同志とか、結婚と同時にタネさんの店は新居ともなる。夫若松孝太郎氏の母と、病気で婚家を出された義姉も再婚するまでの間は同居した。

一人娘のタネさんは、故郷乙部の実の母親に家を建ててやる。東北から北海道にかけて冷害が続き、各農村で子女の身売りが繰り返された昭和六、七年の頃である。建築費六百元は現金でタネさんが支払つたというその家で、母親は八十二才で亡くなるまで産婆をしていたという。

夫の母や義姉との同居は、「そりゃあ苦勞しますよ。姑さんだから、ご隠居さんで何にもしませんが……」としか語らないタネさんだが、言外に明治生まれの諦念を匂わせる。

タネさんの店があつた浅蜷坂あたりは、当時相生町（後宝来町に編入）と呼ば、電車通りから浜側を蓬萊町といつて、カフェーや小料理店が立ち並ぶ「不夜城」の観さえあつたとか。新聞などは「驚きのカフェー時代、芸者と花柳界は淋しく……」と書きたてたが、この相生、蓬萊町には当時四見番があつて、昭和八年九月二十日付『函新』には芸者衆三百七、八十名とある。

子供に恵まれなかつたタネさんは、髪結に一層精を出す。客は芸者衆が中心であつた。鍛冶町（現弥生町辺）にあつた巴見番や、湯川の芸者も、車や電車でタネさんの店へ来たという。

電車通りに東見ひがしけん、中立見ちゅうりつけんと函館見番、浅剗坂の今の米屋の隣に町見まちけんと四つの見番がありました。髪結は他に天金さんのナミ子さんです。芸者衆が沢山いますから、今日は芸者衆のおさらい会だという、店休んで弟子連れて必ず出掛けて行く。友太郎さん・友千代さん・小奴さんとか今もこの辺に住んでいますよ。"花之家の千成せんなり"さんっていい女でしたよ。"酒は涙かため息か"の高橋掬太郎の恋人だった人です。うちに来てましたけれどネ、九年の火事（函館大火）後亡くなりました。火事の時花之家さんは芸者衆五、六人いたんですが、散り散りばらになつて……

芸者の髪型は宴会あつて××踊るから、おタネさん！ つぶしつぶし（つぶし島田）だろか島田だろうかつて。そうだね、お師匠（見番にいる踊りの）さんに聞いてごらんつて。ふつうなら、銀杏返しです。今日は気分かえて"七三しちさん"

（洋髪）にしてつて芸者もいます。素人さんでは白髪の小熊さん、振ふらない人でネ、銀杏返しゆつてあまり髷ゆわな人でした。普通は、結婚したら丸髷か"あげ巻きあげまき"（束髪）をしたものです。芸者は三日に一度は結むすいましたよ。そうですね、日に芸者は十五人は来ました。

具合悪いつて言つても薬飲む間もない。寝てても戸開けて起こされて、ねじり鉢巻きで髪ゆわねばならない。火事の後はかつらになりました。かつらといつても、本人に来てもらい、その人に合わせて結むすいましたよ。高島田に結つてたかつらを銀杏返しに結むすいなおしたりネ。それまでは髪ゆつてから自分で着るか箱はこ了りには着せてもらつてましたね。着付けもしました。芸者は素人と違つて丸く広く冷落とすんです。通夜の時は、芸者衆に黒持つておいでつて言いました。根掛けなど飾りを使わないで結むすますよ。

うちの人は店のことにタッチしません。何にも手伝つてくれなかつた。税金のことも自分でしました。芸者衆からタネさんも大した者だね。税金のアレに載つてたよ。アレッ！そうかいつて。税務署の人が、組合の役つきの髪結さんと五人も六人も来て店に坐れば、イヤなもんですよ。ごまかすわけでもないんですけれどね。組合か

ら配られた結賃表貼ってましたが、いくらでしたかね。

函館大火・戦争・廃業

昭和九年三月の函館大火で、佐藤タミさんと同じように、タネさんも店を焼失したので、現在の場所に新しく店を建てた。大正十年の大火まで、福岡スエの店があった所であり、昭和九年の大火前は芸者の置屋だった場所である。土地は借りて、鏡台など髪結の備品別で三千元余りかかったとか。少しだが保険金も入ったとかで現金で支払ったという。タネさんは髪結賃がいくらしたかなどの記憶はない人なのに、この金額は即答してくれた。一年後の昭和十年九月十七日付『函日』には職業紹介所供給労務者賃金一円二十銭を一円三十銭にするとあり、同じ頃の同新聞に米佃天井知らず一俵十五円十銭から十三円七、八十銭までとあるから、兎に角たいした金額である。

現在も住んでいる家がそれで、総二階建て。畳三枚位はある広い玄関に向かって左側（山側）十畳が仕事場、その奥六畳間が客の待合室だった。暖房は各部屋「ふくろく」ストーブに石炭をたいた。癖のついた毛髪をのばす

いわゆる癖直し用の日本手拭いを洗うため常に煉炭で湯をわかし、コテにも使用したので、高い天井は黒光りしていた。浅蜷坂に面した仕事場は、ガラス格子戸の窓越しに内部がまる見えだったとか、髪ゆう芸者衆がズラリと居並ぶ様はさぞ盛観だったと思われる。大火の翌年、昭和十年七月一日から三日、第一回港祭りが盛大に行われたが、港祭りに年増トモは「みつわり」、若い妓は「つぶし島田」と揃いの髪型、淡い地色で丸い水色の裾模様ハカマに黒朱子の帯とお揃いの着物姿で参加した芸者衆をタネさんは弟子六人と徹夜で結ったとか。勿論、みな自毛じげで結いました。今と違えずごく立派（港祭りが）でしたと回想する。（百三十頁下段の写真参照）

しかし、昭和十二（一九三七）年日中戦争、十六年には太平洋戦争が始まって、タネさんの店は強く影響を受ける。昭和十四年国民徴用令が公布、函館を見ても例えば商店の営業時間が制限され、ネオンも廃止、興亜奉公日とやらが設けられ、酒も入手困難となり、同十五年十二月六日付『函日』はカフェー、貸座敷、飲食店、喫茶店、興業場の一斉休業を報じている。翌十六年の同紙二月十四日付には「仇婆横行は昔の夢。棲とる手に銃後を握る芸妓。昔は見番四つ芸妓二百余人。今は見番一つ、

七十余人」と蓬萊町について書いて書いている。

だいたいがね、うちの人も、あんまり商売ってこと好きでない。それでもって止めれー止めれーってね。弟子なんて使っていられなかつた、全部徴用へ行つてね。私もですよ。朝六時から行くんです。船から鮭をもつて、こで運んだり、缶詰の箱を工場へ運んだり。亀田の網工場へも行きました。赤川に飛行場を作るって、リヤカーで砂利運びもしました。町内で何かつては引つ張り出された。子供いなので目付けられてたんです。うちの人も徴用で（函館）ドックに行きましたよ。だから、弟子皆返しちやつて。髪も結わなくなつて、芸者もチリポリチリポリみんな東京へ行つたりやめたり徴用で働きに行つたりでしょ。昔はこの辺だら、ズーとカフェーや料理屋並んでたのがなくなつてしまふ。これじゃ、とても商売できないからとまあ止めるつてことになつて……。止めたのは昭和二十年の六月でした。組合事務所の方で、おタネさん据置きにしておいたらつて、鑑札をネ。そう言つたけれど、そうしておけば未練残つて駄目だから。それに髪型も段々変わつてきた。その当時も私達コテ使つてや

つてたんですが、年寄り（姑）いるでしょ。パーマなんて駄目だつて反対して駄目なんです。だからパーマは全然です。日本髪では誰にも負けない位アレであつたけれどね……。

タネさんが廃業した二カ月後、戦争はやつと終わつた。タネさんは四十二才になつていたが、戦後の物不足かつ物価昂騰の混乱期を「子育て」に専心する。

戦後、養子にもらつた男児と、母親が倒れて困つてた筋向かいの豆腐屋さんの孫を生後二十一日から引取つて育てたという。「粉ミルクだつてなかつたし、お粥たいて、こすつて、大根や人参を煮た汁でのばして」苦労したかいあつて、現在、長男は東京で父親、育てた娘は市内松川町で母親になつて元気に暮らしていると、タネさんの細い目が更に細くなる。乳呑児を育てていた頃、かつての弟子で独立後湯川に店もつていた人が、酒飲みのお父を避けて女給の姉を頼つて渡満し、そこで結婚、四人の子供と旦那を引連れて頼つて来た時には、驚き、そしてとても困つたとか。姑に遠慮しながら、それでもタネさんは一時期、二階を貸し与えたこともありましたと

話す。

かつて、「髪結—島本タネ」の店として鳴らしたその家で、現在は夫孝太郎氏と静かな生活である。適度に日焼けし、大柄でふくよかな感じを与えてくれるタネさんだが、戦前から戦後にかけて洋髪専門だった田口フクさんが現在日本髪のかつらを結っていると話すと、「あの人は、日本髪ゆうなんてこと、全然なかつたんですよ。私はパーマはしませんが日本髪では誰にも負けない位でした」

この言葉からは、戦争末期、きつぱりと廃業して以来三十余年の時が経過したにもかかわらず、みっちりと徒弟奉公で仕込まれて成長し、そして繁昌した女髪結職人の心意気が伝わってくる。昭和二十六年美容師法が制定され、国家試験に合格した者は美容師免許証を得て、インターン一年で容易に美容師になれる、この現実をタネさんはどう感じていることだろう。



第一回港祭に若松タネさんが弟子達と徹夜で結びあげた蓬萊町各見番の若者衆（写真は若松さん提供）

大正六年十二月一日
函館遊廓略圖
巴里華漢意號附錄

見細柳花

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

巴里華漢意號附錄

あとがき

明治の歴史を見るような、中川のおばあちゃんのお話を聞くたびに、的を射ない質問しか出来ない自分を反省しました。

折登

歯科医の待合室で嫁を愚痴る老婆を見た。同じ年輪を加えるなら、ハナさんのようでありたいと思うのだが。

小林

ほんやりと家事をしていた主婦の私が、三十五才を契機に始めた仕事でした。今までにない自分を発見して見ます。今後、生活の指針にしたいものです。

伊原

女性史を書く事を夢にも見てなかった私が、取材していくうちに、もつと真剣に聞きとめておきたいと思い、日頃の不勉強さが恥ずかしいです。

佐藤

「ママは女性史で忙しいから……」と、八才になる娘がよく仕事を手伝ってくれるようになりました。

立花

キサさんは喘息だ。この見晴町に住んでから、雑草の花粉でなつたとも聞く。ひたすら元気で働きつづけて下さることを祈っている。

五十嵐

基本的勉強不足、史的視点の欠如、具体的事実の描写不鮮明、柔軟に学ぶことの難しさ、等々を痛感して寝れぬ夜もあつた苦しかった夏よ、サヨナラ！

近藤

主婦の甘えを捨てて、持続的なとりくみをしたい。

酒井

私達にも、近い将来確実に訪れる老年期、はたして明治の女達のように、しぶとく、ひたむきな生き方が出来るだろうか。

紺野

グループの中でただひとり、二十代の私ですが、一に学び、二に学び、足音静かに近づきたい……。山下

一歩ふみだした細い道。三歩、五歩と広げたい道。その道が確実に消えない道にするのも私達の役目。それにしても、書く仲間が欲しい女性史研究会。

村元

昭和五十五年一月

會員住所録

五十嵐綾子	函館市日吉町二丁目二十ノ三十三
伊原祐子	昭和町一六六ノ八
折登キミ	日吉町一丁目十三ノ三
上遠野君代	深堀町二九ノ一
清野きみ	人見町十一ノ十六
小林八恵	青柳町三十四ノ六
近藤弘子	神山町一三七ノ二十一
紺野洋子	日吉町四ノ三ノ二十四
酒井嘉子	花園町十四ノ五〇五ノ四〇一
佐藤恒子	中島町十四ノ十五
佐野浜子	本町一ノ四十
田尻聡子	上湯川町十六
立花千代	本通町二二五ノ十二
林節子	花園町一ノ二
船矢美幸	湯川町二丁目五ノ十
村元成子	日吉町二丁目七ノ六
母袋道子	日吉町三丁目二十四ノ五
山下理恵子	青柳町二十ノ十三

会友住所録

山内洋三 市立函館公民館社会教育主事
 当作守夫 市立函館公民館参事

道南女性史研究 第三号

昭和五十五年一月三十日発行

頒価実費 五〇〇円
 送料 二〇〇円

編集と発行 公民館講座ミセスアカデミー

(道南女性史研究)

発行所 040 函館市青柳町十二ノ十七

連絡先 041 函館市日吉町二丁目七番六号

村元成子

電話 (〇一三八) 五三一〇九六六

印刷所 ずき印刷

住所 040 函館市栄町十三番七号

電話 (〇一三八) 二二一二五〇一



